

連載専門誌

対人援助学マガジン



第二号

2010/09/15



対人援助学会



目次

1 工程・1Yen ~知的障害者の労働現場 2 ~	千葉 晃央
社会臨床の視界 (2)「あいだ」への関心 加害者臨床	中村 正
ケアマネの会った家族たち ~家族理解と家族支援(2)~	木村 晃子
街場の就活論 vol.2 新卒採用に今、何が起きているのか~	団 遊
心理療法が始まるまで ~コミュニティと病院で(2)~	藤 信子
ケースのツボとそこに合わさる言葉(1)	岡田 隆介
映画の中の子どもたち 2「クロッシング」	川崎 二三彦
子どもと家族と学校と 「私立高校1年生・ハヤト・不登校」	中島 弘美
蠍の斧 社会システム変化への介入 part1 第二回	団 士郎
学校臨床の新展開 学校と児童虐待	浦田 雅夫
場が生まれ、人と会う メタロークな世界への誘い	北村 真也
幼稚園の現場から(2)	鶴谷 圭一
福祉系対人援助職養成の現場から	西川友理
我流子育て支援論 ~妊娠をめぐる~	河岸 由里子
不妊治療現場の過去・現在・未来 2 ~生殖革命の時代~	荒木 晃子
対人援助学の里程標 2	サトウ タツヤ
小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー 2. 船出	尾上 明代
家族造形法の深度(2)	早樫 一男
旅は道連れ、世は情け 前夜 ~女であること	村本邦子
形づくる人々 第2回	柳川 正賢
新連載 きもちは言葉をさがしている 「紅茶の時間」とその周辺」第1回	水野スウ
新連載 やくしまに暮らして 第一章 なぜ屋久島なのか ネイチャーガイド	大野 睦
執筆者一覧	
またまた長い編集後記	編集長&編集員

告知 対人援助学会 第二回大会

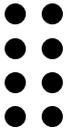
2010年11月6日(土) 立命館大学衣笠キャンパス敬学館

詳しくは学会HPで <http://www.humanservices.jp/>

「対人援助学マガジン」関連企画 14:40 - 16:10

対人援助学マガジンの可能性

—WEB 雑誌連載執筆の面々が語る対人援助の今—



0 0 2

1 工程@1 円 ~

知的障害者の労働現場

利用者が仕事上の戦友

千葉 晃央 (京都国際社会福祉センター)

1 工程@1 円でいいのか？

そもそも、「1 工程@1 円」というタイトルについて、触れておきたい。「作業工賃の相場やし。」私が働き始めてすぐの頃、先輩に言われたことばだ。一般企業の感覚を持っている方にしたら、「安い！」と思われるだろう。これは、本当は、内職さんの価格相場である。当然、この状況には満足していない。怒りも込めてのタイトルだ。

先方の業者の方と話しをしていたら、「内職に仕事を依頼するか？」「刑務所に依頼するか？」「福祉の作業所に依頼するか？」どこにふっても、あんまり変わらないというのが企業の側の見解のようだ。そんな

中でも、それぞれの依頼先には特徴がある。

刑務作業は、昨今の刑期中の社会復帰、更生プログラムの時間の増加で、刑務作業時間が減っているようだ。前回、書いた日本国内の低賃金労働市場は福祉系、刑務系ともに規模が縮小、ということはつまり、ますます商品加工のコストがかかっているかもしれないのだ。さらに、大前提として、刑務所という枠組みの中での作業なので、時間、場所の拘束もあるだろう。

福祉での作業の特徴では、内職さんが好まない仕事があるのだ。つまり、企業にとっての福祉施設に出すメリットである。普通の自宅でしている内職作業では、大きなもの、そして大量のものや、かさばるもの(体

積が大きいものは、置く場所が限られる。油などで、手や屋内が汚れるものは敬遠される。重たいものは、内職作業の主戦力である女性には運べない、もしくは運べても体力への負担が大きい。そして、臭いがするものは、家が臭くなるので敬遠される。

この、大量で、大きくて、重くて、汚れる可能性があって、臭いがあるもの…。それらを、普通の内職さんの自宅での作業に比べると、福祉施設はある程度はクリアできるのでそんな仕事をさせていたideていることが多い。福祉施設にしたら、逆にそこが強みだ。油系のにおいがある、重いものとなると、ネジ、工業製品の金属製部品などが経験した作業だ。大きくて、臭いがあったというものでは、服飾系のタグ付け、畳み、包装作業だ。

福祉職が商談

これら、企業と福祉施設の状況を踏まえ、商談が行われる。とくに単価の交渉と、作業工程の量、納期とが要点になってくる。福祉施設も利用者の収入を守るため、企業も利益を守るための交渉だ。もちろん「真剣勝負」。時には、「足元を見る」、「足元を見られる」というような状況と思えるときもあるし、「関係性重視故の厳しい折衝や、逆に譲歩」というような状況もある。このあたりのやり取りが就労施設系の福祉職には求められる。

福祉職なので、多くのスタッフはそんな研修や経験は少なく、もちろん福祉領域でも学ぶ機会はない。どちらかというとうことが苦手で、福祉という職種を選んでいることが多い。他者との緊張場面が基本

的に苦手で、それ故企業との商談での交渉ができず、なおかつ、一般のモノづくり業界の相場を知らない。その結果、時には価格破壊?と思うような単価もある。福祉がしたかったなので、単価交渉とか、作業を円滑にまわすなんて、やりたくない。もしくは、私には高度過ぎてできないという新人もたまにいる。支援と作業の両立という就労施設系の職員の命題が、自分には重いというのだ。

なかなか辿り着けない定番商品

どのくらい仕事があるかも、重要になってくる。短期で終わるものを「スポット」といっている。逆に、長く続くものは「定番」といわれ、作業する側はとても歓迎する。スポットだとさまざまな作業に必要なもの、作業に使う機械、補助具などを準備しても、その仕事が終わると役目が思ってしまうからだ。定番だとこれからも続く。となると、時間も、お金もかけやすく、利用者も習熟するし、それを踏まえた支援の計画も立案できる。

とはいえ、定番商品の作業をするチャンスはなかなかない。企業が下請けに外注で出すという時点で、その一時を乗り切る手段であることも多い。なので、仕事も定番ではない。つまり定番作業はのどから手が出るほど欲しいものだ。

定番にも問題は付きまとう。日常的に定番商品の生産に入ると、その仕上がる量が課題となってくる。日産いくら、月産いくらというところだ。一つの施設でできる作業の量は、何千ぐらいまでなら、感覚的に大丈夫と感じるが「万」まで行くと、その作業日数に余裕があるかなど、慎重な判断が迫ら

れる。福祉施設というところの生産に関わる利用者の数と目標数がキャパを超えてくることがあるのだ。その時には、残業で対応する。職員だけの残業、利用者も交えた残業とやり方はさまざまだが、いまやっている仕事を大切にしている、社会に役に立ちたい、お金を稼ぎたいという一心だ。

1 作業につき、少人数作業

一方で、一つの作業を施設内の大多数がしていることはリスクマネジメントの観点から行くと、かなり危険だ。その仕事が無くなってしまうと全滅になる。明日から何する？となりかねない。作業は数種類あり、集中しすぎず、分散している状況を作るようにしている。その結果、多くて数十人の福祉施設が多いので、それを多種の仕事に分散させると、一つの仕事に従事できる人はさらに少なくなってくる。

一つの社会福祉法人で複数施設を持っているところでは施設間の協力態勢で大口の仕事ができるが、小規模の施設では難しい。小規模の作業所では作業室が、お昼には食堂になるということも多くそのハードの面で、すでに十分に作業収益が限られてしまう。つまり、就労系の福祉施設は内職さん以上の数ができて、一般の業者よりは数が少なめの仕事を請け負うことが多い。

仕事上の戦友

プロ野球チームの優勝セールは大変だった。ほぼ勝つだろうと仕事がスタートし、

数が半端じゃない。その会社のパートさんたちと福祉施設への外注とで必死にこなす。優勝決定前には、優勝セールになっても、残念セールになっても、店に並ぶ商品の加工の作業をするが、優勝した場合は決定後すぐ追加が入る。けど、負けると、入らないかもしれない。そんな流動的で、先のわからない状況にも遭遇する。追われている作業を必死にやりながら、日本シリーズの勝敗に一喜一憂した。注文があるから、うれしいような、大変のような...

そんな必死な作業をしていると、援助者と利用者は、援助関係でありながら、もう一方では、「戦友」のような関係性ができる。知的障害者の就労現場では、できる人が、できることをやるという感じで、日々の作業は回っていく。

加工作業の中心的なところは利用者が行い、相手との交渉、全体の進捗状況の把握など、コーディネートの部分、仕上げの検品などは職員がする。

女性の職員は、重い箱が持てないけど、利用者の男性は持つことができるので、その人が持つ。職員よりも、健常者よりも上手にはやく、作業をこなす方もたくさんいる。それを目の当たりにした実習生や見学者などは「障害者=被援助者」であるという単純すぎる構図を覆されるの常だ。ある場面では、どっちが健常者なのか？というところだ。健常と、障害と分ける2分法に疑問も感じていく。その現場の職員は、そのことを嫌というほど知っている。

このような、援助職と利用者の当事者のナラティブ(当事者の物語)は、今の福祉では、あまり扱われなくなってきた。福祉の現場で起こっている関係性のうち、援助者から被援助者の方向に向かう関係性だけ

を取り上げることは、ある一面しか見ていない。これは、本当によくない。福祉職は複眼的視点を持つ、多元的なとらえ方をすると散々、ソーシャルワーク論で自分たちがいっていながらである。自らが長年培ってきた利用者との関係性についてのメタなところでは、どうなっているのか？

長年、同じ仕事場で、同じ仕事を、汗を流し、涙を流し、共に取り組んできた利用者との関係性。この当事者たちのナラティブは共通の部分がたくさんあったのである。それが、自立支援法だなんだと、急に手のひらを返したように、援助職は操作をする側となり、ともに歩んできたことを忘れ、否定し、「これこそがプロだ」と言い始めたのが昨今だ。福祉職のおごりではないか？福祉職の支援が、医療などのように、それほど絶対的ではないという謙虚さ、自覚を忘れたくないと考えている。

福祉職の分野では、自己覚知が重要といわれる。自分の性格、傾向、価値観、そしてそれらの偏りを知り、それを踏まえて、支援をせよと。福祉のソーシャルワーク論こそ、今、自己覚知が必要ではないか？

家族より、施設職員の同僚よりも

夜寝ると夢の中でも利用者と一緒に作業をしている。実際、利用者にしても、福祉職にしても、それぞれ自分の家族よりも一緒にいる時間が長いこともある。そんな日々を15年も送っていると、利用者が仕事上の関係者である、被援助者である、利用者であるということは、最重要事項ではなくなってくる。同じ時代を生きて、同じ

所で汗をかいた関係性というものはゆるぎないものだ。

事実、私がこの業界で一番長く一緒に働いている人は、利用者の一人である。その人は駆け出しの大学生に毛が生えた程度の自分のことも知っていて、そのころもお世話になった。真夏の暑い日に山ほどのお中元の仕事を一緒に格闘した。そして、15年お互いに歳を重ねた今も、一緒にリサイクルの仕事で肩を並べて取り組んでいる。非常勤職員、契約職員が増えている流れ、そしてその一方で同じ施設に長くいるという状況がなかなか変わらない知的障害者領域の実態。

以上を考えると、今後さらに一番長く一緒に働いたのは利用者であるという経験をする福祉職は増えるだろう。そのとき、福祉職はその事実をどう自分たちでとらえ、位置付けて、歩いていくのだろうか？



社会臨床の視界

(2)「あいだ」への関心 - 加害者臨床 -

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科教員)

1. 社会臨床というアプローチ

前回の最後に記したような経緯で豪州にいったのはそこでナラティブセラピーに触れたかったからである。その後、残念ながら、その旗手、マイケル・ホワイトさんが急逝した。2008年4月5日のことだった。59歳だった。カリフォルニアのサンディエゴでワークショップをおこなっている時だったという。何度か南オーストラリア州のアデレード市にあるナラティブセラピーの拠点となっているダルピックセンターで教わったこともあり、これから本格的に勉強していきたいと思っていた矢先だった。

筆者がナラティブセラピーに関心をもったのは、後述する暴力の加害者臨床についてアメリカのそれとはずいぶん異なる内容で展開していたナラティブセラピストに接したからである。アメリカのドメスティック・バイオレンス(以下、DV)についての加害者臨床は、暴力が相当程度に広がっている社会に相応しく矯正教育として徹底しており、加害への直面化と被害者理解が前景化している。その結果、必ずしも臨床とはいえない内容となっており、加害者の固有のニーズに届いていないとかねがね思っていたからである。今回は筆者の関心の経過も紹介しながら、社会臨床の重要な領域である加害者臨床について記してみたい。

まず、前回のおさらいもかねて社会臨床という表現に込めた意味について述べてお

こう。筆者の専攻は社会病理学である。しかしこの分野には難儀なことが多い。たとえば社会病理の諸現象は数多くあり、人々の耳目をひき、関心を持たれるテーマが多い領域となっているが、ではそもそも何をもって社会病理とするのかという定義が難しい。せいぜいその社会の、その時代の人々の数多くが社会病理だと定義するところのものだとはかといえない。したがって、定義の恣意性という問題が指摘されることとなり、社会構築主義の対象となるのがおちである。

とはいえ他方では、心理臨床化する趨勢があるとはいえ、要援助的な課題が数多く生成していることも事実である。こうした臨床ニーズは、自己責任を強調する個人化する社会にあってはひとりひとりの生きにくさ、苦悩、傷つきとしてあらわれ、その個人の回復と再生に関心が向かうこととなるからである。しかし実際はどうであろうか。人を追い立て、ストレスに満ち、リスクが遍在し、多様な格差があり、拝金主義も散見される、そんなダークサイドを無視できない生きにくさがある社会であり、しかもそのなかでの生きにくさが個人の責任や偶発的な不幸としても意識され、因果の有り様が「メビウスの輪」のようにねじれているので、心理・行動的な問題が表面化するにいたる人々の共同性や集合性のあり方、関係性の結び方や綻び方、認知と行動の特性、感情表出の様式等を視野にいれてそれらを総称することがいいのではないかと考

え、心理臨床という表現ではなく社会臨床という言い方を用いている次第である。

これはまた、こころの専門家の必要性をめぐる臨床心理学のあり方、とくに資格問題をめぐって論争があることと無関係ではない。さらにもっと穿った見方をすれば、臨床のニーズをつくりつつそれに応えるようにして、現在では多数の学会や団体が発行する資格が乱立する事態となっている。医療、精神そして心理の世界では新しい名付けも多い現象が数多くある。

この連載ではそのことに主題を置き、社会モデルを提唱しようとしているわけではない。至極当然のことに関心があるだけである。それは社会と臨床との関連を問うことである。したがってここでいう社会臨床は、これら経過のどちらでもなく、またそれぞれ首肯しうる点はどちらであれ参考にするという「優柔不断なもの」である。繰り返してであるが、臨床は社会との関わりを無視できないという当たり前のことをいっているだけである。言葉を換えれば、多様な臨床のニーズをとおして透視されるだろう共同性、日常性、関係性、社会性、制度性がよく見えてくるという意味で社会臨床という言葉を使っている。このマガジンでは、もっと緩やかにこうした関心をもつ者がどんな研究に関わり、実践を志向するのかということ表現したくて「社会臨床の視界」としている。

2. 陰翳が写しだすことへの関心

このような関心をもつに至った筆者なりの背景がある。これまでの知的関心の経過（おおげさにいえば研究史）そして筆者自

身のライフサイクルの変化（家族の歴史も含んだ個人史）さらに同時代の出来事が示す社会史のそれぞれが交錯して織りなすなかで浮かび上がった事項である。

個人史という点では、同棲生活の開始（婚姻届をださない共同生活。俗には事実婚といわれている。）や非嫡出子の誕生（任意認知届けと出生届けを提出した。）をとおして体験した家族に関することや、その延長線上にあることではあるが、当時2歳半の娘を連れた「子連れ単親赴任」の経験が大きかった。それは1994-1995年のことであった。大学から在外研究の機会をいただきカリフォルニア州立大学パークレー校（サンフランシスコの湾をはさんだ東側の大学都市）へと渡米した。このときの在外研究では、今もなお持続しており、後に詳述する加害者臨床や男性性研究というライフワークと出会うことになる。

さらに社会的な出来事があった。阪神淡路大震災とオウム真理教事件である。阪神淡路大震災は別の機会に記したいが、ボランティア活動、NPOやNGO等の非営利活動、大学のあり方、震災復興と対人援助というそれ以降の筆者の関心の地平を変容させた大きな契機となっている。オウム真理教事件は社会病理そのものの表象であった。これらは社会臨床というものの見方の形成に役立っている。

この後に、本マガジンの母体である対人援助学会が組織されていく背景となった大学づくりの実践が続く。立命館大学大学院に応用人間科学研究科を開設したことである。当時の文部科学省は定員の抑制をおこなっていたが、人材育成の必要な分野については例外的に学生定員の拡大を認めてい

た。その一つが、心理、福祉を中心とした対人援助の分野であった。臨床心理学だけでなく広くそれを対人援助学として統合した人材の育成をこころざすこととなった。そのなかで、学ぶべき科目として置いた社会病理学の臨床への貢献を意図して臨床社会学を標榜しはじめた。遡れば、それ以前から中村雄二郎が「臨床の知」を提案していた。臨床哲学は木村敏や鷺田清一が唱えていた。臨床文学、臨床教育学や芸術のもつ臨床性も語られはじめた。臨床社会学といういい方には、直接援助を社会学の知見をもとに実践しようとする志向性を込めた。その他、臨床という名前ではなくても質的研究の関心が広がってきたことも類似の動きだろう。

何らかの臨床的な課題は、一見すると、否定的なこと、病理的なこと、困難なことのよう観念されるが、しかしそのなかにこそその社会のもつ対人関係やコミュニケーションの仕方の変化や再構築にむかう契機がある。そこには「炭鉱のカナリア理論」ではないが予兆のようにして現在とは少し異なる共同性、日常性、関係性の暗示もしくは示唆があると思うからである。この感受性は、たとえていえば谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』（中公文庫）に近いかも知れない。谷崎は日本文化が宿す陰翳のことを記している。前回に印象を述べた豪州のくつきりとした昼と夜の対比とは明確に異なる薄暗さの、墨絵のような翳りが建築、美術をはじめとした文化を覆い、日本人の美意識、価値観や志向性を構成しているというのである。もちろん谷崎は臨床のことを語っているのではないが、人生も同じように憂いに満ち、不幸に出会い、挫折をし、他者や

自己を傷つけ／傷つけられたりして時間が経過するので、そこの影と陰をこそ見つめたいと思う。具体的には、ひきこもり、不登校、家庭内暴力、虐待、DV、非行や犯罪はどんな日常性、共同性、関係性を介して生成してくるのか、その境目にある「連続のなかの不連続／不連続のなかの連続」の、ねじれてつながるあたりがこの陰翳と重なる。こう考えると、これらの問題現象を断定的に語ったり、診断したり評価したり、わがことは放り投げて悪として断罪したりすることはしたくないし、できないだろう（この原稿を書いている最中の事件としては大阪市西区の2児置き去りネグレクト餓死事件がそうである）。これらをどんな問題として理解し、いかなる視点で見るとかを定めることが大事となる。

別の言葉でいえば、白黒つけることのできない「あいだ」にある問題とも言い換えることができる。同じような感性は村上春樹ももっている。加害と被害のつながり具合について村上春樹がオウム真理教問題取材したインタビュー集『アンダーグラウンド』（講談社文庫）のあと、加害者とされる人たちにインタビューしたものを編んだ『約束された場所で - underground 2』（文春文庫）に掲載されている。村上春樹はネガティブなものへの関心があるという。たとえば「・・・良くも悪くも社会システムの中ではやっていけないという人たちは存在していることは確かだと思うんです。そういう人たちを引き受ける受け皿みたいなものがあっていいんじゃないかと僕は思いますが」という。そして、「これは小説家として思うんですが、ネガティブなところから出てこない物語ってないんですよね。物語

の本当の影とか深みを出すのはほとんど全部ネガティブなものなんですよね。ただそれをどこで総体的な世界と調整していくか、どこで一本の線を引くか、それが大きな問題になると思います。」「麻原の物語というのは結局彼のパラノイド性に汚染されていくわけですが、そのパラノイド性に対抗する有効なワクチンの物語を社会が用意できなかったというのはやはり問題ですね。」「社会そのものにはあの事件を防ぐだけの抑止的ワクチンは備わっていなかったけれど、人々の一人ひとりの語る物語の中には、やはりたしかな力を感じるんです。潜在的な力というか。そしてそれらの物語をひとつひとつ集めて積み重ねていけば、そこには何か大きな勢力が生まれるのではないか」と話を続けながら、「悪を抱えていきることへと話題が展開していく。

3. 悪を抱えていきる - 加害者臨床論の話

さて、その悪を抱えて生きることの臨床の例として、ここでは加害者臨床について紹介しておきたい。筆者はDVと子ども虐待に焦点をあてた脱暴力への支援や刑務所での性犯罪再犯防止プログラムを実践しているのでそれらの実践をもとにして加害者臨床について考えてみる。もちろん直輸入をすればいいというわけでないが国際社会では、加害者臨床理論や司法臨床制度の新しい取り組みが進みつつある。そのなかにおいて、DV、虐待という同じ問題に悩まされつつも十分に加害者対策が講じられていない、したがって脱暴力化への更生援助の取り組みも十全ではない、要するに伝統的な司法の枠をこえずにいるのが日本社会であ

る。脱暴力への行動変化を目指すプログラム参加命令が制度化される兆しもない。とはいえ、家庭内暴力の現実には臨床の現場に脱暴力化の実践をまったなしで求めている。親子や夫婦、一般的には親密な関係性における暴力への対応の社会臨床的な制度デザインと臨床の技法とそれらをささえる基本的な司法と心理にかかわる理念等の諸点から総合的に検討が要する課題となっている。

1) 親密な関係性における暴力を克服する社会の努力

家庭内暴力加害者の脱暴力にむけた更生機会の提供が施設内であれ、社会内であれ、プログラムとして制度化されてきている。アジア諸国においても家庭内暴力加害者向けの教育プログラムがある。たとえば韓国では保護観察制度の一環に暴力を克服するための受講命令が制度化されている(2010年3月にソウル市保護観察所を調査した際に拝見させていただいたプログラム指導者用マニュアルによる)。命令を受けて保護観察所へ定期的に通いながら受講するプログラムは、「心を開くこと」「家庭内暴力の理解」「家族についての理解」「家庭内暴力はどのように発生するのか」「非暴力技術：怒りマネジメント」「非暴力技術：コミュニケーション」「非暴力への障害としてのアルコール、ストレス、低い自尊心」「家族関係の回復」という8つのモジュールを27に細分したセッションとして展開されている。また、筆者が加害者臨床の確立にむけて家庭内暴力加害についてアメリカで調査を開始したのは1994年のことであり、その時すでにDV加害者向けプログラムや虐待親プログラムが機能していた。それ以降、臨床技法の

精緻化も含めて、国際的には相当な理論と実践の蓄積がある領域となっている。

対象を一般的な対人暴力とは区別して親密な関係性における暴力と定義しているのは、暴力生成の関係性と相互作用過程を重視しているからである。それは情動的なものが形成され、感情表出の場としての特別な機能と役割を發揮する心理 - 社会的な関係性の典型として家族的なものがあり、それが暴力の抑止と生成に重要な役割を發揮するからである。刑事政策としての加害者対応だけではなく、心理臨床としての加害者臨床が大切だと思う理由がここにある。加害者の愛着形成までに遡り、友人関係や仕事の選択をとおして、ストレスのある社会を生き抜くための戦略として身につけた暴力と虐待が「鎧」のようにして、場合によってはある種の「自己実現」として機能しているようにみえる。加害者はパワーとコントロール感、コミュニケーションとしての暴力と虐待という意味づけ、安易に得られる達成感や満足感としての弱者にむかう暴力、ストレスコーピングやカタルシスとしての観念をグループワークで語る。そうした自己を実現させる対象と関係を周囲に配置し、環境として組織し、行動化して生きている姿がそこにある。親密な関係性や家族的な関係性はこうした暴力と虐待を構築する「感情共同体」としてある。その関係の密度（他者との境界の喪失）がもたらす「被害と加害の非対称性（親密な関係性やそれに類似する相互作用のなかで）」を基盤にして暴力と虐待が生成する。「加害者の認知的、行動的、情動的な防衛戦略」として「生き方の習慣」となっている。そしてそれを支えるようにして閉ざされ、逃げ

ることのできない環境において「被害者の生存戦略（加害者との同一化、トラウマ的な絆形成、共依存現象等）」が形成される。こうした特徴をもつ暴力と虐待であることを視野に入れて脱暴力に向かう臨床へと向かわせる制度と援助技法を編み上げることが加害者臨床には期待されている。

2) 男性のための脱暴力グループワークの実践

加害者臨床に向かう公的な制度は DV と虐待に関しては成立していないので任意の取り組みとなっている。DV の保護命令制度等の被害者支援の施策や DV が原因となっている離婚の際の調停制度等も暴力対応として首尾よく機能させられるべきであることはいうまでもない。くわえて、もう一面の加害者対策も早急に制度が作られるべきであるという考え方にに基づき、自主的な取り組みを開始した。前者はメンズサポートルームという民間団体、後者は自治体（大阪市と大阪府）との連携としての実践である。

こうした脱暴力のプログラムはグループワークが基本となっている。グループワークは集団精神療法としてすでに確立された手法である。たとえば 8 人程度の小規模なものに二人の指導者が規模としては運営しやすい。他に筆者の関わるグループワークとしては少年刑務所で関与している性犯罪の再犯防止プログラムがあるが、矯正施設内グループワークなので比較的構造化しやすい。それに比べると、制度が未確立の DV や虐待については構造化が極めて難しく、参加者数や回数、参加の動機形成と持続性等が困難である。したがってグループワー

クとしての一定の環境を保証できずにいるが、苦肉の策として採用しているオープン参加方式、半構造化されたプログラムは、半強制（妻にいわれて参加している、児童相談所に勧められて参加しているという中途半端な動機がもとになっている）であるが、自発的に参加していることとして動機が仮構（仮説のようにして置くこと）できることもあり、男性や父親にとっては「持続する動機形成」にむかうための「すべりだし効果」をもっている。「いやいや、しぶしぶ、重い腰をあげて」という鈍重な立ち上がりの「難儀さ」が男性たちには適度である。これをとらえて臨床家は「動機づけられていない、非自発的な、抵抗するクライアント」として烙印を押すが、筆者はこうした当事者意識や心理は至極自然なことだと思う。脱暴力への信頼関係を構築する際にこのような態度をひとつの契機として活用すべきだと考える。これを「心理的格闘」という（これはまた動機や動機形成とは何かという別の面白い問題を提起しているが別途、記してみたい）。もちろんこの取り組みは本格的な加害者臨床の制度化をめざす前段階的な位置づけでしかないことも半面の事実である。

グループワークでは、認知行動療法とリハビリテーション、怒りマネジメント手法の取得、ストレングス・アプローチ（その人の善いところを伸ばし問題点を自己修正する力を養う）、失感情的な状況に対応する心身再統合（他者との共感性を育むための感情への気づきの促進）、ソマテック・アプローチ（身体の感覚統合をめざすもの）等を内容として、二週間に一度、二時間のプログラムを組み立てている。虐待親の場合

は、家庭裁判所が二年に一度の親子分離の再点検を行うのでそれに合わせた期間、DVの場合は保護命令や調停の期間をひとつの目安として参加を促している。司法の関与はこうした枠の設定に効果があり、動機形成の重要な契機となる。しかし、脱暴力への変容は長くかかる。その間に、被害者のケアと立ち直り、離婚や親子分離の継続等の家族再編が並行してすすむ。

グループワークはそれ自体がコミュニケーションの「やり直しの場・練習の場」としてある。それまでの「生き方の偏り」が社会の認識次元の変化によって衝撃としてもたらされる。夫婦喧嘩ではなくDVとして、しつけではなく虐待として新しい定義が外圧として衝撃力となる。しかし問題はその後である。過去の生き方の再構成が求められる。暴力と虐待を肯定するような都合のよい生き方や暴力を否定しない思想が認知と行動としてあり、身近な人を傷つけても平気な程に感情は鈍磨している。

グループワークは自己開示と変容のための安全な場として機能する。それまでになかった異なる関係性を体験する。「外には七人の敵がいる」という「男らしさの鎧」を身にまとった男性たちは異口同音に職場や友人には話せないことが多いという。たとえば、相互信頼を確認するためのソマテックなアプローチ（身体接触や感覚の鋭敏化のためのワーク）をすると彼らの身体が一様に「堅い」ことがわかる。また、交わされる会話も男性的である。参加した最初の段階では「このプログラムは役に立つのか」と距離化を試み言語ゲームで乗り越えようとする男性もいる。他者とともにあることの意識や身近な他者の気持ちを斟酌することが苦

手である。そのことは同時に自分の気持ちにも鈍感なことと表裏一体である。

グループワークは集団ではあるがそこにおいて援助者との二者関係を弱くてもいいので構築することも大切である。これはグループワークの指導者に求められる資質でもある。グループは回を重ね、自己開示がすすむにつれて相互に関係性のストロークが形成されていく。参加者はこれまでこのようにして対人関係を形成していたと推測できる自然な自己提示となる。こりがほぐれていくような様子である。時間の経過とともにグループの凝縮性も増していく。グループワークのなかで「うまくコミュニケーションが機能したな」と思える瞬間を活かして行動変容している諸点を前景化し、肯定し、意識化する。善い変化を強化する。その変化が意識しやすいようなモジュールを組む。ロールプレイの素材にすぐに取り入れる。

さらに、このグループワークは「言いつばなし聞きつばなし」ではない。相互に関わりあうことを重視する。たとえば、この二週間の自己の平穏さや葛藤について「私」を主語にして話しをシェア。それを傾聴する。最後に聴いたことをアサーティブにフィードバックシェア。「私はあなたの話をこう聞きました」と返す。オープン参加(その都度、新しい参加者がはいてくる)なので、以前から参加している人は自分にとってこのグループはどういう場であるのかを必ず語ってもらう。以前からの参加者であっても毎回意味づける言葉が異なり、深化している様子が語彙や文脈構成の広がりから理解できる。他者への共感的な態度と自己開示もみられるようになる。

グループへのチェックインとチェックアウトの儀式も重視する。グループワークは自律訓練法による導入から始まる。軽いストレッチのあと呼吸を整え、意識を集中するイメージトレーニングを実施する。終わりは、次の二週間が平穏であるようにみんなを確認し、全員が全員に握手をして終わる。参加証に担当者が押印する(ラジオ体操方式)。トークンエコノミー式に虐待の再統合にむけて活用した人もいる。グループワークへの参加二回につき子どもとの面会を一度可能にするというプログラムを修復プログラムとして組む事例もあった。

こうしたグループは小さく社会を成している。女性が参加していないので男性同士の社会である。ホモソーシャルな関係という。下手をすると男性同盟に堕ちてしまうので、指導者には訓練が要る。首尾よく機能すると治療同盟となり社会臨床的に役割が大きくなる。グループワークはジェンダーの意識や態度を含めた男性性文化が持っている加害(加担)性・暴力肯定性を保持する社会の集合意識を反映したものである。現代の社会がもつ物語(意味づけの体系)との関連を無視できないからである。具体的な場面では、男らしく抵抗し、「中和化の技術」「被害者非難」「正当化技法」というコミュニケーションがあらわれる。くわえて、「被害者の無力化」「加害を被害にすりかえるコミュニケーション」「被害者の加害性を引き出す巧妙さ」「虐待と指導とのはき違え」「被害者の尊厳の剥奪」「被害者に加害者の視点を内面化させる」等が無意識に語られる。それが何であれこれらを手がかりにして加害者臨床が動き出す。

動機づけ面接をはじめ、感情表出とのかかわり、男性性と親密な関係性の困難、思考と認知の独特な偏り、パワー関係への偏執等を対象とした脱暴力への援助実践となる。

また、男性との面談の際に留意しているのは、暴力を肯定するような男性性として身につけてきたものを削ぎ落としていくことを意識しているが、しかし保持している男性性のすべてを否定するわけでもなくて、そこに何か肯定的な男性性がありうるとしたら、それは何であるのかを明確にしていくアプローチである。そうした見地から取り組んでいる男性同士のグループセッションであることの意味に関して筆者が参考に行っている加害者臨床の最新の理論的臨床的動向について紹介しておきたい。

3) 加害者臨床の理論・実践・制度

脱暴力をめざした加害者臨床実践の新しい動向は制度的に位置づけられている。治療共同体、問題解決型司法、修復的司法、治療的司法、社会再統合・社会的包摂等の新しい理念も構築されている。それを支える社会的な心理臨床モデルとして、加害者臨床（司法臨床よりは広い概念）が体系化されている。こうした加害者臨床の理論は脱暴力にむかう司法と心理の新しい関連性を重視している。

しかし、加害者臨床に関しては争点が多い。たとえば、犯罪的ニーズと非犯罪的ニーズの区別、動的风险と静的リスクの区別を行い、どこに力点を置くのかという争点がある。犯罪的ニーズとは向犯罪的態度や価値、反社会的パーソナリティの諸相（例えば衝動的性格等）、問題解決能力の貧しさ、アルコールや薬物使用、敵意と怒りの感情、

犯罪的集団との関連等である。これらは動的风险として概念化され、可変的なものとして位置づけられている。再犯防止のための直接の対象となる。静的リスクとは変えにくい変数のことである。たとえば、ジェンダー、年齢、犯罪歴である。非犯罪的ニーズとは直接には再犯防止に関連のないものであり、低い自尊心、不安、個人的な苦悩、集団凝縮性等である。安全な感覚、自己評価、善き生等を高めることや治療同盟の構築にとって非犯罪的ニーズへの注目は重要となる。これ以外にも、リスクの評価と管理の仕方、教育プログラムなのか臨床プログラムなのか、ジェンダー論はマクロすぎて個々の男性の暴力を説明できないこと、加害者の多様性を考慮に入れないプログラムは無意味であること、修復や再統合は家庭内暴力にはいかにして応用可能か、調停前置主義と家庭内暴力の関係はどうすべきか等として議論が続いている。

加害者は程度の差はあれ暴力や虐待を肯定する「生き方の偏り」があり、そうすることで生存の戦略を組んできた。当該の個人が加害者となる過程を検討していくと、対人暴力が生成する親密な関係性（愛着の人間環境）、歪められた男性性、失業や離婚等のライフストレス、ジェンダー意識の変化、子どもの人権をめぐる社会の変化等のミクロからマクロの多岐にわたる変数（社会環境）の絡まり合いがある。マクロな要素と個人のミクロな要素を統合してそこへの介入と援助として対象へと働きかける際に「虐待的パーソナリティ」としてそれを意味づけている議論があり、プログラムの対象にとっては有益だと筆者はとらえている（この論はドナルド・ダットンにより *The*

Abusive Personality: Violence and Control in Intimate Relationship, second edition, The Guilford Press, 2007 において本格的に論じられている。全訳は今冬、筆者監訳のもと明石書店から訳出予定である)。対象となる「虐待的パーソナリティ」を具体的に視野に入れ、非犯罪的ニーズも含めて援助対象化することが重要である。それが加害者臨床の基本となる。新しい司法の制度化はその枠の形成に貢献する。その上で、法化社会のネットワイドニングに捕捉された広い意味での暴力、虐待等の逸脱行動を克服するためには「問題解決型司法」がセットされる必要がある。その背景に非犯罪的ニーズがある。非犯罪的ニーズは彼らの生き辛さにつながっている。

脱暴力へとむかうプログラムを社会が有することはひとつの希望でもある。殺人事件においてDV、虐待や親密な関係性における問題が背景にあることが元来多いので、貴重な実践領域だと考えている。ミクロな社会関係の基礎である家族や親密な関係性は暴力や虐待を生成させる過程でもあるが、そうではない人間を形成する場であることの方が多く、そこで作用している諸力を可視化し、日本にあった加害者臨床として構築していく好機だと考えている。

4. 「あいだ」を写す社会臨床の視界

社会臨床の視界からは「あいだ」がよく見える。心のケアを主眼とした被害者救済と罰を念頭においた加害者対策の「あいだ」にある溝を社会が脱暴力のための諸力や援助として有することは再犯防止や社会防衛という言葉以上の「関係性の修復」という

物語をもつこととして意味は大きいと考える。心理臨床と司法制度のどちらでもあり、どちらでもなく埋めていくための力をもつことが大切だと思う。こうした「あいだ」を埋めるための端的な取り組みがここで紹介してきた加害者臨床である。

「あいだ」への関心は多様に広がっていく。たとえば、オウム真理教事件後も教団活動を続ける信者の様子を映した森達也の『A』、『A2』もそうである。オウム真理教を排斥する人々とそれを近所で受け入れる人々の「あいだ」が描かれ、僅かだが交流が始まる。しかし遠くの人々は排除の運動を企てる。それが「加害者集団」の視界からとらえられている。他にもこうした質量感のあるテーマを秘めた「あいだ」はたくさんある。介護疲労と老人虐待の「あいだ」、しつけと子ども虐待の「あいだ」、夫婦喧嘩とDVの「あいだ」、薬物依存をめぐる医療と刑罰の「あいだ」(治療的司法や治療的共同体にむかうのか厳罰主義に向かうのかの大きな振幅がある)私とあなたの「あいだ」、私自身のなかにある過去の自己と将来の自己の「あいだ」、ワーキングマザーという言葉はあるがワーキングファーザーという言葉はあまり使わない(これは実際に筆者が体験した。ある新聞社の原稿で使おうとしたところ校閲部から使うなと指示されたことがある)ことの「あいだ」にある何かのバイアス、女同士が手をつないで歩いていてもいいが男同士が手をつないで歩くと注視されるかもしれないことの「あいだ」にある意識は何か等、問うていきたい課題はたくさんある。こうした「あいだ」に横たわり、何らかの生きにくさや臨床の課題(要援助的ニーズ)を生成させる文脈として、

私たちが生きる日常性、共同性、関係性をきちんと見据えることのできる視界を確保してみたいということでもある。

もちろん、その「あいだ」をみつめるのは怖い。ニーチェが言うように、暗闇をみつめると向こうから何かがこちらを見つめ返してくる、つまりそこに投影された内なる闇がみえてくるようで、見つめ続けるには勇気がいる。何よりもその「あいだ」には自分も立っているからである。

ついでに、あの世とこの世の「あいだ」（に成り立つ文化）もある。この夏、念願かなって下北半島の恐山と三沢市にある寺山修司記念館を訪れることができた。悲しみを癒す文化が確実に日本的なものであることの大事さを感じることもできた。こうした「あいだ」をきちんと考えることをとおして見えてくることをその都度の話題にそくして記していきたいと思う。

なかむら ただし

（臨床社会学 / 社会病理学 / 社会臨床学）



ケアマネの出会った 家族たち

2

～ 家族理解と家族支援 ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

隣の家族の物語

近所付き合いも希薄になりがちな昨今、隣の人がどんな暮らしをしているのかさっぱりわからないうちに、大きな事件が起こったり、孤独な死があったりなどをニュースで聞くことがあります。最近では、所在不明の高齢者の問題が話題になったりしていました。個人情報の保護という名のもとに、地域への必要な介入が阻まれ、人の優しさや思いやりの届きにくい環境になっている現状も否めません。気になる人がいれば声をかける、事件が起こる前に何かできることはないのか、もう少し気軽に気楽に自分のできそうなことがないか、あるいは、多少の面倒を引き受けたとしてもそれが長い目でみれば、暮らしやすい環境作りであったり、人とのつながり作りだということを感じることができる世の中であればいいと思います。

市民としてできること、専門職としてできることを丁寧に考えながら、関わる支援対象者の環境への働きかけを通して、地域や専門職自身の力をつけていくことが大切だと感じます。個人情報の保護というところに逃げないで、地域につながる、地域につなげる援助の仕方を身につけていきたいと感じます。

集合住宅で

シズエさんが、妹を頼りに長年慣れ親しんだ都心の社宅を離れ現住地に転居してから、かれこれ10年が過ぎます。夫の仕事の転勤で各地を回りながら、定年間近の夫は東京での勤務でした。社宅暮らしから、退職後は自宅を購入して、親しい友人などとの交流を楽しみながら暮らすのだらうなと思っていた矢先、夫の突然の発病、急死でした。夫が元気であれば退職後も夫婦寄り添って暮らし続けたはずが、夫がいなくなるとは、一人身は不安です。遠く離れた北海道には妹が暮らしています。少しでも頼れる

人のそばで暮らしたい、という思いから、現住地への転居が決まりました。その決断に一人息子は一緒に北海道へ転居することにしました。息子自身もまた、勤めを辞め、新たな地での就職です。そうこうして、70を過ぎたシズエさんと45歳になっていた息子さんの暮らしが新たな地で展開されることになりました。

頼るべき人が妹しかない土地での暮らしが始まりましたが、気品のいいシズエさんは少しずつ近所付き合いも始めました。田舎の人懐っこい住人たちです。玄関先の立ち話から、「ちょっと上がってお茶でも飲んで。」おしゃべりに夢中になってお昼時を迎えると「一緒に御飯でも食べましょう。」そんな展開も珍しくありません。

シズエさんが引っ越してきてほどなく、隣に越してきた、一子さんとは、よく話をしたり、食事をしたりする間柄になりました。

シズエさんは料理を作るのが好きで面倒見も良い性格です。食事時には、家にある材料で手早く食事を作ったりしながら、もてなし上手です。そんなシズエさんの好意に素直に甘える一子さんとの付き合いは、毎日のようにになりました。一さんは、夫を亡くし20数年も一人暮らしをしていました。一人娘は隣町に住んでいますが、長年の確執が親子の交流を疎遠にしています。一さんは、長年住み慣れた家を払って、この公営住宅に移り住んだのです。元々、商売をしていた一さんの人なつっこい性格や話好きが二人の関係を結び付けました。シズエさんにとっても、親しい人がいない土地での友人です。楽しい付き合いの時でした。

そんな二人の関係がぎくしゃくし始めました。体調を崩したシズエさんが、一さんと一緒に入っていた趣味サークルの旅行を欠席した時からでした。体調を回復したシズエさんが、近所の銭湯へ行った時のことです。銭湯で顔を合わせる人たちの様子がいつもと違います。「まさかね、シズエさんがね・・・」という声が聞こえます。不思議に思ったシズエさんが声をかけます。「どうしたの？」

そこで、言いにくそうに話始めた友人がいました。

シズエさんがこの間来なかった旅行の時に、一さんがシズエさんのことを泥棒呼ばわりしていたと

聞かされます。

これには、シズエさんもびっくりです。何のことかさっぱりわかりません。キツネにつままれるとはまさに、この事でしょう。

それ以来、一さんの話とはどめをしりません。シズエさんが物を盗んだ、シズエさんが一さんの家の前にゴミを捨てていく、など根も葉もないことを噂します。

周囲の人たちは、シズエさんがそのようなことをする人ではないこと、一さんの方が事実と違うことを言いふらしていることはよく理解しています。けれども、噂話の標的にされたシズエさんは心労がたまっていきます。ついには、体調を崩し入院です。今となっては、あの毎日行き来をしていた頃の事が嘘のようです。お隣同志は、今ではまったく接触がなくなりました。

一子さんへの支援開始

一さんの事実ではない噂話とはどまることを知りませんでした。周囲の人と一さんとの付き合いも遠のいていきます。

一さんの一人暮らしはだんだんと難しくなっていました。曜日が理解できずに捨てられず溜まっていくゴミ。立て続けに体調を壊し入院。民生委員や一人暮らしを心配する周囲の人が、地域包括支援センター（介護保険制度において、地域高齢者の総合相談窓口）に連絡をします。センター職員が本人の元へ訪れ、自宅での生活を支えるための諸手続やサービスについて説明。介護認定を受けた一さんの元へ担当ケアマネジャーが関わり、介護保険サービスが導入されました。

自宅での生活を整えるための訪問介護ヘルパー、定期的な入浴サービス利用などを目的にデイサービスの利用などが開始され、それに伴って、一さんの一人暮らしを支える関係者が増えました。ケアマネが中心となって、サービス担当者や民生委員、近隣住民とのやり取りの中、一さんは生活できています。けれども、隣のシズエさんに対する被害妄想や、事実と違う噂話がなくなることはありません。根も葉もない話を続けられるシズエさんの心労は続きます。シズエさんを心配した妹が民生委員を通して一さんの噂話の状況を訴えます。

どう応えることができるか？

さて、一端ここで状況を整理してみます。

この事例で最初にスポットが当たったのは、一人暮らしに支援が必要な状況である一子さんでした。一子さんへの支援が開始され、近隣住民の生活の安寧が得られていれば一件落着でした。けれども、一子さんへの支援が開始されても、近隣住民、特に隣家のシズエさんへの影響は改善されませんでした。一子さんへ関わる関係者が連携を取り、シズエさんへも配慮しながら、地域包括支援センターがシズエさんへ関わりを始めます。シズエさん以外の近隣住民は、一子さんの理不尽な行動に呆れる一方で「仕方ない人だ。」というあきらめも持ちながら、一子さんと距離をおきながら生活は続きます。そんな中シズエさんの気持ちだけはおさまりません。

シズエさんの心の中には、どのような気持が生じているのでしょうか。自分には非がないにも関わらず理不尽な攻撃にあうシズエさん。近隣住民は事実を理解し、シズエさんの気持ちもわかっています。「気にせず、放っておきなさい。皆、本当のことはわかっているのだから。」周囲がシズエさんにかかる言葉は間違っていない一般論です。

一方、勝手気ままに過ごす一子さんの元へは数々の公的サービスの支援があり、一子さんの気ままな生活は何食わぬ顔で継続されています。シズエさんの腑に落ちる訳がありません。そして、いつしか事実を理解してくれている周囲からも孤独を覚え始めているのではないのでしょうか。

不満や思いのたけを解き放つ時が必要なのです。

シズエさんの訴えを受けた行政窓口が地域包括支援センターへ連携をとります。支援センターでは、一子さんの担当ケアマネに連携をとります。

ケアマネは、この状況を受けて、本来であれば、シズエさんは、一子さんに言いたいことは山ほどあるだろうと想像します。けれども、理屈が通じず攻撃性の強い一子さんに面と向かってシズエさんが思いをぶつけることなどできる訳がありません。今こそ、シズエさんの不満や思いを受け止める役割が、一子さんを支援する側の自分（ケアマネ）にあることを察しました。

訴えられた思い

訴えを受けた民生委員は、担当ケアマネや地域包括支援センター職員と連携をとります。担当ケアマネは一子さんの生活状況を再度アセスメントし、本人の妄想が助長される原因を考え、また精神疾患の可能性もないか受診の必要性を検討し、精神科への受診がなされました。一子さんの現在の状況は精神的疾患ではなく、極端に偏った性格によるものとの説明を受けます。生活上の困難さが、周囲への被害妄想や攻撃という形で自分を保っていると考えられ、生活上の困りごとを軽減することで、その症状も軽減できるのではないかと助言がありました。本人の生活が不安や不便なくできるようにサービス担当者とも連絡を取り合い、具体的な支援内容を検討していきます。

地域包括支援センターでは、シズエさんの心労を少しでも軽減できるように、介護予防の視点から、シズエさんを訪問しシズエさんの話を聞いたり、気分転換を勧めたりします。

そのような状況の中、一子さんへの介護保険サービスは増やされ、訪問ヘルパーのほか、ディサービス、訪問看護、と関わる担当者が増えていきます。サービスは増えましたが本人のシズエさんに対する妄想は軽減しません。

シズエさんの心労はいっこうに減りません。

シズエさんは、時に一子さんの元を訪れるサービス担当者呼びとめ、サービスをしているなら、ゴミの始末などをきちんとしてほしいと訴えます。自分に向けられる被害妄想に対する抗議ともとれます。シズエさんのストレスや不満は解消される気配がなく、その思いは行政の窓口へ訴えられました。

隣の住人が自分に対して、根も葉もないことを言うこと。自分を泥棒扱いしているので、何かのほずみに自分への攻撃が増すのではないかと心配で生活もままならない。行政として何とかならないのか、と訴えます。

相談を受けた窓口も対応に苦慮します。この状況ではどうすることもできません。まさか、一子さんに住宅を出ていくように促す権限もありません。

そこで、一子さんの事で困っているシズエさんの話を聞かせて欲しいと持ちかけ、シズエさんの元へ訪問することにしました。

あまり体調がすぐれない、と周囲へ話していたシズエさんではありましたが、ケアマネのこの申し出にはすぐに応じてくれたシズエさんです。早速、シズエさんの元へ訪ねたケアマネは、「今日は、シズエさんのお話を聞かせてください。今、一番シズエさんが困っていることなどあれば話をさせていただけますか？」ケアマネが言葉をかけると、シズエさんの口からはこんな言葉が出ました。

「お隣のことはいいんです。最初は、色々な疑いを掛けられて、周りの人にも変な目で見られ、辛い時期もありました。でも、今は、もうお隣が、でたらめを言っているのは皆さんわかっています。息子も、構うな、放っておけ、と言います。私もできるだけ、お隣と顔を合わせることをないようにしているのです。私は、最近体の調子も思わしくなく、外出も減って家にばかりいるので、考え込むとそればかりになってしまって。でも、お隣の事は構わないでいるしかないことも、私が気にし過ぎていることもわかっているのです。だから、お隣のことはいいのです。」

一子さんとのことは、シズエさんの中では十分に整理され理解している口ぶりです。周囲に言われることも、自分自身が少し気にしすぎることも十分理解しているようです。

では、シズエさんの訴えは何だったのでしょうか。ケアマネは、これまでシズエさんが周囲へ訴えていたこと以外に抱えている思いがあると感じ、シズエさんの話に耳を傾けました。

「私は、東北の出身です。」と話を始めるシズエさんです。自身の生まれの話や、出身地を離れ、北海道に来たこと、そこで、見染められご主人と結婚したこと。結婚後しばらくの間は、同居していた義兄が離婚したこともあり、義兄の子供たちを育てながら自分の一人息子も育てていたこと。子育ての傍ら農家へ働きに出かけ、家計を支えていた矢先、事故にあい体に不自由を伴ってしまったこと。夫の転勤のため、北海道を離れ東京で暮らす頃には、夫も役職がつき安定した生活が得られ、職場のご婦人たちとの交流も楽しんでいた話、シズエさんの人生が

淡々と語られます。

自分の人生を振り返りながら、その時々起こった出来事に、苦労したこともあったけれど、自分の忍耐と夫の支えがあったことが、幸せだったと話します。思いがけないご主人の発病と急死は辛かったと涙ぐみます。

妹を頼ってやってきた北海道へは、一人息子が心配して一緒に来てくれたことはありがたいが、「主人になら相談できても、息子には相談できないこともあるし、息子の言葉は主人の言葉ではない。」と、さみしい思いを語ります。ケアマネが、シズエさんの語る長い人生の道のりをうなずきながら聴いていると、かれこれ2時間が過ぎていました。一子さんの話は出てきません。

話が一段落すると、シズエさんは、我に返り冷静に、「ごめんなさいね。私の話を聞いてもらって。主人がいたら主人に話すのでしょけれど、息子には話せませんから。私、ずっと自分さえ我慢すればいいと思って生きてきた人間だから・・・そして、私の我慢強さは主人がよく理解して支えてくれていました。お隣の事は、わかっています。でも、何かが起こってから誰かに言っても、しょうがないでしょ。だから、皆さんに知っておいて欲しかったのです。お隣さんのことは、皆さんが言うように気にしないようにします。私も、家にばかりいるものだから・・・」と話をまとめます。

シズエさんは、自身の生きてきた歴史を語る中で、我慢強い性格や、支えてくれたご主人の存在を思い出し、「自分」を感じていたのでしょうか。そして、そんな「自分」を受け止めて欲しいという気持ちがあったのでしょうか。一番の理解者が今は亡きご主人であり、仏壇に飾られた写真を眺めながら、ケアマネに対してではなく、いつしかご主人の写真に語りかけていました。それは、シズエさんが自身の抱えている問題にしっかりと対峙している姿にみえました。

「シズエさん、もし体の調子が良かったら、何をなさりたいですか？」ケアマネは、シズエさん自身の今後の希望を尋ねました。それは、残りの人生を歩むシズエさんへ希望の光を見つけて欲しかったからです。

シズエさんは、しばらく考えて「そうね、私旅行が好きでした。体の調子がよくないから、あまり遠

くには行けないけれど、近くでも・・・日帰りでも行けたら、どこか、行ってみようと思います。」そんな言葉と、その表情には微笑みが浮かんでいます。

「それは、素敵な夢ですね。お身体の調子がよければ、どちらか行かれるといいですね。」そんな、言葉をかけ、その日の2時間半にも及ぶシズエさんとの時間を終了しました。

「ありがとうございました。皆さんに気にかけてもらって・・・。　　さん（包括支援センターの担当職員）にも、お礼を伝えてください。私の事、心配してくださっていたのですね。」

そんなやりとりをしてシズエさんと別れました。

シズエさんが訴えた言葉（一子さんに対する苦情）と、受け止めて欲しかった気持は一致していませんでした。シズエさんが、一子さんの迷惑な言動や行動に悩んでいた裏側には、思いがけない人生の選択（ご主人の死や親しい環境を離れ転居したことなど）に伴う自身の葛藤や乗り越えてきた心情を誰かに理解してほしいという気持ちがあったのではないでしょうか。

自分の人生の道のりを語ることで、心の中にいつまでもご主人の存在があることを再確認して、元気になったように見えました。

そして、地域の関係者たちが、それぞれ（一子さんとシズエさん）のプライバシーに配慮しながらも連携をとり、必要なタイミングでの支援を提供したことで、シズエさんに笑顔が戻りました。シズエさんの心の中にも、「（一子さんは）仕様のない人だ。」というあきらめの気持ちが、マイナスにではなく、一子さんを受けとめる力にいくらかでもなったように思います。

シズエさんに対するケアマネのアプローチは、一子さんを取り巻く環境に対するソーシャルワークの一部としての援助展開だと認識しています。こうやって、また一つ、地域住民や、関係機関がつながり合っていることを確認しながら、集合住宅のお隣同志が、壁を隔てて元気に暮らし続けることを見守っていかうと思います。

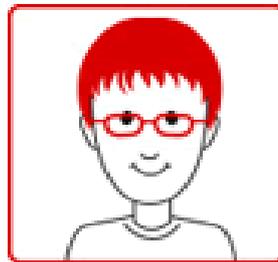
* プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。

街場の就活論

Vol. 2

新卒採用に今、何が起きているのかー

団遊 (だん あそび)



10月1日には2012年4月卒業生向けの企業エントリーサイトがOPEN。
1年半の長い戦いが始まる。一方、大学側からはエントリー開始を4月~にせよと
サイト各社に働きかけが強まり、いよいよそうなるという話も!?

揺らぐリクナビ王国

就職活動のコミュニケーションツールが葉書+電話からインターネットに代わり、覇権を握り続けているのが、皆さんもよくご存知のリクナビです。社会人向けのサイトを「リクナビNEXT」と呼ぶことからわかるように、彼らのブランド形成の主軸は、大学生に向けたあのお化けメディアが担っています。

ほかにマイナビや日経ナビといったメディアもありますが、リクナビの立場は圧倒的です。その下地づくりに大学職員も無意識に協力しており、就職指導の場では「とりあえずリクナビくらい登録しろ」と言葉が飛び交います。

圧倒的な強さは企業に請求する掲載料金にも反映されており、他社の2倍~3倍の料設定がされ

てきました。有料掲載企業は6,000とも8,000とも言われます。一社当たり300万円程度と考えると、大きなビジネスです。他社は料金面で対抗したり、人気企業を、他サイトに掲載しないことを条件に格安または無料で載せ、「だけでエントリー」として学生の会員を募るなどしてきました。

余談ですが、現状の新卒就職活動における企業の費用負担は、人気企業であればあるほどやり方次第で安くできる傾向があります。メディアにとって企業名こそがコンテンツであり、優良コンテンツならば無料で載ってもらいたいと思うからです。ドーム会場などで行われる就職フェアもしかりで、人気企業は無料でブース提供されることも珍しくありません。もっとも、人気企業は応募者数も多く、対応のためシステム投資や人的コストがかかる側面はありますが、それはやり様で工

夫できます。

そんな事情に最近変化が起こっています。まずインパクトがあったのは、リクナビの値下げでした。ここ2~3年の話ですが、リクナビは掲載料を大幅に下げる施策に出ました。この影響で廃業した専売代理店などもあると聞きます。値上げこそあれ値下げはないと思われたリクナビが値を下げたのは、もちろん不況の影響もあるでしょうが、どうもそれだけではないと感じています。ここにきて、採用メディアというビジネスモデルそのものが揺らぎ始めているのです。

その改革主は mixi や twitter、myspace、facebook といったソーシャルメディアです。IT 業界を中心に、企業が旧来の有料メディアに頼らずとも学生とのコミュニケーションは可能だと考え始めたのです。また、IT 業界への適性度をはかる指標として、それらを使いこなす程度はリテラシーのある学生と出会いたい、という側面もあるようです。そのため、使うメディアも、日本で圧倒的なシェアを握る mixi よりも、myspace や facebook を好んで使う傾向があるように思います。

実際、私が代表をつとめる制作会社も、3年前まで有料メディアに広告掲載し新卒採用をしていましたが止めました。物理的に会える数を超越した、物凄い応募があるためと、これだけ応募があるならメディア掲載しなくてもやり方次第で出会えるのではないかと考えたためです。予想に違わず、毎年コンスタントに問い合わせが来ます。そのような状況を考えると、リクナビをはじめとした採用メディア運営企業は、新しいビジネスモデルを模索する真ただ中に、今いるのだろうと思います。

キャリアビジョン

先日、講義で学生のプレゼンテーションを聞きました。インターンシップを軸にしたキャリア観育成授業の最終コマです。

私はキャリアビジョン構築には、目的地を決め

ることから始めなさいと伝えています。たとえば「どこかに旅行に行きたい」と言っているうちに旅支度はできません。仮に「札幌」と決めるから「やっぱり寒いのはイヤ」「意外に飛行機代が高い」など細かいことが見えてきます。ポイントはいつも「仮決定」にあります。しかし皆キャリアビジョンなどと言うと「最終決定」を探そうとします。その結果「キャリアビジョンなど、まだ社会人経験もないうちに決められない」という話になり「とりあえず就職活動」と流れ込みます。

「目的地の仮決定」「動きだしてみる」「目的地の変更」。このトライアングルを続ける限り、確実にキャリアアップします。誰もが当たり前に見えるこのことを、毎回言葉を変えながら伝えていくのが私の授業でのスタンスです。

プレゼンテーションを聞いていると、そのことの何かを掴みかけている学生、相変わらず「がんばるしかない」と言い続ける学生、様々です。ところが先日の授業であまり出会ったことのないタイプの学生に出会いました。

その学生は、モンゴルから留学中の4回生でした。彼女は冒頭「私は自身のキャリアビジョンのただ中に今います。ここにいる必要があるので、この場所にいるのです」と言いました。

ロシアで生まれ7年過ごした後、母国モンゴルに帰った彼女は、そこで多くのストリートチルドレンに出会います。溢れる失業者。国の違いで子どもが置かれる環境の違いに、相当なショックを受けたと言います。

そして、ほどなく彼女は援助団体のボランティア活動に参加し始めるようになります。しかし、早々に「国の仕組みを変えないと、抜本的な解決は望めない」ことに気が付きます。そして奨学金を得て地元の大学に入学します。

同じ頃、またある体験を通じて「国は政策で動いている」ことを知ります。それならば、その環境に身を置き働くにはどうすればいいかを探りました。結果、留学体験が有効であることを知ります。彼女は留学に必要な要件を集め始めました。

次に彼女はどの国に留学しようか考えました。

そして日本を選びます。理由は「国民の機会平等が比較的担保された国であり、参考になることがたくさんあるのではないか」と大学教授に指南されたからだそうです。家庭の経済事情上、奨学金をもらう必要がありますから、その要件である日本語は二年弱でマスターしました。

こうして日本に来て4年目を迎える彼女は、来春母国に戻り、二年間、国の機関で働くつもりだと言いました。その後、また、別の国の大学院に進むのだそうです。行政の中枢に行くには、そのキャリアが不可欠だからです。その奨学金に申し込む必要要件が、二年間の労働だそうです。「だから私は、今のところ微修正はしていますが、高校の時に考えたビジョンに沿って目的に近づく学びを重ねています。これからもがんばります」と言って彼女はプレゼンテーションを済ました。同じ教室で学び、話を聞く日本人学生は何を思ったのか。世の中には、いろんな大学生がいるなあと、いつものように思いました。

マニュアルガッツ

これは造語ですが「マニュアルガッツ」についてご紹介します。一昔前、面接の現場で「誰の答えを聞いてもマニュアル通りだからおもしろくない」というような話が聞かれました。中谷彰宏さんの「面接の達人」などが売れに売れていた頃の話です。さすがに今では「自分の言葉で話しましょう」と指導が行き届いているからか、これぞマニュアル！な学生は減りましたが、まだまだマニュアルガッツは健在です。

中でも最近よく聞くマニュアルガッツは主に企業の選考に落ちてしまった時に発揮されます。「どうしてもその企業に入りたい」という気持ちはわかりますが、そのときの行動がマニュアル化されているのです。一番多いのは「直筆の手紙」です。「自分はあのときフルに力が発揮できなかった。もう一度チャンスが欲しい」というようなことが書かれています。「よければもう一度チャンスを！」と熱く訴えてきますが、こちらから連絡し

ない限り、そのまま放置されるのも、このマニュアルの特徴です。返事がない場合のアクションまでは、マニュアル化されていないのかもしれませんが。

次に見受けられるのが「門の前で待ち伏せ」です。本当にそんなやつがいるのかと思われるでしょうが、結構耳に入ってきます。確かに、目の前で直訴されると情も湧くというものですが、それで選考結果をいちいち変えるわけにもいきません。

これらの行動は「インターネットや書籍を通じて書かれた誰かの成功体験」を読んでトレースしているケースが多く、そのため目新しさがありません。本人にとっては、一世一代の大勝負かもしれませんが、大勝負を連日仕掛けられる側は「勘弁してくれ」という気持ちになるのも仕方ありません。ガッツの見せ方にオリジナリティがあると受ける方も楽しめるのですが、大体マニュアルが流れパターン化します。そして、これらのマニュアルを流布する役割を果たすのが、リクナビに並ぶ就職活動の必須サイトである「みんなの就職活動日記」(運営は楽天)です。

とある説明会で

5月末、社員数300名程度のとあるIT企業で会社説明会が行われました。翌年4月卒業者に向けた説明会です。定員一杯の30名が参加しました。これは大きな変化です。4~5年前は、この時期の説明会は来て数名でした。それも「うーん、わかる！」と、思わず膝を打ちたくなる学生が大半です。内定辞退等で計画が狂い、募集人数に到達しない企業が「一縷の望みを賭けて」開催するのが、この時期の説明会でした。ところが今は違います。この時期の説明会も大盛況です。いかに内定をもらえない学生が多いかを表しています。

さらに今年はまだ一つ、変化がありました。それは「業界をITに絞っている人、手を挙げてください」という質問への答えです。この会社の募集職種はシステムエンジニアです。そのため、ITに興味がない人はマッチしません。例年、ほとんど

の人が挙手します。ところが、今年は5名ほどしか手が上がりませんでした。

これをどう見るかですが、私は「もうどうしていいのかわからなくなっている」のではないかと推測しました。自ら希望してきた説明会です。そこは「とりあえず手を挙げておく」のが常識的な知恵ではないかと思います。

結婚パーティーに参加して「結婚する気はない！」と宣言するバカはいません。まずは場の可能性に賭けることから始まります。人事担当者は「こら、あかんわ」とあきれ顔でした。

採用活動のグローバル化

6月に入ると、私の会社にも、既存&新規クライアントから、様々な新卒採用課題が投げかけられてきます。2012年春入社に向けた作戦会議です。この中で、特に大手企業を中心に採用活動のグローバル化が進んでいます。

それは「留学生を積極採用する」だけではありません。端的に言うと「日本人は海外の大学で、留学生は日本の大学で」採用しようという動きが強まりつつあるのです。理由はこうです。今企業が日本人学生に物足りなさを感じていることは、突き詰めれば「主体性のなさ」です。「自ら考えることができない」という言い方をされることが多いですが、とにかく依存気質過ぎる。知識と教養がない上に自己決定もできないのですから、幼稚園児と変わりません。

これは学生の問題ではなく、日本の大学システムが産み出す副産物だと私は思いますが、その理由はさておき、そんな状況を毎年見せつけられると、企業も考えざるを得ません。一方では国際競争で日本の力が弱ってきたと見られる状況です。

その結果、海外の大学で学ぶ日本人に可能性を見出し始めています。海外の大学で学ぶ大学生のことを、留学生とわけ国際学生と呼びますが、国際学生ならふたつのことが担保されています。

- ・高校三年生時に海外で学ぶことを自己決定してきた

- ・日本語に加え、現地言語を習得している可能性が高い

この二つの力で「活躍できる」とは言えません。しかし「日本の大学生に期待できない」のであれば、そこに賭けてみようというアプローチです。また、これらの学生は、今海外進出する企業がリアルに困っている課題解決ができる人材に育つ期待も持てます。その課題とは「多国籍人材を抱える部署をマネジメントできる日本人管理職がいない」というものです。

話が少しそれますが、私が講師をつとめる立命館アジア太平洋大学にはAPハウスという寮があります。全校生徒の半数を占める留学生の大半は1~2年次、ここで共同生活します。また、日本人も希望すれば入所することができます。この場所では、毎日のように「国際問題」が起こります。たとえばクリスマスという行事も国によって捉え方は様々です。その些細な違いがトラブルになります。恋愛観も「美しい」と思う感覚も「掃除」の捉え方も、育ってきた環境を背景に、考え方が違います。そんな状況でお互いに上手く折り合いながら楽しく共同生活していくことを強いられます。

開学10年を超え、噴出する国際問題それぞれに対処法が編み出され今はそれほど「ドタバタ」はないようですが、それでも学生時代にそれらを体感するとしらないでは大違いです。

企業は一方ではグローバル化を進め、留学生採用にも積極的ですが、日本が母体の企業である以上、多国籍化を進めても、実際はマネジメント層にある程度日本人が必要です。しかし、島国で過ごし30歳を超えて突然多国籍人材をマネジメントせよとミッションを与えられても、それは難しいのが本当です。

話を戻します。今言ったようなことも背景に、日本の、特に大企業は、これからの20年を見据え「日本人は海外の大学で、留学生は日本の大学で」採用するのです。

心理療法が始まるまで

- コミュニティと病院で -

(2)

藤 信子

私が単科精神病院に仕事を始めた頃、時々女子の閉鎖病棟で折り紙をしていた。思春期のS子さんが入院してきたけれど、チームとしてなかなか関係が作れないと思っていたところに、折り紙でもしてみようと思いつき始めたように記憶している。そのS子さんは折り紙が上手で、私は久しぶりに折る鶴以外にいくつかの花の折り方も教えてもらっている。と次第に他の患者さんたちが、加わるようになった。その病棟は畳の部屋だったので、何人かで座って折り方を教えたり、教えられたりした。それから長期入院のTさんは花が好きだということで、植木鉢と種など買いに行っ

て一緒に育てたこともある。朝顔の支柱をどうしようかと困っていたら、通りかかった他の病棟の看護スタッフから助けってもらったり、水遣りグループを作ったりした。30数年前で、かなり牧歌的だったのだけれど、一方で

言えば、他のスタッフは心理の人って心理テスト以外に何をするのかわからないので、患者さんの相手をしてくれるのなら、そうしてもらおう、ということだったのだろう。今から振り返るとグループワークの萌芽のようだった。

その頃単科精神病院への入院は本人が望んでという形は少なかったと思う。その頃一般的な精神医療の世界では、精神分裂病（現在の統合失調症）は「自分では病気とっていない」ことが特徴だと言われていた。自分が病気だと思えない、認められないという状態はいろんな状況があり、その人個人の思考、認識だけの問題ではないことも多いと今は思っているけれど、仕事を始めたばかりの私にとって、ここでは自発的に相談したい、治療したいと思っている人は多くはないんだ、ということ自分を言い聞かせることがまず第

一だった。

この病院でのグループワークの始まりのよ
うなことは、単調な病棟生活の中で楽しみを
探そうとかいうレクリエーションというだけ
ではなかったと思う。私が精神医療の世界に
入った 1970 年代後半は日本における精神病
(精神分裂病)の精神療法の理論が出始めた
頃だった：中井久夫の「精神分裂病状態から
の寛解過程」が 1974 年、辻悟「治療精神医
学」が 1980 年、神田橋條治の『『自閉』の利
用』が 1976 年など。ただ私がこのような理
論を学び始めるのは 80 年代になってからだ
ったので、この頃は手探りで S さんや T さん
が何をしたいのかを考えたいと思っていた。
関係を作り、話ができたらと思っていた。そ
ういえばコフォートが精神分裂病の治療の第一
段階の目標は「私は が欲しい」と言える
ことだと言っているのを知った時に、そうな
んだ治療のプロセスをそういう風に表現する
といいのだ、と納得したことがある。精神医
療で出会う人たちは、始めは自分が何に困っ
ているのか、何を相談したらよいのか、なか
なか表現できにくいことが多い。何を相談し
たいのか考えることに時間がかかるのが特徴か
もしれない。

心理療法の対象の病理水準や発達水準によ
って、クライアントとどのような位置関係に
座るかということを考える事は大事だと思う。
私は精神病院での仕事が長かったので、クラ
イアントと横に並んで、一緒に同じ方向を見

ながらというほうが馴染む。現実の椅子がそ
うでなくても、そんなイメージで聴きたいと
思っている。何かを一緒にしながら、という
ことは横に並ぶ位置にいることに似ているよ
うだ。横に並んで同じ方向をみて、クライエ
ントのしているものについて話してもらうこ
とで、共感したり理解したり考えたりするこ
とができる。活動を一緒にすることは、目の
前の活動についての話になり具体的で話しや
すくなる。自分の思っていることや考えなど
の内的体験を上手に話せるとは限らない。目
の前あるものについて話すことは、外的なこ
とだから、そのほうが話しやすい。そういう
手がかりを使って、クライアントと話すこと
で理解することが必要な人たちがいる。

このようなことを考えるのは、この頃精神
医療の話を知ると病床数は減少していないけ
れど、以前に比べ病院はきれいになり、入院
日数は短縮されてきており、各スタッフは専
門性に関して努力していることは伝わって
くる。30 年ほど前に経験していた医療と言え
るのか、と言われていた時とは違う。スタッ
フはとても忙しく仕事をしているようだ。コ
ストを考えるなど企業のような。薬物療法とい
くつかの療法を受けることが、はじめからプ
ログラムとなっている事を聞いて、病院だか
らそうなのかという思いと、ところで患者さ
んは何が分かってもらえたと思っているだろ
うと考えてしまった。収容所のような精神
病院が病院らしくなることは当たり前だけ

れど、病院らしいとは、身体疾患に対する治療モデルのプロセスで考えることなのだろうか、と一步引いて考える。入院でも外来でも患者さんが悩みながら、どうにか問題に対処したり、できにくいことがあることを一緒に考えることを通して、どういう風に暮らすかをイメージすることが、病気を受け止めることになるのではないだろうか。主体的にその人なりの「問題」を考えることが必要だと思う。悩んでいること、そこからどのように考えるかについて相談できる糸口、相談への「動機」を一緒に探すが、治療には必要だと思うが、忙しそうな医療の中でその人と一緒になって考える時間はどのようにとれるのだろうかと気になってはいる。

文献 神田橋條治・荒木富士夫(1976)「自閉」の利用 精神分裂病への助力の試みー精神神経学雑誌 78(1)、辻悟(1980)治療精神医学 ケースカンファレンスと理論 医学書院、中井久夫(1974)精神分裂病状態からの寛解過程、宮本忠雄編 分裂病の精神病理2 東京大学出版会



ケースのツボとそこに 合わさる言葉（１）

岡田 隆介

児童精神科医

１． ケースのツボ

誰でもそうだと思いますが、私も面接のとき、ここでしか感じられないコンテキストをとらえようと視聴覚の感度をギリギリまで高めます。また事例検討会の席では、記録と行間からケースのリアリティを感じようとピリピリするほど皮膚感覚をときずまします。そうやってケースの全体像を把握しようとしています。

全体が見えてケースの中核をとらえた気になると、「よし、分かった」とひとまず安堵するのですが、少し立つとそれが揺れだします。どう言えばいいのでしょうか、全体がみえて部分がかすんでいくような感じ、ケースが見えてポイントがわからなくなる不安、そんなものが襲ってくるのです。

ここで言うポイントとは、臨床の感どころのことです（勘所ではありません、念のため）。わたしはツボと呼んでいます、いずれにしても、さほど理屈のあるものではありません。これは目とか耳、あるいは肌でわかるものではないと思います。ツボを嗅ぎ分けるわけですから、嗅覚的なものでしょう。

ここがツボだと思ったら、その近辺を押さえます。すると、ちょっとした言葉とかメタファーが浮かびます。たいした根拠もなく浮かんでくるものですから、自分でも意味がわからないということがあります。

もちろん、ツボは必ず嗅ぎあてられるものではなく、結局わからず終いということも多いです。わた

しは、面接場面とは真反対の状態、つまり意識レベルがやや低目のときにツボに近づけると信じています。

何かが浮かんだらすぐ口にしたほうがいいでしょう。イメージがはっきりつながるまで暖めればいいのですが、そんなことをしていると消えてしまいます。そんなわけで、口にした後で「オレ、なにを言ってるんだろ？」ってことにもなります。

ツボから出た言葉は相手の腑に落ちやすい、これはあると思います。面接に来ている家族とか会議の参加者に伝えると、瞬間、場の空気が替わります。もちろん、だからといってそれで問題が解決するわけではありません。しかし、面接や会議の流れでとても重要な分岐点になることは間違いありません。

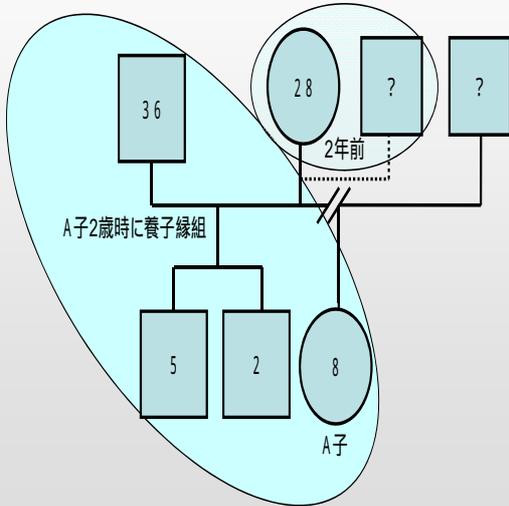
ケースの全体像を学ぶワークショップとか、中核部分を押さえてくれるスーパービジョンというのはよくあります。でも、ケースのツボを探る方法なんて聞いたことがないでしょう。実際のところ、ポーと報告を聞いたりケースを読む以外にこれといっていい方法はないわけですが。

ツボに臨床的な意味があるのか、やってみる価値があるのか、正直、よく分かりません。そんな怪しげな話ですが、このマガジンだと読んでもらえそうな気がするので、例をあげて説明したいと思います。

なお症例は、プライバシー保護のため大きく創作を加えて事実からは遠いものになっていることをお断りしておきます。

A子の家族関係図

(1) 家族関係図



2. A子の処遇検討会でのこと

A子は、3人姉弟（長男5歳、次男2歳）の一番上、といってもまだ8歳だった。母親は2年前に、別の男の元へ走った。それまで夫からひどい暴力をうけていたとはいえ、当時生まれて間もなかった次男を置いての家出であった。

妻に逃げられてからの養父は酒量が増え、毎晩A子に酒を買いに行かせた。そして朝まで愚痴の相手をさせたうえ、時には暴力もふるった。学校にはほとんど行かせてもらえず、弟たちの世話や家事を押しつけられた。それでも文句一つ言わずに頑張る、A子はそういう子だった。

ある日、長期欠席を心配した担任が家庭訪問をして彼女の生活実態を知り、児童相談所に虐待として通報した。児童福祉司は何度も家庭訪問をしたが、養父に強く拒まれた。

職権による立ち入り調査を検討していたところ、酒を飲みすぎた養父がケガで入院し、それを機に3人を一時保護することができた。A子はとても小3とは思えない大人びた感じだった。母親に棄てられ、養父に虐待されていた事に関しては口を閉ざした。

一時保護所では淡々と弟たちの面倒を見て過ごし

ていたし、心理テストでは幸せそうな一家だんらんの家族画を描いて見せるなど、諸々の感情を見事なまでに抑えていた。

紆余曲折を経て、姉弟は児童養護施設に措置された。A子に変化が起こったのは、そこからである。施設における粗暴な言動や行為が増えていき、やがて同室の子どもを持ち物を盗ったことをたしなめた先生への暴力事件を引き起こしたのだ。

児相の所見とあまりにも違っていることに混乱した施設側の提案で、ケース処遇検討会がもたれることになった。施設スタッフは、これまでの虐待がA子の人格形成にどのような影響があったかを知りたいと言った。その上で、カウンセリングなど心理的なサポートをしてほしいという希望がだされた。児相のワーカーは、一時保護所をでてわずかの期間にここまで変わったことに驚き、担当職員との関係に焦点を当てようとした。心理判定員の理解は、彼女が担当職員に母親を投影して抑えていた攻撃性を表面化させたというものであった。

参加者は、それぞれの立場からA子のこころの痛手と今の問題とのつながりを論じていた。熱心で重くて出口の見えないやりとりを聞きながら、わたしの意識レベルは確実に下がっていった。

気がついたら、みんながこちらを見ていた。「みんな、なにかに縛られてる感じがするけど・・・」。そう発言したのは、確かに自分だった。慌てて施設職員をねぎらい、戸惑いに共感し、児相の記録があまり役立たなかったことをわびる。それから、付け加えた。

「なにが縛ってるんですかね、この会議を・・・」

（そんな気味が悪いことを）

「いや、みなさんはそれぞれの仕事とか立場を代表してここにいるわけでしょ。手ぶらじゃ帰らないぞ！みたいな、立場の呪縛。それから、仕事柄でしょうけど、全員がこのケースのポイントは虐待で、A子のこころのキズをどうするかという枠で議論している、仕事の呪縛。そういう意味です」

（けど、トラウマみたいなものは確かに抱えているでしょう？）

「彼女が、先生たちに自分はこころにキズとか重荷があるって言ったとか？」

（まだ、そんな話は出てませんが、生育史を見た

ら明らかだと思います)

「こんな仕事してるとどうしても虐待に目がいってしまふ、それを性(さが)だなんて言ってしまったら、それは違うやろ! ってツッコミたくなるけど。いや、ちょっと待って。なんか、似てる気がしません?」

(誰が? 誰と?)

「だから、みんなが、A子と」。ここに至って、やっと自分が何を言いたいかはわかってきた。

「ほら、みんなが自分の役割をもってここに集まって、その枠からしかものごとを見ようとしていないでしょ。それって、A子と同じじゃないですか? 彼女も自分の役割に縛られて、その枠で自分と周りとの関係を見てるわけで」

(A子はこころのキズに縛られてるんじゃないんですか?)

「そうかなあ、さっき話が出てたけど、一時保護中、母親は面会には来ず、弟たちをお願い、いつか迎えに行くから、みたいな電話があったんですって? たぶん、同じようなことを、子どもたちを置いて出る際にA子に言い残したんじゃないかと思うんです。良心の仮借か、言い訳か、調子のよさか、そこまでは分からないけど。」

「でね、A子はその日を夢に見て懸命に養父の世話をし、弟たちを守ってきたと思います。それを真に受ける以外に、なんの支えもないわけやから。幸せだった頃の家庭、やさしかった母親をどんどん膨らませてイメージし、自分さえ我慢して頑張ればもう一度そこに戻れる、そんなストーリーをずっと生きてきた。そして実際に、この家になくってはならない人間となってしまった。妻・母親代わりの枠にはまりきったわけです。それを耐えたのは、たぶん、彼女のストーリーが“家族は再統合する”というエンディングになってるからだと思います。」

ところが、施設に行くと予想もしないことが待っていた。ぜんぜん自分のストーリー通りにいかないわけですよ。だって、母親代わりという自分の役割が無い。弟たちは、先生方がしっかりと面倒を見てくれる。それどころか、自分のことまで世話してくれる」

(そのどこがいけなかったんですか?)

「この役割のかなめは、家族に自分が必要とされて

いる、そこです。そこが、空白になってしまった。それはA子の支えただけだけでなく、幸せな日に戻る約束の切符でもあったのに」

3. ツボをめくって

わたしは、ケースのツボはトラウマではなく役割だと臭ったんです。こころのキズは、確かにケースの中核部分でしょう。それはケース全体を支える骨格です。ですが、ツボじゃありません。中核からは、彼女にどんな援助が必要かという方向に議論がすすみます。でも役割というツボからは、A子がどんな役割を持ってどんなストーリーを生きるかという話になります。

中核が骨組織なら、ツボは外界と接する皮膚組織です。骨折は専門家が扱います。たとえば、この機会に天使の衣装を脱いですべてを吐き出せばいい、という意見が多くありました。その場合、彼女の記憶の中で期待が作った母親イメージと、絶望によって塗り替えられた母親像との落差に折り合いをつけるには、こころの専門家の手助けが要るでしょう。

一方、皮膚の擦過傷は自分で手当てします。新しく見つける自分の役割、自分が必要とされている外の世界を生きていくストーリー、それらは生活の中で作られるものです。

骨折と擦過傷、どちらが深いとか正しいといった話ではありません。そんなことは誰にもわかりません。ただ援助者は選ぶことができます、外科医じゃないですから。そしてA子は援助者を選び、その人に自分のストーリーを語り生きていくわけです。

さて、会議では役割という言葉はみんなの腑に落ちたように見えました。そして、施設職員は帰ってすぐそれを処遇に反映してくれました。もちろん、それでA子の問題が一挙に解決するわけはありません。

記憶のひとつひとつはそのままであっても、それをどう振り返り、どんなふう語るかは変わります。トラウマと違って役割は、新たなストーリーの中ではがすことも新たに与えることもできるでしょう。役割は、そうした可能性を秘めたツボでした。

映画
の中の
子ども
たち

第2回 「クロッシング」

川崎 二三彦
(子どもの虹情報研修センター)

『対人援助学マガジン』創刊号は、届いてから全文をプリントアウトしてアットランダムにいくつか読みました。皆さん、なかなか熱が入っていますね。私の連載は、雑誌に彩りを添えるぐらいのつもりで書いているので、何か申し訳ない気になります。それにしても、せっかくの対人援助学会メーリングリストにマガジンの感想が投稿されるかと思いきや、全く見かけませんでしたね。自分のことは棚に上げて、少し残念でした。さて、今回選んだ映画はあまりポピュラーなものではありません。ご覧になった方、ありますか。それとも、「ベスト・キッド」あたりを紹介したほうがよかった？

土曜日の午後、わざわざ JR 川崎駅まで足を運んで観た映画。ところが客席総数は 844 席だということに入場者は 10 数人。北朝鮮からの脱北者を描いた韓国映画だから、やはりこんな暗い作品は入らないのかなと思いつつ、誰に気兼ねするでもなく座席3つ分を独り占めして、それでもまだ足りないと言わんばかりに足を広げて座らせてもらった。

ただし観た人の評判は総じてよい。

「あまりの衝撃に涙するばかりで無力な自分を痛感」

「ものすごく痛くて救いようのない話だけど、これが現実なんだろうな」

「クロッシングを観ました。本当に久しぶりに涙腺が完全決壊。映画では初めてと思われる、嗚咽までもらしました。最初から最後まで、涙、涙、涙...の2時間でした」

「泣けるという人が多いみたいだけど、泣くことはできなかった。なんともやるせない重い余韻」

「映画クロッシングを見た。...もし彼らを救いにいく義勇軍の募集があれば手をあげるだろう」

最近、映画を観たら帰宅後ツイッターで検索し、同じ日に同じ映画を日本のどこかで観た人のつぶやきをチェックすることにしているのだけれど、こんな声があふれかえっていた。

サッカー選手だった夫が病に伏す妻のため、治療薬を手に入れようと脱北する物語。だが中国に渡っても、現在の中朝の政情からしてたやすく目的を達成できるはずもない。中国政府は脱北者の増加をいやがり、種々の規制を強化しているからである。さて、映画では北朝鮮に残された妻が死に、11歳の一人息子が孤児となる。



「ウウム、こういう場合、北朝鮮ではどうするのかな？」こんなシーンになると、ついつい児童相談所の児童福祉司時代のことが思い出され、泣いてるどころではなくなってしまふ。何しろソーシャルワーカーは、所与の条件がいかに劣悪であっても、その中で本能的に何らかの解決策を見出そうと思考するものなのである。ところが北朝鮮では、「保護者のいない児童」であっても、児童福祉機関が登場する気配はない。そのまま放置された11歳の息子は、父と会うのだと固く決意し、村や町をさまよひ、ついには脱北者の子として子ども向け？強制収容所に入れられてしまふ。

北朝鮮は今とても貧しい。しかし日本だって戦前の貧しさならば勝るとも劣らない厳しさだった。事実、大量の貰い子殺し事件が繰り返され、貧しさゆえの親子心中だって枚挙にいとまがなかったのだから。ただし、当時の日本と現在の北朝鮮で明らかに違うところは、少なくとも日本では、そうした事態を憂い、それを世に問う人が、少数ながらいたことだ。三田谷啓や賀川豊彦がその一例だ。

だからこそ、貧しさという点では共通していても、現在の北朝鮮の子どもたちは、戦前の日本より一層の困難を抱えている。独裁政治の問題の本質はここにあるのだ...、などと言っている間に話が忘れてしまった。

この映画のクライマックスの1つは、さまざまな援助を得、かるうじて中国に渡った息子と父とが、やっと実現した携帯電話で話す場面だろう。

「お父さん！」

彼がこう呼びかけた後で発した言葉が忘れられない。

「ごめんなさい、お母さんを守れなくて...」

「男の子はお母さんを守れ」と父に言

われていた彼は、自身が辿った想像を絶する苦難や寂しさを訴える前に、どうしてもこう話すしかなかったのである。後は言葉を継ぎ足すこともできずに泣きじゃくる。やはりまだ子ども。

それにしても不思議とすらいえるのは、これほどの過酷な境遇の中で示される純粹に家族を思う父、母、そして息子それぞれの姿だ。私が感動したのは、もしかしたら、日本では失われかけているとすら感じられる彼ら家族の美しさだったのかも知れない。

(鑑賞データ：2010/06/26 チネチッタ 川崎)



子どもと家族と学校と

『私立高校一年生・ハヤト・不登校』

中島 弘美

CON カウンセリングオフィス中島

高校生や大学生の不登校

ハヤトは、高校一年生の男子。

高校一年生という年齢は、CON のカウンセリングにやってくる子どもたちの中で最も多い学年。どちらかというとなり男子生徒が多くそして高校中退数が一番多い年齢でもある。

今、ハヤトが抱えている問題は、不登校。学校に行くことができない。

小学生中学生に関心が集まりがちな不登校だが、当オフィスは高校生大学生の不登校相談を多く受けている。

特に高校生は、欠席日数が超過して留年になるかもしれないという事態に直面し家族とともに学校や病院からの紹介で相談にやってくる。

また、高校生だけでなく気がかりなのは大学生の不登校で、相談件数は増加傾向にある。

「大学生の不登校」は、あまり使われる言葉ではないので、妙な表現だと受け止められるかもしれないが、希望して入った大学にもかかわらず、学生が通うことができない状態にある。

朝起きられない、講義室に入れない、昼休みが過ごせない、グループ発表の打ち合わせでトラブルになった、サークル

活動の交友関係がうまくいかないなどで不適應状態になり、欠席をする。

このままでは単位を落としてしまう。別の大学を再受験しようかそれとも、再登校を考えてみようか、休学しようかとカウンセリングに訪れている。

もちろん大学生の場合は、摂食障害や過呼吸、不安神経症、対人緊張、うつ状態など、何かの症状を持っていることが多く、そのため通学が難しくなっている。大学の教員からするといわゆる精神的な問題をもっている学生ということになるのだが、大学受験をクリアすることはできても、通い続ける力がない学生たちだ。

そんなに無理して大学に通わなくても休んで治療に専念するべきとの考え方もあるがどうしても大学に通いたい気持ちを持っている。

大学にキャンパスワーカーなどが常駐していると、大学生への支援も手厚くなるのだが、まだまだワーカーがいる大学は少ない。

高校の不登校生徒支援

昨今、小中高生の不登校状態にある生徒に対しての理解が進み、学校にもよるのだが、たとえば私立高校などはその対

策がさまざまになされている。

ひとりひとりの生徒をどれだけ丁寧に
対応できるかは、私立高校の特徴の一つ
になっているのだろう。

大学進学も重視される一方で、できる
だけ中退せずに、卒業することに重点が
おかれている。

定期試験の点数が一定の基準に達して
いなくても特別課題をこなすことや補講
などで回復措置を準備して、単位を取得
し、送り出している。

高校の教員がとても細やかな指導をす
るため保護者としてはとても安心だ。だ
が、不登校状態から元気を取りもどす前
に、大学受験をする。大学に入学したら、
あとはなんとかなるからまずは入学とい
う考えから、学校に適應できない個人の
課題や問題はあとまわしになっているの
だ。

本人や家族からすれば、高校がうまく
いってなくても大学入学へのルートは
魅力的であり、自信にもつながるが、毎
日講義に出席することができない状態の
まま、入学することになっているのも否
めない。大学でつまづいている学生は、
かつて、不登校を経験していた場合が少
なくないのも事実だ。

高校入学後に再び不登校

面接室のハヤトはぼっちゃりした体格
のメガネ姿。ひとなつつこい表情をする
かと思えば、かたくるしい表情にもなる。

一方、細身のジーンズがとてもよく似
合う母は、歳の離れたきょうだいと見間
違うぐらいだ。

仕事で忙しくしている父はシャツ姿が
多くラフな服装。家族は自然に会話をし、
ハヤトは面接室ではきはきとこたえる。

「一学期の中間テストは受けたけれど、
あとは教室に行っていません」

中学二年生の時に不登校になった当時、
何かの出来事がきっかけとなったわけ
ではない。ずるずると休んでしまったと家
族は思っている。それでも、中学三年生
のときに、週二回の塾の個別指導で熱心
に勉強し、高校受験を突破。本人はとて
も喜び、もう大丈夫だと周りは思ってい
た。

入学後、調子よく登校していたが五月
半ばから息切れしたように遅刻や欠席が
始まり、ついには連続して休んでしま
うようになった。

友達ができないわけではないが、教室
は生徒が多くて圧迫感があり、中学の
ときにあまり出ていないので授業内容も
わからず、だんだんと疲れていった。

今の状態についてハヤトは、「やっぱり
高校中退はまずい」と自分では思ってい
る。勉強好きではないこと、さぼり癖が
あることを自覚し、家では、家族が病
気ときには、食事を用意するなどこま
めに動くこともできるが、どうも学校
での人間関係が得意ではないようだ。

どうしたいの？と言葉をかけると、ハ
ヤトは、ゆっくりしたいという、早く長
期休みになって、ゲームをしてマンガを
読んで、音楽を聴いて、家で学校のこ
とを気にせずに過ごしたいという。

学校のすすめで、現在、ハヤトは、教
室に入りづらい生徒のために学校内に用
意された別室スペース、相談室に通うこ
とができるようになった。

「担任の先生がよく、連絡をくださっています。先生の支えもありますが、中学の時に比べると別室ではあるけれど登校しているのは成長していると思います」母はハヤトのゆるやかな変化を見守っている。

定期試験は受けられたが、毎日朝から夕方までの授業となると、長い時間は無理と言う。

「留年したくないって言っているけれど、卒業の後は、何か考えている？」

「あんまり考えていないけど、できれば大学に行きたい、できればけど」

ハヤトは、大学行きを希望していた。

これまで学校のことでも悩まされていた彼だか、大学進学を希望している。学校に行けなくても、大学には行きたいのだ。

ハヤトの在籍する高校では、不登校の子どもたちを支援するためにいろいろな制度がある。専任のスクールカウンセラーはいないが、経験豊かな教員が教育相談を担当している。学校全体に長期欠席生徒対策がとられていて、委員会が設置されていた。気がかりな生徒は不登校の会議で対応を検討している。

登校したいという希望があるにもかかわらず登校できない状態にある生徒が、カウンセリングや病院に通っていれば、不登校生徒の認定を受け、別室登校が許可され、出席扱いに認められる制度になっている。

ゆるいルールかもしれない。ただし不登校生徒と認定されると、別室登校は認められるが、一定以上の成績はつかない条件だ。

このルールに基づき、ハヤトの今後は教室に入れなくても別室に登校すれば、

出席扱いとされることになった。ただし、目標はあくまでも教室で授業を受けられること。その日数がオーバーすると単位取得はできず、原級留め置きつまり留年になることも確認できた。

高校入学後しばらくしてから不登校になったことで、家族の気持ちはさがり、また欠席かと、がっかりしている。長い期間にわたる不登校は親も子どももこれからどうなるのかという不安と、周囲からいろいろといわれて委縮しているような様子が見られた。

さてこれから家族をどう元気づけるかになる。

仕切り直し

不登校支援の制度を利用することで、ある程度の生活目標が決まってきた。まずは、別室でもかまわないので必ず登校すること。そのことを確認したうえで、改めてカウンセリングの仕切り直しとなる。

「ここまで、休む状態が続くとご家族にもさまざまな気持ちが生まれてくるでしょう。学校の不登校支援の制度の中で、できることをすすめながら、一方で、ハヤトくんの生活や行動を見なおしてみましよう」

これまでなんとかピンチを乗り越えてきたので、今回もなんとかなるとおもっているのではないか。甘い考えがあるのではないか、と厳しい意見が、両親から聞かれた。

ぎりぎりにならないと動けないのもハヤトの良くないところで、これまで夏休

みの宿題は始業式間際になってやっている。まじめに、コツコツ何かをすることができない。

両親が話しているとハヤトは否定せずに聞いている。

ハヤトは友達はあるけど、かなり気をつかっている可能性があること、調子が悪くなると長時間腹痛になることが特徴としてみられることがわかってきた。

人の言いなりになっていることを自覚していないかもしれないと、気がついたのは父だった。

「あいつ、いろんなことにNOとかわらないかもしれません。友達から誘われて断っているのを聞いたことないですから」

少しずつハヤト君像が浮かんできた。

「穏やかで、幼い感じがするのは、この子の特徴だと思っていたけれど、人に言えないことが多いかもしれません。口下手だし」

母も何かに気づいている。

学校に行かずに家で過ごしているときは、普通にしていると思っていたが、人とのコミュニケーションの仕方に注目していると、さらにハヤトの気持ちを理解することができた。

ハヤトは、別に無理をしているわけでもなく、我慢しているわけでもなくという様子に見えるが、自分の気持ちが何を望んでいて、どのような状態にあるかはわかっていないようだ。

「お前、友達がお金返してくれないと言っていたけれど、あれどうなった？もう返してもらったのか？」父がたずねると、「いいや、あれはもう返してもらわなくていいわ～」

もういいわ、とか、どっちでもいいとか、流してしまうような表現が多い。

両親がハヤトに注目すると少し戸惑っている。このような話題がただ面倒なのか、複雑な表情だ。

ハヤトは人づき合いの中で、断れないのではないかと両親は考えている。

他にも苦手なことがでて来るかもしれない。

「なんで返してくれっていわんのや？」

父が問いかける。

「えっそれは、かわいそうやし、どっちでもいいねん」

黙っていられなくなった父がハヤトに話す。

「お前みていたらイライラするわ。もっとはつきりせんか～」

「お父さんそんなにきつく言わなくてもいいじゃないの」

と母が助け舟を出す。

「わたしもハヤトに何かを頼むとあんまり断れられたことはないように思う、この子、気が良いのよ。」

家族がふたたび、ハヤトの今をなんとかしようと動き出している。

なんで不登校が続くのかと疲れ切っていた家族は、もう一度ハヤトの行動パターンを見直し、なんとかたくましくなってほしいという気持ちが出て、これまではただ甘えている、怠けているハヤトのイメージから、実は、人づき合いで困っているハヤトに気づくことで、両親が応援し始めた。

螻蛄の斧 (とうろうのおの)

— 社会システム変化への介入 —

part 1

1990年児童相談所内外事情 第二回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

常識的レベル以上のことを知っているわけではないが、科学技術は刻々新しいものをみつけ精緻化しているといえるだろう。iphoneなど日常生活に入り込んだパーソナルな道具をみても、このことは実感できる。一方、人々の暮らす社会の仕組みやダイナミズムはどうだろう。10年前、20年前と比べて、時間経過に見合う進化をしているだろうか？

むろん戦後の混乱期と比較すれば、何もかもが大きく変化したことは言うまでもない。開発途上国が条件さえ整えば、急速に発展するのは当然だ。そんな話がしたいのではない。その先の丁寧に構築されるべき社会システムの話だ。これを考えるといつも、「戦争」は相変わらずなくならないが、兵器は格段の進化を遂げている事実を思い出す。戦争のない世の中を作るのが、超精密なハイテク兵器を作るよりずっと難しいことは分かっていることだ。人と人との関係世界に持ち込まなければならない科学は、なかなかの難問だ。

そこまで話をひろげなくても、わが国の「貧困」一つ取り上げてそれも言える。二十五年前、社会は一億層中流化といわれて、貧困問題は「生活の質」を問うような流れにあった。物量的な貧困は克服されたとみんなが思った。しかしそこから更なる向上はしなかった。そして今又、世の中は量的貧困が復活しつつある。

こんな繰り返しの世の中である。アイデアマンが思いついたり、時代の風にみんなが飛びついたりするものの多くも、たいてい過去の焼き直しである。独創的なものなど、そう簡単にはひねり出せない。そしてどれもこれも足が速い。(つまり直ぐに腐る、廃れる)。にもかかわらず、なぜポツと出たものがもて囃されるかという、おそらく、飛びつく人々の無知、無責任との共同作業だからだろう。

世の中の多くの事態が、幾多の積み重なりの上に今を形成していることに、もう少し自覚的でも良いのではないかと思う。過去に実践されたものは、それなりの経過をもち、そこには利点も欠点も明らかになっていたはずである。試行錯誤の記録や記憶はあるものだ。これを知らないと、物事はいつでもゼロから始めなければならないことになる。

経験は浅く、若いから不安の強い職員が多い組織になってしまえば、蓄積されたものの発揮する力も目にするのも少なくなるだろう。そして緊急事態に追まられるばかりの仕事では、自己防衛反応としてのバーンアウトや、敵前逃亡もやむなしの事態を生み続けるだろう。

どの分野だろうと研究者と呼ばれる人たちは、先行のデータがあり、これまでに明らかにされた共有の知があることを知っている。新しい研究はその先の一步を模索している。様々な現場も本当はこうでなければならないのだが、なかなかそうはいかない。

特にやっかいなのが不安の強い素人管理者である。こういう人の用心深さ(自己保身)が、先人の多くの蓄積を無にしてきたのだと思う。

1990

二月

2/9 FRI

隔月、三所持ち回りで開いている、「児童相談所業務検討会議」。今月の議題は「教護院在籍児童の教育権保障問題」、「家庭裁判所と福祉関係機関との協議会(特別養子制度、シンナー問題、警察との関係、等々)まとめ」、「京都市児相と府児相の連絡会のこと」、そのほか。

「業務検討会議」は京都府三児相の再編整備が行われたときに始まった業務の見直し会議である。管理者が開催したものではなく、自分たちの日常業務の点検を、児童相談所再編整備計画に連動してはじめたものだ。

もともと京都府には南部に中央児相、北部に舞鶴、福知山の二児相があった。京都市は政令指定都市で市児相を独自に設置していた。人口急増の南部地域の強い要望があって、新たに児童相談所を設置することになる議論経過の産物だった。

最初の四カ所案(南部に新たに新児相設置)が、厚生省(当時)は京都府の人口規模からしてOKを出さないという話で、統廃合絡みのややこしい事態になった。

プランは京都府舞鶴児童相談所の廃止と福知山児童相談所への統合。そして南部に宇治児童相談所を新設することになっていった。

(この経過については、「1948～1987 京都府舞鶴児童相談所記念文集」という冊子がある。(右・表紙)1989年12月に発行されたものだ。130頁あまりの小冊子だが、戦後直ぐに生まれた児童相談所が、40年で使命を終えて閉じる経過を、川崎二三彦氏が七〇頁にわたって全検証している。情報によると、現在刊行準備中の彼の著作に、この文章が含まれるらしい。興味のある方は是非、ご一読下さい。多分私の覚えている事実とは異なるところも多いだろう)

新児相プランに関しては、当局と組合、そして職員との協議が断続的に行われた。労働組合は地元舞鶴市議会や教員組合の反対に理解を示し、廃止統合反対の立場にたった。世の中万事の浮き足だったスクラップアンドビルドの追い風に、地元住民の反対も分か

1948
1987

京都府舞鶴児童相談所記念文集編集委員会

ることではあった。

しかし一方、当時、中央児相職員であり、組合員でもある私は、微妙な立場だった。将来に向かって、何に着手しておかなければならないのかを真剣に考えていた。

私にとって廃止を検討されている舞鶴児童相談所は、六年間働いた二カ所目の職場だった。「それを無くせと君は言うのか!」と、先輩や元同僚達に言われたが、そんなセンチメンタルな話ではなかった。

この段階で京都府下の児童福祉司一人当たりの地区担当人口、南は北の二倍を超えていた。地域事情の差があるとはいえ、このままにしておくことが未来を見据えた結論とは思えなかった。私はその見直しを中心に、再編整備計画を実行すべしという意見だった。

私の役割、心理判定員(今は児童心理士)は、各所とも配置数も少なく、論ずるにあたいしなかった。

新児相建築へ

紆余曲折はあったが、最後は当局案の統廃合が決まり、その後は、新築児相の建物設計にも積極的に口を出すことになった。本庁職員と児相職員が一緒に、いくつかのグループに分かれて、全国各地の最近建てられた児相の視察に出かけた。

こうなっていく背景に直近の福知山児相新築があ

った。数年前、老朽化から新築移転になったそれは、ほとんど本庁主導の庁舎新築計画で、後で建つことになった宇治児相より建設費も遙かに多額だった。

その段階の職員の感覚は、どうせ削られるのだからあれこれ要求をしておけ。二倍ぐらいのものを出しておけば、ちょうどいいになるというアドバイスだった。

そして実際、福知山児相には、何に使うのか不明なまま、早々と故障した電動式のステージがあった。窓には数百万円(?)という飾り枠が付けられ、円窓はステンドグラス仕様になっていた。パッと見た印象は国道下のラブホテルと言った人があったが、全くその通りだった。

宇治児相新築に対峙する我々は、そんな気分ではなかった。あれもこれも要求するのではなく、必要なものしか要求しないから、その通りの建設予算を組んで欲しいと思っていた。本庁の担当者と一緒に行動することで、その真意は伝わっていたと思う。部長も児相をよく知っている人だったので、なるならないはともかく、出来ることをして新たな事態に向かう事になった。

視察

視察に出かけた新築なったばかりの滋賀県中央児相の一時保護所は、夜間、男女の生活ゾーンを区切るためと、無断外出(逃亡)発見のためのセンサーが設置されていた。

ところが実際動き始めてみると、このシステムのランニングコストがバカにならないというので、普段は止めているという話だった。思いつきと、実態運用の間には起りがちなことだ。皆さんの家にも、あったら便利そうに思って購入したが、実際は二、三度使っただけという通販商品があるだろう。

遠方の視察もいくつかの班に分かれて実施された。私は山形県の児相に出かけたが、そこで改めて、業務姿勢と建物の形は相似形だと思った。

山形県中央児相は合同庁舎のワンフロアー(4階だったか)に置かれ、エレベーターを降りると、保健所と左右に分かれるホールが待合室だった。ここで対応される親子のことを考えると、相談機関ではなく、役所の窓口だなと思った。

われわれの議論では、児相の待合室そのものの発想転換を議論していた。千客万来のごった返すような機関ではないのだから、直接、面接室に入って貰えばいい。問題を抱えて出向いた相談所の待合ゾーンで、見も知らない誰かから、「どうされました?」なんて話しかけられても、嬉しくはないだろう。それこそ、プライバシーの問題だ。だから新築児相に待合いゾーンは作らなかつた。

また、翌日訪問した新築・庄内児相の一時保護所は、児童の居室に集音マイク(隠しマイク)が設置されていて、保母の居室からモニタリングできるという、とんでもない仕掛けがあった。

同行した熱血漢のMさんが、「子どもの人権のことを、どう考えているんだ。刑務所でもこんな事はしていないぞ!」と視察させていただいているにもかかわらず吠えた。

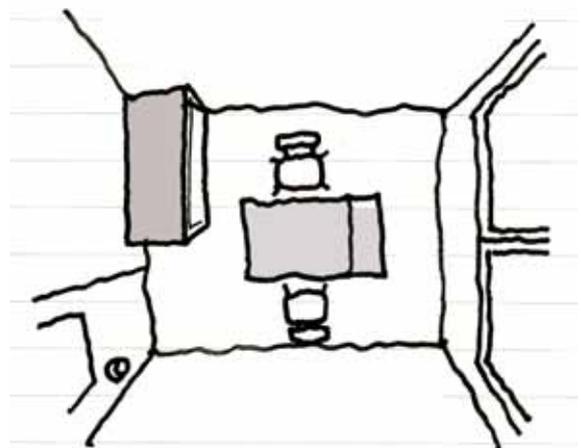
この状況で、こういう発言が出来るMさん。頼もしさと、困った人だという両面があると思う。近年、自分のことで騒ぐ人は増えているが、誰かのためにこういう事の出来る人は減っている。こんな人が状況打開の突破口になる事もしばしばだ。しかし一方、こういうスイッチの入りをする人の人生が安穩かという、そうでもないから、なかなか難しい。

庄内児相は、保母(女性)が宿直勤務をしており、当時、児相の一時保護所で起きていた事件(職員が亡くなる事件が複数あった)への懸念から、本庁設計担当のところで押し切った設備だと、次長は弁明していた。

踏まえるべき事を踏まえて、必要な議論を尽くしておかないと、こんな事は京都府でも簡単に起きることだと視察グループで話し合った。

空調の問題、採光の問題、職員と利用者の動線、一時保護所の子ども達の雨天時の過ごし方。廊下の声が面接中の室内に響く問題。全館冷暖房の場合、夜間や土日に、建物の一部を使用する際のコスト問題など、それまで考えた事もなかった話題を話し合った。

やがて東洋エンジニアリングkkとかいう設計事務所から出てきた、警察署の新築を手がけた経験を背景の図面(平面図)を、漫画家でもある私は一部屋ずつ俯瞰立体図に起こして、微調整の議論を繰り返した。



こんな仕事は業務でも何でも無い、全く好きでやっていること扱だったが、立体図におこすと、実際に面接室を使うときのイメージがみんなにも浮かんだ。

それは例えば、入室して着席した人に見える景色はどんなものかと、その時、手荷物はどこに置かれているかと、部屋が殺風景すぎないかと、具体的な想像だった。

職員体勢

再編整備計画であるのだから、現有する課題にできるだけ総合的に取り組もうと思った。だから、新しい児相の職員体勢にも意見を出していった。しかし人事に関しては壁が厚く、最終的には管理者と組合が、思いがけない妥結案で手打ちをした。

組織、建物は統合する。所長や次長、庶務担当は舞鶴児相、福知山児相それぞれに一名ずつ配置されていたのだから、統合されれば自動的に各一名減になる(マイナス3人)。一時保護所も統合されて一つになる。保母、指導員、調理員が減(マイナス3人)。これは議論の余地なく当然である。

しかし、他の職種、特に児童福祉司は現行通りでという。相談部門はそのままの体勢で合併だという。これが地元で、統合案を呑んで貰うポイントだ。「統合による相談部門の縮小、劣化はない!」と説得したというのだから、そんな馬鹿なマイナス6人案があるものかと思った。しかし現実には、まさにそのように動き出した。

一方、新設の南部、宇治児童相談所の人員配置は、現行中央児童相談所の各地域担当を、新しくなる二カ所の児相に分割して対応するだけだった。

一時保護所は京都児相(旧中央児相)、宇治児相の二カ所になり、その対応職員も配置されプラス3人。所長、次長、庶務も一名ずつ増えるのでプラス3人。これで新児相の人員配置は、プラス6人になるという。つまり、直接相談業務職員の配分には変化はないことになった。この経過は人事のことであり、年度末ギリギリになるまで、私たちには明らかにされなかった。

てっきり児童福祉司、心理判定員の負担の南北間格差に、新提案があるのだらうと思っていたので、こんな拍子抜けの手打ちには、当局だけではなく、労働組合に対してもあきれてしまった。そしてこの後、数年にわたって、南北間格差の是正問題はくすぶり続けることになる。

福知山児相に定年退職職員があると、後を補充せずに欠員化して、じわじわと南に人を持ってくるような人事は、方針でもなんでもない。そのため、当時福知山児相の児童福祉司で退職間近だった人は、後任の人事を考えて悩んだという。迷惑をかけたくないからと自分の退

職後の人生設計の微調整を余儀なくされ人もあったやに聞く。

この頃私はもう、児相を離れる事になってしまっていたので、詳細は分かっていない。そして今、その後の児童虐待の追い風で、児童福祉司も児童心理士(旧・心理判定員)も、大幅増員になっている。

業務検討会議

人事は口の出せる余地の少ない部分だったが、建物問題に一定の目処が立つと、児相再編後の業務についての洗い直しも協議事項として浮上した。ここでやっと業検(業務検討会議)の話になる。

業務の点検とか洗い直しとか、言葉はよく使う。ただし問題はその方法である。似たようなことをやっても、結果が出るものと、出ないものがあるのは、皆良く承知している。この時の業務洗い直しはこんな方法ではじめた。

当時、三児相には総勢五十人足らずの職員が働いていた。庶務会計も含めた陣容である。その全員に、「自分の関わる児相業務で、改善を考えるべき項目はなんですか?」というテーマのアンケートを実施した。自由記述ではあるが、ノルマを一人10枚(一項目を一枚の紙に書く)にした。

児相業務の根本問題から、面接室のパイプ椅子の質、一時保護所のおやつとの与え方まで、各自の領分での懸案事項を半ば強制的に書きだして貰った。

三児相それぞれに業務検討会議担当(「業検」と呼んでいた)がCW、心理、一時保護、庶務と選任されていて、ここに本庁主管課の係長が加わった。

アンケートは500枚足らず集まる予定になった。実際はそこまで集まらなかった記憶があるが、それでも三百枚近く集まったものを持ち寄って二回目の業務検討会議をひらいた。

京都児相の卓球台をワークテーブルに、アンケートの分類を行った。

直ぐに改善できること。

中期的に検討、改善計画を要すること。

長期的展望を要すること。

根本的な理念や児童福祉機関としての課題。

これくらいのカテゴリーで整理していった。そして、この課題については、速やかに、三所共通に改善していった。

これで記憶に残っているのは、「ゴム印」の事である。当時のカルテ(これも三所バラバラで、後日、書式の統一が議論されることになる)は、要件について受付相談員が処理を記述して回覧して決済されていた。この要件

欄に押されているゴム印の文言が三所で違っているものがあった。

類似のことなのだが、言葉が違う。言葉が違うと、若干の違和感が三所相互に生ずることになる。三所をくまなく転勤した人はなかったから、他児相の言葉は異文化だった。これを統一するには、少々議論が必要だった。

中長期の課題ではこんな事もあった。宿直勤務明けの代休の取り扱いである。当時、京都府では一時保護所の夜勤を、職員が交代で行っていた。他府県の実態を見ると、専任の夜間勤務職員を採用しているところも多く、もう少数派になっていたと思う。しかし我々はかならずしもネガティブだけではなかった。

自分の担当する子が児相にはじめてきた日の夜、食事をしながら、TVのついた部屋で、何となくダラダラ話したり、「風呂に入ろうか…」等と言っているのは、豊かさを感じられる仕事だった。

しかし三十二時間以上の拘束になるこの勤務、時間外手当で対応すると莫大な額になってしまうので、一律の宿直勤務手当で対応し、あとは半日の代休で処理していた。そのように北部の児相のものは皆、理解していた。

しかし中央児相ではそのような処理が行われていなかった。年次休暇も満足に消化できない業務実態に、加えて半休を取れと言われても、実態はとても消化しきれものではない。結局、概ね2週間以内に消化すると内規された代休は、とれないまま権利放棄になっていた。

これが常態化しているのはおかしい、北部では取れている代休も、中央児相では取れないという不満の声があったらしい。そこでこの代休の定額買い上げが行われているという。そんな話は北部で働く者にはまったく寝耳に水の話だった。

また恒常的な時間外勤務の増加により、手当の100パーセント支給も難しいというので7割支給の現実もあった。ところがここでも、やたらに時間外の多い人と、僅かだという人への支給を一律7割は気の毒だという意見があったとかで、人によって満額支給だったり、7割支給だったりするという。

こんな話も三所で共有できる事ではなかったし、庶務会計を担当したことのない我々には驚きの実態だった。

今日、税収は伸びず、人員削減も進む今、給与カットも繰り返されたあげく、長時間の勤務をただ働きさせられている児相職員が多いのではないかと思う。今考えると、こんな議論も恵まれた条件下のお話に見えるのかも知れない。

業検(業務検討会議)では様々なレベルで、仕事の共通化と合理化を議論していた。そしてその成果を毎年、

冊子にまとめて重ねていくことになった。

5,6年間、毎年一冊出たのではないかと思うが、これは、人事異動で来る新しい職員に、業務をわかりやすく伝達講習する職場教科書や手引き書にもなっていった。

2/6 TUE

施設で育って、高校中退した女の子が去年結婚をした。式に招かれて何人かと出かけた。その彼女が久しぶりに尋ねてきて、「父の位牌を探したい…」という。

いろいろな経過を判る範囲で調べてみたが、余りいいものは出てこなかった。まだまだ頼りないことを言っているが、それでも大人と喋っている気がして安心する。彼女も一人前になってきた。

短期な人事異動を繰り返しては、こんな結婚式に立ち会うこともないだろう。せいぜい卒業式に巡り会うくらいだと思う。

児童相談所は事件に遭遇するのではなく、ドラマに会うのだと思って仕事をしていた(今もそうでなければと思う)。だから職場に生き字引のような長期勤続者が居てくれるのもありがたかった。

誰かが、どこにも頼れる人がないと思った時、自分のことを覚えていてくれるに違いない人のいる場所が思い出せたら、孤独にさいなまれることは、幾分減るように思う。

覚えていてくれる、自分のことを知っていてくれるというのは究極の支えだ。こういう人的資源は、資格や、専門性によってもたらされるものではない。

そういうことを分らない人が増えて、こざかしい議論で会社(企業)も社会システムも再編するようになって、人々は多く自殺するようになったのだと思う。先に鬱病があるのではなく、まず、孤立や孤独が人の心を占めてしまったのではないのか。これは昨今話題の高齢化社会の抱えるテーマとも共通している。自主独立は繋がり下手とイコールではない。自立出来る人は繋がることも出来る。きちんと繋がれないから、自立も出来ないのだ。

また、親族間の極端化した攻撃性の発露も、長い経過があってもあると思えない人の反応だろう。良いときも、悪いときも、親密なときも疎遠なときも、全て含まれて関係であることを学んでおかなければ、絶好調、ラブラブ以外の関係は皆、破滅するしかない事になってしまう。

私は京都から(関西から)他の地域に移ろうとしたこと

がない。たまたま機会がなかっただけではなく、京阪神、関西エリアで私も生きていることを、過去から今に繋がる人に、資源として示し続けたいと思ってきた。京都市内の利便性の高い場所に、自宅とは別に仕事場D・A・Nを構えたのも、その表れである。

彼女に関してはこの後のことも、よく知っている。世間の多くの主婦(母親)である人たち同様の悩みを抱えて今を生きている。けっして万々歳、めでたしめでたしの人生などではない。そんなことは当たり前だし、私が引き続いて面倒を見るようなことをする気もない。それが当たり前前の関係である。平凡に生きる人にありがちな悩みを、彼女にも確保してやれたのが、児童相談所の大人の知恵だったと思う。

2/10-12 SAT-MON

「家族療法ワークショップstep その2」をJR嵐山駅前コミュニティ嵯峨野で。昨年夏にはじめて開催して、申込多数で断った人があったので、もう一度同じプログラムで開いたものだ。北海道から九州まで、児童相談所を中心に、医療機関や教育相談機関、大学、研究所など、いろいろなところから、2回で71名の参加者があった。

このプログラムの主催は京都国際社会福祉センター(KISWEC)。新k式発達検査の販売や、講習も実施している社会福祉法人である。1989年に始まったプログラムだが、2010年現在も毎年、step(1)(2)(3)を開催し続けている。二十一年たっても、それほど変化しないものもあるということだ。

社会には必然というものがあって、それはその時々々のルールやトレンドとは異なったものだ。議会制民主主義の原則ルールのように、民意の結果として多数決で何でも決めてしまえる事実は存在する。これは、アメリカの好きな「マーケットが決める」という理屈と似ている。

しかし私は、誰がどう考えようと、世の中には必然が存在すると思っている。そしてそれは、存在し続けることで立証されることになる。

もて囃される(民意が強く後押しする)商品でも、あっという間に消えてしまうものに、価値など探す必要はない。本当のものは継続している。定番商品というのがそれである。

2/22 THU

受理判定措置会議。ややこしい事態を抱えたケースが多く、丸一日かかってしまった。夕刻17:30と19:30に家族面接の予約が入っていて、事務所を出たのは21:30だった。

家族療法を採り入れて、積極的に面接に繋げていた。結果も出ていたので、職場全体で取り組みが進んだ。

父親の出席も強く求めていた(20年前のことですよ)ので、面接時間が夜間になることも多かった。この事態を当時の次長(会計・庶務担当)からは、時間外手当が出し切れないから、仕事は昼間にやってくれと繰り返し注意された。

もっとも、今の児童相談所は児童虐待対応で、昼も夜もありはしない。何か起きたらどうすると騒がれれば、動く(しかない)。そう考えると、あの頃はまだ良い時代だったということになるのだろう。

「職場を出るのが21時30分過ぎになった！」などと書いているのは、そんなことは稀で、よく頑張っているだろうというアピールだからだ。これが京都府の児相では標準感覚だったのが1990年である。

状況はあっという間に変化する。今では土日もなく、携帯電話を持たされて四六時中・・・なんて、酷い労働環境だ。

前半に登場した川崎君とのことで、こんな印象的な記憶がある。私が京都府を退職して数年経った頃のことだ。1年に一度くらいしか顔を合わせることもなくなっていたが、たまにはゆっくり話そうかと時間を設定した。

業務帰りの彼が私の仕事場に手土産を持って19時前にやってきた。そして、20時過ぎに、川崎課長の携帯が鳴った。相談所に戻らなければならないという。

こちらは急ぐ要件があるわけではないので、お開きになった。おそらく、家族の日常に、こんな事が頻回にあるのだろう。

短期間で異動希望を出したくなる職員の気持ちも、「我が子ネグレクトですよ、団さん」と言っていた人の気持ちもよくわかる。

学校臨床の新展開

学校と児童虐待

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

虐待通告をめぐる

今回は、学校に福祉的な支援を行うスクールソーシャルワーカーが配置されるようになった(といっても各自治体により異なる)経過を述べてきました。

さて、今回は、児童虐待を発見しやすい立場にある学校という視点で、学校と児童虐待、そして学校と児童相談所との連携について少し考えてみたいと思います。

まず、2010年8月に入り報道された事件、東京都立高校1年女子が母から虐待を受けている疑いがあったにもかかわらず、学校が児童相談所に通告していなかったというものです。朝日新聞2010年8月9日付夕刊によると、担任が2010年4月に女子生徒のあざや、けがに気づき、その生徒が「酒に酔った母から暴力を受け

た」と話したため、担任は校長に報告・相談、校長は担任に「外傷を見ただけでは通報してはいけない。子どもの一方情報にすぎず、信用してはいけない」「家庭訪問をして状況を把握するように」と言ったとのこと。その後、7月に入り、再度けががあったため担任が判断し、児童相談所に通告、保護されたとのこと。この事件の後、東京都教育委員会はあらためて、各学校に対し児童虐待の疑いがある事例について、児童相談所などとの連携強化や、教職員個人でも児童相談所へ通告できる点などを校内で確認するよう通知を出しています。

児童福祉法第25条は要保護児童の発見者に対して、通告義務を規定していますが、さらに、児童虐待の防止等に関する法律第5条および第6条では、学校に対して、医療機関や、福祉機関と並んで児童虐待を発見しやす

い立場であることの自覚と児童虐待早期発見の努力義務、そして児童虐待を受けたと思われる時点での通告義務、また、守秘義務によって通告義務が妨げられないことを規定しています。つまり、早期発見、早期対応のため疑いの段階で市町村または児童相談所へ通告をするよう求めているのです。しかし、こちらも最近のニュースですが、大正大学の玉井邦夫教授らが全国の幼小中高の教員に行ったアンケート調査の結果が報道されています。2008年度中に性的虐待を疑った幼小中高教員33人のうち、約半数の教員が「確証がない」という理由から児童相談所へ通告していなかったというものです（朝日新聞 2010年8月13日付夕刊）。一方、これはTVドラマの話ですので、比較にもならないかもしれませんが、現代家族の母性や児童虐待を扱った話題作「Mother」では、児童虐待を疑い児童相談所に相談に行った小学校教員が児童相談所職員から、「わらわれも調査しますが、学校さんも何か（児童虐待の）確証を持ってきていただかないと…」というシーンが出てきます。

さて、児童虐待の通告をめぐるのは、かねてから学校と児童相談所との間では、さまざまな軋轢がありました。特に2003年大阪岸和田で不登校中学生がネグレクトにより餓死寸前で発見された事件は、学校と関係機関の連携や不登校の背景としての児童虐待が注目を浴びました。2006年文部科学省は「学校等における児童虐待防

止に向けた取組について」（玉井邦夫教授らが過去に行った調査 2002年～2003年「児童虐待に関する学校の対応についての調査研究」結果を含め）、学校の児童虐待防止に向けた現状課題のひとつとして、「学校が、児童虐待を発見しても関係機関への通告をせず、可能な限り自力で対処しようとする傾向がある。これには『学校が、伝統的に教育的指導の観点から限界まで自力対応の路を探らなければならないとする責任の大きさによるところが大きい』など、『学校ならでは』の背景があり、一概に責められるべきではない」としたうえで、学校の児童虐待対応に関する留意点のひとつとして、児童相談所との連携にふれ、「教員は、日頃から児童生徒を見ているため、その言動の変化等を通じて虐待の発見に至る感度が高く、児童相談所等関係機関に通告するが、これら児童相談所等の現状として、人材の不足等があり、軽度の虐待事例に対しては反応が鈍くなる状況がある。その結果、学校にしてみれば『児童相談所等はなかなか対応してくれない』と感じ、児童福祉関係機関にしてみれば『学校は通告してその後のケアをしてくれない』と感じるような、相互の実情に関する認識の齟齬が生じる事となってしまう。実際、連携をした場合のデメリットを聞いた場合、『価値観の相違により合意形成されにくい』等との回答があり、連携を経験した教員ほど連携のデメリットを感じている。このことから、学校と児童相談所

等関係機関とは、日頃から相互に連携をとり、お互いに顔を合わせ、顔見知りになり、相互の実情について承知していることが必要である。このような学校と関係機関との連携に関しては、約 9 割の教師がその結果について肯定的であったが、連携のほとんどは協議レベルであり、チーム形成にまで至っているのは 1 割程度に過ぎない。今後は、児童虐待の疑いがあるが、確証がない場合であっても、早期発見の観点から、学校だけで対応しようとはせず、児童相談所等の関係機関へ連絡、相談をするなど、日頃からの連携を十分に行うことが必要である。」としています。

筆者は幸いなことに、これまで、児童相談所、児童養護施設、そして学校と児童福祉、教育の現場に携わる機会がありました。

共通するのはその時々で、その機関の職員は児童家庭の幸せを考えて一生懸命仕事をしていたということです。しかし、一方で、やはり各機関の連携がうまくいかなかったことがあります。先の報告書では、学校は児童相談所と連携をするたびに不信感を募らせている状況がうかがえます。それはなぜなのか、その背景には何があるのか、援助過程のなかで、出会った子どもたちの思いや言葉をあらためて思い出しながら次回に綴ってみたいと思います。

文献

文部科学省(2006)学校等における児童虐待防止に向けた取組に関する調査研究会議「学校等における児童虐待防止に向けた取組について」

玉井邦夫(2004)「児童虐待に関する学校の対応についての調査研究」文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書

文部科学省(2010)「生徒指導提要」

場が生まれ

人と出会う

メタローグな世界への誘い

中村先生との対話

北村真也

(アウラ学びの森 代表 / 立命館大学院生)

エピソード1 理論は透かしのよう

私には2週間に1度の楽しみがあります。それは、立命館大学産業学部教授、中村正先生とのオフィスアワーの時間です。アウラでのエピソードを書き始めて以来、私たちはこの対話の時間を大切にしてきました。先生との対話は、いつも私の書いたエピソードを媒介にしておこなわれます。アウラという学びの実践共同体で日々繰り広げられる出来事をいくつかの層で記述しながら、より立体的にそれを表現することをめざしてその対話は進行していきます。

「何か、話が抽象的すぎるんですよ。コトバが大きすぎるんですよ。ここでギデンズンの引用なんかしないで、最初から最後までエピソードで通せるかどうかなんです。例えば、このエピソード、これなんかは北村さんの中に既に言いたいことがあって、A子を利用している形になるんですよ。何かそれは理論に合わせて人を斬ってる感じがするので、あまりいい感じがしないんですよ」

「なるほど、このことを言いたいがために、A子を登場させてるってことですね」

「そうそう、現実の方がもっとたくさんあるはずなんです。理論は理論でしかないからね。なんだろうね、“現実には緑で、理論は灰色”って言ったのは、ゲーテなんだけだね、現実をもっと緑なんです。現実をより緑色にするために理論はあるのであって、理論のために現実を持つてくると、理論が灰色化するんですよ」

「そうか、よくわかります。はじめに理論があると、現実がしぼんじっちゃうんですね」

「そうです」

私の中には、論文=理論 という図式がありました。だから、エピソードを常に何かの理論に照らし合わせて書くようになってきたのかもしれない。その理論は、社会学であったり心理学であったり教育学であったり、様々な領域か

ら理論を引っ張り出しながら私はエピソードを説明しようとしてきました。先生の言うように、理論はある一つのフレームだと考えることができます。そこには必ず限定された変数があって、現実には常に理論よりも変数が多いのです。だから、理論を通して現実を見つめると、そこに削り取られるものがあるのです。

「あと、コトバの問題がありましたよね。たとえば“命の大切さ”なんて表現がありますよね。こう言った段階で表現が陳腐になってしまう。こんな手垢がついたようなコトバを小説家の井上ひさしは“のっぺりコトバ”と言っているんです。手掛かりがないんです。誰も反対できない、どうにでも言ってしまうコトバ。無意味化してしまうんです」

「例えば、私の書いた中では、どんなコトバがありますか」

「そうですね。たとえば“生き方”こんなのはコトバが大きすぎるのよ。だからこんなコトバは、使わないようにした方がいい。それを使わないことで、より繊細な現実の記述ができるようになる」

「なるほど、じゃあ、意識してみます」

先生の言う大きなコトバ、それも理論と同じで現実を埋もらせてしまう。ソシユールの言うシニフィエ、共有された意味の中にズレが生じ、そのズレによって現実のデリケートな部分が削り取られていくのかもしれない。

「アウラの森はね、カオスのように何かか層になってあると思うんだ。それを理論や大きなコトバで削り取ってしまうのはもったいない」

「いや、私の中には数学的な思考傾向があると思うんです。現実をあるフレームを通してみるのが好きなんです。

ただ、そのフレームにあまり固執はしないし、いとも簡単にそのフレームをずらすことができる。むしろ、複数のフレームを同時に介在させたり、それを自由に可変することが私の数学的思考形態かもしれない」

「でも、どうしても理論が表に出るんですよね。それが、いかなのです。もっと理論を透かしていく。このことに挑戦してほしい」

「理論を透かすんですか...」

「北村さんは、子どもを観察するプロですから、子どもたちにいろんなものを見てもらうんです。目の輝きや、髪の手ね方、しぐさ、声の抑揚...、コトバではない身体知あるいは暗黙知、それを言語化してほしいんです」

「ボランニーの暗黙知ですか、難しいなあ...」

「そういう身体知を北村さんは、学びの活動の中に取り込んでいく。それはただの教室じゃないから、あのアウラの森の空間だからこそできるのかもしれない。ただ単に質問に答えているだけじゃない。北村さんは、他の先生とは違って、それが見抜けている。そこを書いてほしい」

先生との対話は、このように一見すると抽象的な議論が展開されています。しかし私にとって、あるいは先生にとって、それは極めて具体的なのです。ここでは、議論の対象となっているエピソードは単なる媒介にしかすぎません。それを媒介としながら、私と先生の今が出会っていく。そこに生まれてくるものは、決して予定調和の中にあるものではなく、この瞬間に生まれてくるものなのです。そしてそれが、議論の進行とともにどんどん変化していき、それに伴って私自身や先生自身も変容していくのかもしれない。

エピソード2 視界の中に理論を入れる

「前回、先生が言われたことを、私はポスター

セッションで“理論そのものを視点の中に埋め込

んでいくことで、理論に切り取られない現実の世界を記述すること”って表現したんですけど、そういうことでしょ？」

「そうやね」

「でも、まだピンとこないんですけど...」

「まあそういうことなんだけど、私は 視点 というより、視界 なんだけど、“視界の中に...”」

“視界の中に理論を入れる”ってどういうことなんですか？」

「私は 視界 というコトバが好きでよく使ってますが...、パースペクティブ に近いかな...、

視野 という少し違う。視野 は見えている世界ですからね。見えないものが見えてくるわけだからね。視界 ...」

先生の提案には、コトバの微妙なニュアンスの違いが含まれています。先生は、それだけコトバを大切に扱われているんだと思います。その微かなニュアンスの違いに、先生のこだわりや意図を読み解いていく。これが私に課せられた課題なのかもしれません。

「ところで、エピソードはあれから増えました？」

私は、この2週間に書きためたものを見せました。

「いっぱいあるじゃないですか、なかなかやるじゃないですか」

先生は、そういつて私の書いたものに目を通しました。

「これの ひとりの話 は、おもしろいなあ。ひとりがいいというこれね。これいいですよ。これ “ひとりがいい” ということをもっと深めませんか？ 解釈学的にね...」

「Y子ちゃんの話ね。この子、不思議な子なんですよ」

「その不思議さをもっと書いたらいいじゃないですか」

「Y子ちゃんねえ...」

「その深めがあると、もっとおもしろいなあ。まだわりとありきたりのテーマ性なんですけど...。

兄弟が多いとか、通信制がいいとか、いくつか出てきてるんですが...、“ひとりがいい”とY子は言う。そこに北村さんが“ひとりではあかんと思うけど”と言いながら、“ひとりがいい”と言うY子に興味を持ち始める。そこには、不登校の子どもではない、目の前のあなた、つまりY子がいる。今までY子には、そんな風に関わってきた人がいなかったのかもしれない」

「かもわからん...。何かこんな風に話すのはじめてだって、言っていましたわ」

「何か、あるのかもしれないね。そこには...。そこには、Y子と北村さんとの、私-あなた の関係があるのかもしれない。もし、北村さんがそんな風に話しかけなかったら、Y子はその他大勢のアウラの生徒の一人だったかもしれない...。というあたり、そこがおもしろかった」

先生は、いくつかのエピソードの中から直観的にもおもしろいと感じたものを取り上げ、そこに切り込んでいく。そして、そこから二人の対話は深まっていくのです。

「ひとり.....」

「ってなんでしょうね.....」

「というか、私は、“ひとりでOK”なんて思えない。まだそこまで、いってない気がするんです。ひとりになることは、どこかこわい。先生はそんなことはないですか？」

「私は、大丈夫です」

「本当ですか？たとえば、ひとりで旅に出る。でもそれは、必ず帰るところがあるから、行ける

気がするんです。ずーっと、ひとりで生きるって、なかなか想像できないかもしれない。でもY子は、それができる気がするんです」

「私はひとりが好きですよ。ひとり暮らしも好きです」

「先生は、Y子に似てるかもしれない。先生もまわりから理解されない感覚ってありました？」

「まあ、多少はありましたね。まあでもそれはよくありがちな孤独だと思ってましたけど」

「とにかく不思議な子なんです。毎日決まった時間に来ては、ただ黙々と寡黙に学んでいる。そして帰るときには、毎日、“楽しかったです”と感想を書いて帰るんです……」

「まあ、とにかくこの子は、なんか北村さんのもやもやを開発してくれたんだ。そしてこの子の合わせ鏡の中で、北村さんは何かをリリースしようとしている。この子の鏡に、北村さんとの出会いを通して何か映ったわけでしょ？」

「この子は、今まで学校の先生は嫌いやったというんですよ。今までの先生はよく“あんたはこうやる”って言ってきたけど、それはみんな外れていたそうなんです。でも、説明するのがめんどくさいから“うん”で言ってきたって言うんですよ。それで、そんな先生の関わりと私の関わりは、きっと彼女にとって根本的に違うんだろうと思ってるんです」

「どんな風に違うんだろう？」

「私は、Y子ちゃんに興味があるって、言ってるんです。それは私と違うから、私の持っていないものを持つてる気がするから、だからすごいなって思うんです。ある意味、敬意を持つてるのかもしれない」

「ますます、おもしろいね。これもっと深めましょう。っていっても、議論はしづらいかもしれないね。どう記述するかだよ。これ、北村さんしかできないものね。単に調査しているだけじゃないものね。深い記述...、北村さんは、この子の前に鏡を立てたわけだ。まあもう少し、書いてみてよ」

先生の話を受けて、私はY子の記述を続けることにしました。アウラの記述の切り口はどこでもいいのかもしれない。そこを深く掘り下げていくことで何が見えてくるのか。ひょっとすると、どこを掘り下げてみても、そこに見える世界は同じものであるかもしれない。ただ、今の私に必要なことは、それをどう記述するのか、私の記述のスタイルなのかもしれません。私の視野の中に理論を組み込みながら、これからも私は記述を試みます。そしてこの先生との対話そのものが、私の視野の中にさまざまな理論のフレームを組み込んでいく作業なのかもしれません。

エピソード3 つながりあうということ

つながりあうって、どういうことなのでしょう？私の中でグルグルと思考が回ります。ひょっとすると、私たちが「つながっている」と思っていることも、そう思い込んでいるだけで、本当はつながっていないのかもしれない。

「北村さんは、大学院に入ってから何か変化があった？」

「そうですね。コトバが増えました。表現できるコトバが増えたように思います」

「そんなの、もともと持ってたじゃないですか、北村さんは、もともと大変ボキャブラリーが多い人ですよ」

「いや、そんなことはないですよ。やはり大学に来てから、堰を切ったかのように本を読み始めましたし、授業を受けるたびに発見があるので、そのたびにコトバが増えました。でも、言われてみれば、大学に入って得たコトバには、すべて状況がついています」

「状況がついてるって？」

「つまりそのコトバを引き出していくと、そのコトバを使った状況やその時に考えたこと、そんな付随する状況がそのコトバと一緒によみがえってくる。だからそこにリアリティがあるのかもしれない」

「なるほど、そうですね...、そのコトバが北村さんのワーキングメモリーに出てくるようになったのかもしれないね」

実際、大学院に入ってから私の読書量は、半端なものではありませんでした。私はこの1年の間に100冊以上の本を読み、その他、かなりの論文にも目を通してきました。もちろん仕事をやりながらですから、自分でもかなり驚異的な読書量だったと思います。私は、授業で要求される本があれば、その本とその周辺に位置する本を最低、2,3冊は読みました。授業で先生に質問するためです。私は型通りの(予定調和的な)授業は面白くないと思っていました。どんどん質問しながら、その場で先生がうーんと唸りながら、自分の考えを述べる、その瞬間にその先生との出会いを感じていました。そして、そこまでの質問をするためには、ただ単に本を読むだけでは不十分です。その本に書かれているコトバに、自分自身の経験に関係づけていく必要があります。コトバを単なる記号としてではなく、私固有のシニフィエをそこ

に埋め込んでいく必要があったのです。

「ある講義の最後の授業で、年配の学生の方が問題提起をしたんです。“最近の学生たちを見てみると...”ではじまる内容だったんですけど、いわゆる若者批判ですよ。その問題提起を受けて、先生が学生たちに意見を求める。すると彼らは、素直にそれを認める...。私は、そのやり取りを聞いていてどこか違和感を感じたんです」

「どんな違和感？」

「その年配の方の意見の根底には、若い学生たちを自分とは違う他者としてみる認識がある。つまりその方と若者は切り離されている。でも、私の中には、少しそれとは違った認識がある。私は、彼らと同じ側面を常に持っているという認識、ここが違うと思ったんです。その理由は実に簡単で、それは私自身が彼らと同じ社会に今生きているということです。私の生活も彼らと同じ選択消費の社会、情報化の社会、個人化に向かう社会の中に埋め込まれているという事実です。だから、私は日々葛藤の中で生きているのかもしれない。私がこの肉体を持っている限り、私の了解を超えてどんどん進んでいく社会の中で生きていかなければならないのであり、現代社会の持つ病理的な側面をも共有しなければならないのです」

「なるほど、そうだね」

「だから私は、こんな風に発言したんです。“私は、みなさんと同じ社会に生きているので、当然みなさんと多くのことを共有していると思います。私が、その中で最も気にかけていること、それはつながりということです。選択消費、情報化、個人化が末端まで普及した現代社会では、私は気を許すとバラバラになってしまうという緊張感があります。たとえばこの授業で、私たちは現代社会における家族について学んできました。そのいくつかの論点について問題提起をしてきました。

でも、授業が終わると自分が問題提起をしたにもかかわらず、その問題とされる生活の中に平気で埋没していく。ここには、授業の中の自分と日常の中の自分との間の分断がある。このことに対して私たちはもっともっと自覚的にならないといけないと思う。私たちの生活は、分断されたバラバラのものがただ集まっているのではない。一つのもものが変われば、全体が変わっていく、その有機的なつながりを意識して構築していかなければならないんだ”と、こんな風に話したんなんです。すると、授業が終わった時に、何人かの学生たちがやってきて、もっと話を聞かせてほしいと言ってきたんです。それで彼ら5人が、今度アウラにやってくることになりました」

「へー、楽しんでみたいだね。彼らは他学部の院生？」

「そうなんです。たまたま授業が一緒になっただけなんです…」

「北村さんのコトバに彼らは出会ったんだよ。つながったわけだ」

私にとっての学びとは、つながりあうことかもしれません。それまで、バラバラだったことが、あるまとまりを持ち始める。するとそこにある意味が生じてくる。つまり学びとは、未知の情報と自分自身との出会い、もっと正確に表現すると、自分の現在の生活や過去の経験とつながりを持った既有知識が未知の情報と統合されていくプロセスと言えるかもしれません。そして、この学びは他者との深い出会いや対話の中で、さらに輝きを増していきます。それは、他者との既有知識との出会いを意味することであり、そこには分断のできない他者そのものとの出

会いがあるからです。

「私の中では、切り離されていない感覚がある。私は、一人、たった一つなんです。こうして先生と話している私も、授業で質問をする私も、生徒の前の私も、家族に接する私も、みんな一つの私。だから、そのどこかで私自身が変われば、全体が変わっていく。私にとって他者との出会いは、その他者全体とつながること、もちろん他者のすべてに関わることなんかできません。あることを通して関わるのですが、そこでの深いかわりが大切になってきます。たとえば、先生との対話、これにはかなりの深さがあります。だから私の深い部分での変容が起こり、それは同時に先生の深い変容を促しているように思います。こんな出会いが起こると、この会話を共有しながら双方に深いつながりができる」

「それが北村さんの言う社会連帯なんですね」

「そう思います。形だけの連帯ではなく、本当に人と人が出会っていく。この瞬間に一つになれることかもしれません」

つながりあうということ。これは現代社会において最も大切なことかもしれません。そしてこのことは、単に人間同士の関係性にとどまらず、個人の学びにおいても同じ課題を残しています。現代社会が結果的に、このつながりあいを分断する傾向を持ってしまっている限り、私たちはその現状に対して自覚的であるべきであり、意識的にそれを統合していかなければ、本当の意味でつながりあうことはできないのではないかと思うのです。

幼稚園の現場から

鶴谷主一

原町幼稚園(静岡県沼津市) 園長

園児募集の時期です。

この頃、少子化の影響で大学の学生獲得が大変だという報道がされています。夏休みや休日にはオープンキャンパスを何回も開催したり、高校生の気に入るような雰囲気作りをしたり苦労されているようです。私の娘も来年高校を卒業する予定ですが、無料送迎バスに乗ったりして大学、短大、専門学校のオープンキャンパスに出かけ、お気に入りの学校を探して忙しく出歩いています。送られてくるダイレクトメールも半端な量じゃありません、高2の次女にも送られてきますので、「またきたよ」と封を切らずに資源ゴミに直行するものも少なくありません。もったいないですね～(^.^)

この波は既に15年前に幼稚園にやってきていまして、最近では、その波が徐々に高まってきているところです。そのため、私立幼稚園も地味ながら一生懸命に園児募集に力を入れてきているのです。

園児募集ということば。なんとなく商売っ気を感じて響きが良くありませんね、僕も好きではないですが、とにかく園児募集を考えずして、今の幼稚園は成り立ちません。行政からの経常費補助金が年間総収入の2割ほど交付されますが、それでも園児が減ると補助金も減り、経営を圧迫して

くるのが今の幼稚園経営です。



〔2学期の始業式で話をする園長鶴谷〕

運命の10月1日

私の居る沼津市では毎年10月1日が入園受付日ですが、お隣の富士市は9月1日。東京、神奈川では11月1日と、それぞれの地域によって受付日は異なります。

「来年4月の入園なのになんで幼稚園ってこんなに早いのか？」という疑問がありませんか。

どうやってこの日が決まっているのか、それは国や行政が決めている訳でなく、たいていが地域の幼稚園団体の取り決めで決まっていると思います。

「一歩でも早く園児を獲得したい！」という心理的なプレッシャーはどの幼稚園にもある訳で、取り決めがなかったら、入園受付日は大学の就職

活動のように際限なく早くなっていくでしょう。3年前のことですが、沼津市の幼稚園長が集まる会合で「富士市に合わせて受付日を1ヶ月早めたほうが良いのではないか」という意見が出されて議論しましたが、最終的に「富士市近隣の園のみ(1園)早めることは容認するが、その他の園は今まで通り10月1日厳守でいきましょう」という結論になりました。どこにでも焦る人はいるものですが、そこは地域密着型、通園範囲外の園には全く関係のない話だったのです。

秋に入園受付をするもう一つの理由は、来年度の職員態勢把握のためです。幼稚園の経営は入園する園児数によって来年度の予算がほぼ決まってしまうので、入園受付の日が来年1年間の台所事情を決めてしまう運命の日なのです。早めに入園児数を知ること、来年度の運営体制について早めに対策することができる訳です。たとえば近頃苦勞している新規教員採用にも早く手が打てるわけです。



〔ボディーペインティングを楽しむ〕

スムーズに集団生活へ

教育的側面からみれば、たいていの幼稚園では「一日入園」といって、4月の入園までに何回か親子で登園して、徐々に幼稚園生活に慣ら

していくプログラムが用意されています。原町幼稚園でも入園前に5回、入園式直前にウォーミングアップで連続4日ほど子どもだけで登園するプログラムがあります。

入園児全体の長子の比率はだいたい6割強、その人たちは、親として初めて我が子を教育機関に預ける訳です。「一日入園」のプログラムをこなしながら職員と関わりつつ、園のやり方や制服や道具などの準備、そして気持ちの準備を進めていくこととなります。その期間と回数を考えれば秋に早々と入園を決めるというのも、良い時期といえるのだと思います。

入所が決まると、翌日からでも預けられる保育園と比べると、なんともんびりしてゆるやかな親子の時間を確保しつつ、はじめての集団生活へスムーズに移行していくシステムが構築されていることに気がきます。経営的な思惑と、教育的な意義がうまくバランスをとった結果、9月~11月という入園受付時期が決まってきたのでしょう。

商売上手な園長？

ところで皆さんは、幼稚園の園長先生というところどんなイメージをお持ちでしょうか？ 子ども好きで、品行方正で、幼児教育に人生を賭けているような、ちょっと不器用だけど温かみのあるおじいちゃん？ おばあちゃん？

なかなか「商売上手な園長」というイメージは持っていらっしやらないでしょうね。しかし現代の幼稚園園長は、商売上手でなければやっていけない側面が大きくなっています。もし教育者タイプと経営者タイプで分けるとすれば、私の知っている園長は9割が経営者タイプの園長です。

現場で子どもたちの保育を長年やってきた生え抜きの女性園長は少なくなり、圧倒的に男性が多くなっています。幼稚園経営にもパワーゲーム（競争）の波が押し寄せ、その変化に適応するために男性園長が増えたのかもしれませんが。

対人援助という面から見ると、これは、あながち悪いことではありません。

通園バスの話

こんな話があります。

園児減少に悩む小さい幼稚園。幼稚園の三種の神器と言われた 通園バス 給食 延長保育のうち、通園バスを使っていません。なぜなら、教育者としてのポリシーがあるからです。

「毎日、親子で手をつないで道々草花をながめたり会話を交わしたりしながら通園する、それこそ親子のふれあう微笑ましい姿、正しい姿ではないか」

気持ちはとても良くわかりますが、園の周りの道を見ると歩道は狭く交通量も多い、ベビーカーを押しながら片手で園児の手を引きつつ通園するお母さんだっていると思います。雨の日は車を運転してくるのでしょうか……その苦勞が想像できます。

「良いのです。その貴重な時間を大切に考える人が選んで入園させているから良いのです」という主張ももっともです。

ですが、私は子どもが在園している3年間にいろいろ事情が変わることも考慮し、「園バスも利用できますよ」という選択肢を提供していないことが、援助不足だなあと思うのです。援助不足の

園は選択する人が少なくなるのは当然の結果かもしれません。

極端なことを言えば、

教育者タイプの園長の視線は内向きに、
経営者タイプの園長は外向きです。保護者（利用者）のニーズを一生懸命つかもうとしています。

動機が「より多くの園児を獲得するため」であっても、実行していることは一応援助的……なのでしょうか？



〔園バスに乗って園外保育へ〕

園バスのもう一つの話です。

保護者のニーズに応えるために園バスをどこまでも走らせ、ドアツードアをモットーに個々の家庭を回っていくコース設定をしている園。

「あそこの家にも行けるんなら、ウチもお願い！」この発想がまかり通ってしまいます。あきらかにサービス過剰。しわ寄せはバスの運行時間が長時間になり、園児が全員集まるまでに時間がかかってしまうため、保育の開始時間が遅くなったり添乗する職員への負担が大きくなるという弊害が生まれて、保育にしわ寄せがかかって評判が落ちてしまいました。

援助的に見えて結果は悲惨、めぐりめぐってポディブローを喰らってしまいました。

やはり動機は大切です。「利用者サービス」だけで園児募集という目的を達成しようとする、結果的にうまくいかないのです。親ばかり援助して肝心の子どもは二の次という姿勢が見えると、評判は落ちてしまいます。なんといっても本業は「子どもたちを発達させる」という教育サービスですからね。

ちなみに、私の園では2台のバスが2回往復していますが、バス利用者全体の利益を最優先に考えることにしています。

バスの利用やキャンセルは月ごとに自由ができますし、コース内で別のバスに乗ることも、徒歩通園児が月2回までバスに無料で乗ることもできます。

ただし日割り計算は無し。バスコースの大きな変更は年度替わりのみで、途中から利用する人は多少不便でも我慢すること。できるだけバス停を決めて集まってもらうが、赤ちゃんがいる家庭などはできるだけドアまで迎えに行く。そのかわり大きくなったらバス停に出てきてもらう。・・・など細かく決まりはありますが、決めごとに縛られずに個々の相談には応じようという姿勢を保つことにしています。バスだけに限らず「お互い様」感覚が漂っていることが杓子定規ではない援助をしやすいようにしています。

バランスが大切かな？

園長は内も外も見て、子ども、親、職員のバランスを考えつつ、時間や労力、資金をどう配置

するかを考え、我が園のルールを作っていかなければなりません。

子どもにウエイトが行き過ぎると「だいじな教育のためだ、これくらい我慢して当然でしょう」という教育者の発想が過ぎますし、親に傾き過ぎると、職員と場合によっては子どもにも無理をさせることになります。職員にウエイトが行き過ぎるとするのはあまり聞いたことがありませんが、仲良しサークル的になってしまうでしょうね。

幼稚園での「商売上手な園長」はバランスの取れた対人援助的視点が無くではうまくいかないよ！ということで締めとしたいと思いますが、少しはイメージがアップしましたでしょうか？



〔みんなでシャボン玉とぼそ〕

この差は何だ！？（脱線話）

話が脱線しますが、入園料ほど地域格差がある料金設定も珍しいと思っています。

全国一高い神奈川県は104,474円、一番安い山口県が16,843円、なんとその差は87,631円！。仮に100人の新入園児がいるとしたら、その差は約876万円！……頭がクラクラします。この差はいったい何なのでしょう？高い地域は都市部の幼稚園ですが、地価が高いからという理由は当てはまりません、学校法人の土地は非課税です。

教育内容や園環境が都市部と地方でそれほど変わるといっても考えられないとすると、入園という同じ条件に付けられた価格の違いに、「なんでこんなに違うの！」と突っ込みたくなるでしょう。幼稚園業界の地域独自性ですよ～。これがガソリンだったら大問題になるでしょうね。

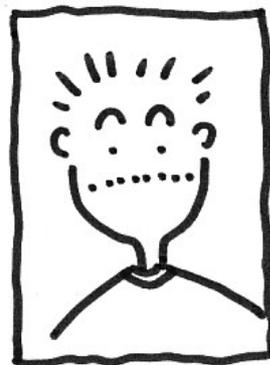
この入園料も平成21年度には全国都道府県のうち21県が前年比マイナス。実際には入園料の値下げ競争もじわじわと始まっているようなのです、しかも地方都市で。神奈川は4.1%増です。

（2010年版 全日本私立幼稚園連合会 要覧より）



〔夏のおんがくかい にて〕

学校法人松濤学園 原町幼稚園
定員 200名 6クラス
幼稚園歴 27年（内園長歴 8年）
<http://www.haramachi-ki.jp>



ツルヤシュイチ

写真と本文は関係がありません。

福祉系 対人援助職養成の 現場から

西川 友理

福祉系教員にとって夏は、実習訪問の季節。

社会福祉士などの実習では、定期的に教員が実習先に赴き、指導を行います。長期休みに集中して実習をする学生が大勢いるので、夏は結構、東奔西走することになります。

私は自分の専門と関連して、児童養護施設や障害者支援施設に実習巡回指導をする機会が多くあります。その際に、実習担当者さんとお話をする場で、施設長さんが同席されることが増えてきました。施設長さんいわく、来春の卒業生の中で、うちで働きたい、と言う人はいませんか、とのこと。何だったら来月からでも！いや、今すぐ！という施設もあります。

この就職難のご時勢に、福祉の現場は人手不足です。メディア等では高齢者施設の

人手不足や労働状況を報道する機会はよくありますが、児童養護施設でも、障害者支援施設でも、同じような状況があります。

「福祉職に就きたくなる理由」

今、福祉現場で働きたい、という学生はもちろんいます。

それらはどんな学生か。

福祉が楽しい、面白い、すごい、意義がある、と思った学生です。

ボランティアや実習など、現場でそれらを体験した学生は、こちらが水を向けると大興奮して話をしてくれます。

特に、利用者さんとの関わりが楽しかった、という学生と同じ位、職員さんの姿に影響されてくる学生が大勢いるようです。

「先生、実習大変ですわ」と、ある学生

が言う。「何が大変って、毎日の実習が終わった後の反省会。毎日1時間以上あるんですよ！」職員さんが反省会の中で、熱く語って下さって、思わず議論になっちゃって、なかなか終わらない、とのこと。大変大変と言いながら、顔は嬉しそうに、どんな話をしたのか、熱っぽく語る学生。彼はそのまま、その施設でのアルバイトを始めました。

また別の口下手な学生が、特別養護老人ホームのボランティアに行ってきたと言う。「先生、あの施設の職員さんの笑顔って、凄いですよ。利用者さんと目が合った時にね、職員さんが微笑んだら、利用者さんも微笑むんです。喋らなくても、コミュニケーションって出来るんですね。」人付き合いが苦手だと言っていた彼は、その経験から3年後、高齢者分野に就職したいんだ、と話してくれました。

高齢者の在宅サービスでの経験が素晴らしかった、と言う学生。「介護保険とか、年金って、教科書の中の事だと思ってました。いやもちろん、実際動いている制度だって知っていたけれど・・・面接場面を見学させていただいて、ワーカーって、制度を、人の生活に合わせて『ほんまに』活用できるようにする仕事なんやなあって、解りました。」この学生は、相談援助業務の仕事を現在探しています。

まずは利用者さんと関わることが好き、何とかしたい社会問題がある、そういう思いを持って、福祉に興味を持ち、進路を進めてきた学生たち。そんな学生たちが、福祉の現場で、「面白くて、意味があり、責任もある、ワクワクする仕事」ということを体現している職員さんの姿を見る。「ね、これがあるからこの仕事、やめられへんの

よ！」と笑う職員さん。「いつかはこんな支援をしたい」「こんな施設にしたい」と、語り始める職員さん。目の前の人の話を、全身で傾聴し、支援する職員さん。

もう仕事が好きで、楽しくって仕方がない！という福祉職の生の声を聞き、その空気に触れる。そのうちなんだか、福祉の仕事で楽しくやっていることがうらやましく見えて、自分も、こんな風に働きたいなぁと思いはじめる。そうすると学生たちは、福祉職に就く、と思いを、現実のものとして考え始めるように思います。

「魅力を伝える・魅力が伝わる」

対人援助職の現場の方々には、是非、「この仕事はこんなに充実していて、こんなに楽しい！」という姿を学生に見せていただければ、と思います。

そのためには、職員さんたち自身が、楽しく仕事ができなければなりません。つまり、自らの労働環境を整えることが不可欠だと思います。給与、福利厚生、人間関係等、様々な面から、改善をしていく。そうすればより、その職場は魅力的になっていく。その場で働いているのが嬉しい、楽しい、という雰囲気は、その場に関わる人たちに必ず伝わると思います。

対人援助職の人々がより気持ちよく働ける事が、明日の福祉職を作っていくことになると、そのように思うのです。

我流子育て支援論 ～ 妊娠をめぐるって～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

一般的に、女性が妊娠したときの気持ちはどうだろうか？うれしいのか、戸惑うのか、困るのか・・・。

もちろん、妊娠した時の状況によるだろう。結婚後の妊娠は喜ぶべきことで、周囲からも祝福される。親になる不安はあるものの、まずは嬉しいと思うのが普通であろう。しかし、未婚の妊娠はどうか？

これは、時代とともに大きく変化してきた。50年くらい前であれば、結婚前の妊娠は「ふしだら」などと言われ、認められにくく、墮胎してしまうことが多かった。結婚するまでは性的関係を持たないのが常識だった時代であるから、当然であろう。

それでも「男女7歳にして席を同じうせず」という時代ではないので、男女が知り合い、付き合うことは比較的自由で、恋愛中は、妊娠しないよう注意していた。もちろんどの時代でも例外はあるが、未婚の妊娠は社会的には「悪いこと」と言うイメージが強かったため、妊娠した瞬間は「困った」と思うのが一般的だっただろう。

その後、日本がどんどん欧米化していくにつれ、恋愛はオープンになり、処女ということが大切に扱われなくなってきた。しかも、テレビが普及し、ドラマがたくさん登場するようになると、その影響も大きく、高校生などの妊娠、出産の話があったり、

「幼な妻」が流行ったりすることで、若年妊娠や未婚の妊娠に対しての歯止めが一気にゆるくなり、何か格好良いことのように捉えられてきた。

その時々で、物事の捉え方、善し悪しの基準と言うのは常に変わっていくものである。そう言えば、「地ベタリアン」という言葉をご承知の方も多いと思うが、電車の中や道端にべったり座っている女子高生を今でも見かけるし、ルーズソックスや腰パンに眉をひそめた方々も沢山いるだろう。不衛生だとか、見た目が悪いとか、年配の方には不評だったと思うが、私も何が良いのかと思ったので、やはり年配に仲間入りしているのかも知れない。

私がこの年代の頃は、ヒッピーが台頭し、男性のロングヘアーにラップズボン、女性の超ミニスカートが流行ったと思ったら、マキシやミディのスカートにコッポリ靴と、その当時の親世代からは、眉をひそめられたファッションだったことを考えると、歴史は繰り返されているようだ。

しかし、電車の中で、化粧をして七変化していく女の子を見るようになって久しいが、恥じらいがないというか、場をわきまえないというか……。近頃では公衆の面前で抱き合ったり、キスしているカップルも見かけるようになった。外国では普通に見られる姿かもしれないが、日本の文化からすると抵抗を感じるのは、やはり私がおばさんだからだろうか？

こうした社会的変化の中で、妊娠に対する感覚が大きく変化してきたのも当然であろう。

ここ 15 年くらいは、妊娠したことが軽いのりに変わり、「できちゃった婚」という言葉が、何のてらいもなく、ファッション

のように使われ始めた。そして、昨今では、セックスは、どんどん低年齢化し、高校のスクールカウンセリングで、生徒たちからセックスの話が出るのは、珍しくなくなった。当然、10代半ばの妊娠も度々見られるようになった。妊娠後の結婚も、最近では「できちゃった婚」ではなく「授かり婚」などといって、妊娠できることがおめでたいと言う捉え方もされるようになった。そこには、不妊の問題もあるだろう。不妊治療をする必要がないことを、正に実証しているのである。

先日、実家から早く出たかったからと言う理由で、結婚を急ぎ、そのために「出来ちゃった婚」を選択したというお母さんに続けて出会った。夫からは、「それじゃあ、誰でも良かったのか」と言われたとか。そういう意味ではないだろうが、このように出来ちゃった婚を、家から出るためのツールとして使ったという話も度々聞く。

母子手帳を取りに来たときに、未入籍が半数近くになっているのも、同棲が、珍しくなくなった現在では、当然の結果なのかもしれない。しかし妊娠することに対して無防備で、親になることの決意もないまま、親になっていくことの問題は大きいと言わざるを得ない。

昔であれば、13歳や15歳で嫁に行き、子どもを産むことが一般的であったので、若年の妊娠が問題だと言うことではない。もちろん、肉体の成熟度は、より安全に子どもを産むためには大切なことだと思うが、それよりも、精神的な成熟度が問題であろう。

ところで、今の子どもたちと昔の子どもたちの精神的な成熟度に違いはあるのだろうか？ 人生 60 年の時代には、15 歳といえ

ば、人生の4分の1まできていることになる。その時代では、高校に行く子どもよりも、中学を出てすぐ働く子ども達の方が圧倒的に多く、家からも離れ、自活していくという意味ではずっと速く、精神的に大人にならざるを得なかっただろう。しかし、人生80年の時代に突入し、誰もが高校に進学していく今の時代では、15歳で自立しなければならない子どもは非常に少ない。少子化の中、国民皆中産階級のような時代背景の影響もあってか、親の庇護の元、好き勝手をしている子どもの方が多いように思う。

人生の終末の成熟を100としたとき、15歳の成熟度を単純計算で求めてみると、人生60年の場合は25、人生80年では約19であり、成熟度が低くてもおかしくない。一般的に最近の子ども達は精神的な育ちが昔に比べて3歳程度遅れているという説もあり、事実その様に感じることも多い。

一方で、親もまた、子どもに密着し、子離れできずにいるのも、子どもの成熟を遅らせている要因であろう。高校生になっても息子と一緒に寝ることをおかしいと思わない母親も見かけるようになった。時には、自分の子どもを「一生家に置いておく」と言い切る母親もいるくらいである。パラサイト・シングルが普通なのかと思うことさえある。親も、可愛いわが子への愛情で本人の自立の邪魔をしていないだろうか？「少ない給料で一人暮らしは無理」と決め込み、「給料が上がるまで家から通えば良い」と言っている親の何と多いことか。自立心もないまま、親になることは、当然経済的にも精神的にも、問題を多く生むことになるだろう。子どもとその親、更にその

上の世代などを巻き込んで様々な問題を引き起こすことになるのだが、妊娠した時点でそこまで考えられているかと言うと疑問である。

このように見ていくと、突然の、未婚の妊娠は、昔ほど「困ったこと」では無いようで、妊娠後の選択として、結婚する、墮胎する、一人で生む等があり、出産後の選択も、一人で育てる、夫婦で育てる、祖父母と育てる、祖父母が育てる、里子に出す、施設に入れる等があり、結果的に何とかしている。加えて、母子・父子家庭への支援、ファミリーサポートセンターや保育所など、子育て支援のシステムも整備されてきて、子どもを生んでも何とか生活していける環境が整いつつあり、情報さえあれば、未婚の妊娠・出産はそれほど困ったことではなく、それがまた未婚の妊娠への抵抗感を低くしているとも言えよう。

また、親も、わが子の妊娠に関し昔ほど抵抗感がなく、父母と若い娘とその子が一緒に住んでいる事例を度々見かけるようになった。そこには娘の兄弟がまだ中学生や小学生でいることも珍しくない。小さいうちから、赤ちゃんを見られるようになることは親になることへの意識を育てる上では良いことかもしれないが、未婚で子どもを生むことへの抵抗感は余計に下げることになるだろう。経済的に自立し、自分の子どもを自分の手で、きちんと養育していくという、大人として、保護者としての意識、義務感はともすると薄れがちで、こうした意識の低さが、虐待と言う問題の底流になっていることもあるのではないだろうか。

妊娠はおめでたいことであるが、心から喜べる、周りからも祝福される妊娠であることを今一度考えるべきではなからうか。

同棲しても、避妊をすればよいだけの話である。古いといわれるかもしれないが、妊娠は、やはり、入籍後に夫婦で良く話し合ってから迎えるべき事柄ではないかと思う。

さて、未婚にしる既婚にしる、妊婦への支援に関し、我々支援者としての対処に大差はないだろう。

どういう形であれ、妊娠したことを共に喜び、親となる日までの過ごし方や物理的・心理的準備を支援していくことになる。時には、妊婦の親や夫あるいはパートナーと出産後の対応について話すことも必要だし、特に妊婦に精神疾患や人格障害などの問題がある場合は、常に気かけながら、支援を継続しなければならず、ともするとバーンアウトに結びつきかねない。しかも妊婦自身の発達障害や人格障害、精神障害は増加傾向にある。中には心理的外傷体験を持ち、自己基盤が脆弱で、自分をはじめ他者を信じられず、他者を拒否するような妊婦もいるのである。このような妊婦は、支援にのりづらく、支援者の細かな気遣いや根気強さが必要で、信頼関係を築けることが第一になる。

こうして努力して信頼関係が出来たところで細かいところを確認していくのである。

例えば、犬や猫をたくさん飼っている家庭では、赤ちゃんをどこに寝かせるか、犬や猫に引っかけられたり、噛み付かれたりしないか、毛の問題はないか、などについても確認していかねばならない。そこには、動物は部屋中を駆けずり回っているが、ずっとベビーベッドに寝かされていて、這い這いすらさせてもらえない赤ちゃんや、犬猫と同じ扱いを受けている赤ちゃんが居るといった事実に出会ってきたからこそその懸念がある。

タバコを吸う家庭であれば、灰皿はどこに置かれるのか、赤ちゃんの居ないところで吸うことはできないかなども確認する必要がある。もちろんそれは紫煙の影響やタバコを食べてしまうという事故を知っているからである。

母親としての意識が低いと、先日の二児の虐待死のように、こどもを置いて出かけ、帰ってこないなどということもある。もちろん虐待になるのだが、そういう母親になりかねない妊婦の把握が支援者の仕事になっている。

妊娠が分かって、母子手帳を取りに来た時点から、支援者（主に保健師）の支援が始まるが、まずそこで保健師の眼力、観察力が問われる。情報をどれだけ取れるか、原家族のことなどについても、心配なケースでは出来るだけ情報を取ることが求められる。出産までの、母親教室の活用やその折の対人関係や、定期健診の受診などがきちんとできているかなども把握しながら、この妊婦が母親としての意識を育てているか確認している。もちろん、父親教室などでも父親の確認もしなければならない。

また、地域の医療機関等との連携がうまく出来ていると、個人情報保護法の壁はあるものの、早くから妊婦の支援を開始できる。保健所や保健センターは発達障害や精神障害の診断を受けている妊婦はもちろん、診断を受けていなくても気になる妊婦の情報を医療機関と共有することが出来ると、妊娠中だけでなく出産後の母親の精神状態や育児状況に注意を向けることが出来、虐待予防につながるだろう。

初めての妊娠出産は誰にとっても一大イベントであり、生死に関わるストレスフルな状況であることは周知の事実であるし、

精神状態が不安定になりやすいことも知られているのに、医療機関や保健福祉等、地域のチームでのケアになっていないとしたら、それは問題と言わざるを得ない。個人情報保護法も、認識の低い妊婦への支援においては、「目の上のたんこぶ」になってはいないだろうか。虐待予防のためには、もっと積極的な支援が必要と思っている。

一方で最近危惧していることがある。人間は本来動物であり、子を産み育てることが出来るよう、遺伝子の中に組み込まれているはずである。しかし最近感じるのはそうした情報が欠落しているのではないかということだ。

社会では、セックスレスの夫婦、同性愛、男性精子の減少と生殖能力の減退、出生数の低下、不妊治療の増加など、人類の存続に関わる問題が増えている。更に環境の悪化は、アレルギー患者の増加、免疫力の低下、より強いウイルス、病原菌の発生など様々な弊害を生んでいる。豊かな物質と情報に囲まれながら、一方で動物的本能を失いつつある人類に未来はあるのかと心配になってしまいが、こうした社会環境、情勢の下、母親として育ちきれない人が増えた。

どのようにして、妊婦に母親になることの意識や楽しさ、大変さを伝え、母親として、子を思う気持ちを育てればよいのか。

昨今さまざまなプログラムが出来ており、私も講義をすることが増えたが、母親モデルが自分の親兄弟等、生身の人間ではなく、ネット情報や育児書になってきており、そうした情報に振り回されている母親たちの現状に戸惑いを感じている。今後、もっと参加しやすい研修の場や、生身のモデルと接する機会を増やさねばならないのだろう。しかし一方で、母親として育つときに

は、妊婦の原家族における母子関係が影響していることが多いが、そこに手をつけるには妊娠してからでは遅すぎる。もっともっと早い時期に何らかの手を打たなければならない。いつどこで、どのような手を打てば、この問題が解決されるのか、考えてみたいが、その前に次章で乳幼児の子育て支援について考えてみようと思う。



「不妊治療現場の過去・現在・未来」

連載 2

～ 生殖革命の時代 ～

荒木 晃子

注目されなかったトピックス

第二次世界大戦終結 3 年後の 1948 年、国内では男性不妊の問題解決に、夫以外の第三者からの提供精子を用いた非配偶者間人工授精^{*1)}が始まった。今から 62 年前の出来事ことである^(*): 婚姻関係にあるカップル以外の第三者の男性から精液・精子の提供を受け、妻の子宮に注入する手技。婚姻関係にあるカップルの場合は配偶者間人工授精と呼ぶ)

生殖革命の夜明け

同じく 1948 年、フランスではウサギを使い哺乳類最初の体外受精^{*2)}に成功した^(*): 子宮の外で、オスの精子とメスの卵子が自然に受精する環境要因を人為的に整え、その後受精卵をメスの子宮に戻す手技)。その 30 年後 1978 年には、イギリスで人類初の体外受精児が誕生することとなる。体外受精で誕生したルイズ・ブラウンという女兒は「試験管ベ

ビー」と呼ばれ、さらに 5 年後の 1983 年、日本国内でも初めての体外受精児の誕生に至った。世界各地で生殖革命が始まったのだ。日本の生殖医療技術は、その後現在まで、常に世界水準を保持し続けている。

戦後といえば、創刊号で「沈黙の時代」を語った A 子さんが生殖年齢を生きた時代でもある。敗戦を期した日本ではあるが、戦後の復興に追われ飛躍的な経済成長の水面下で、生殖技術は進化し続けていたのだ。それを裏付けるかのように、戦争終結の 3 年後 1948 年には、国内で法律学者などを含めた慎重な検討の後に、第三者から提供を受けた精液・精子を用いる非配偶者間人工授精が始まっていたことを知ったときは、正直、驚きを隠せなかった。

前回 A 子さんは、「(前略) 戦争で男の人がみんないなくなってしまうと、結婚するにもまわりはおなごばかり。相手を選ぶな

んでできない時代だったからね。」と述べた。この語りから、日本国内では、多くの青年を戦場に送った結果、婚姻対象となる成年男子が減少していたことを知った。それと同時期、非配偶者間人工授精が始まったという事実は“彼女の語りと何か符合する”と感じたのは、私だけなのだろうか。1948年から現在までの62年間に、婚姻関係にあるカップルに非配偶者間人工授精により生まれた子どもたちは、国内で累積するとすでに一万人以上いるといわれている。この事実をどれだけの人知っているのだろうか。第三者からの精子提供の問題は、代理出産や卵子提供の問題と共に、いま、まさに最先端生殖医療の在り方を問う重要課題の一つなのである。62年もの間先送りされてきたこの課題を含め、「不妊問題を未解決のまま次世代に残さない」こと - これが、現代に生きる我々に与えられた課題なのだ、そう確信した。

不妊を治療する時代の到来

生殖革命は「家族の不妊問題」にどのような改革をもたらしたのだろうか。医学史にも、社会史にも残されていない、「不妊問題を抱える家族」がむかえた生殖革命の実際を聞く機会を得た。不妊を治療する選択肢を得た家族に、一体、何が起きたのだろうか。

日本国内で初の体外受精児が誕生した1983年に、自らも不妊治療を始めた女性(B子さん)と出会った。Bさんは、現在50歳代の働く独身女性、子どもはいない。現在の彼女を見て、「不妊に悩み、不妊治療を受けた女性だ」と思う人はまずいないだろう。結婚後、子どもができないことを悩み、夫婦で話し合って不妊治療を開始したとい

う。生殖革命と同時期に、自らの不妊問題を生殖医療にゆだね、不妊を治療することを選択したBさんに、「生殖革命で家族に何が起きたのか」を問うてみた。

「生殖革命の物語」

エピソード 福音をきいた女性の語り

「松・竹・梅って、おすし屋さんの出前にぎり寿司にランクがあるでしょ？私の不妊治療のスタートは、そこだったのよ。まったくふざけた話よね～」

“松竹梅のにぎり寿司”をたとえに、彼女は自分の不妊治療体験を語りはじめた。50歳になり、子どもを産むことも育てることももう悩む必要はなくなったわ、と晴れやかな笑顔で語るBさんは、「不妊に悩むことがなくなる日が来るなんて、今まで考えたこともなかった」と言葉を添えた。

「命がけ・・・あの時は、本当にこの言葉がぴったりだった。子どもが産めるなら、自分の命も惜しくはないと思った・・・これ、正直な気持ち。ほら、自分の子どもを救うためなら、母親は火の中にも飛び込む、というでしょ？その気持ちと同じ。子どもを産んでもいないのに、おかしな話よね。でも、子どもがほしい一心で、痛くて辛い高額な不妊治療に通い続けたあの頃の自分をふりかえると、気持はまるで母親だったとおもう」

友人とのおしゃべりが何よりの好物、と自己紹介したBさんは、「不妊の話」ができることを喜んでいる様子だった。しかし、「命がけ」とはただならない。こころして話を聞かねば、そう思った。かくして、話し好きなBさんの物語は、「命がけ」とい

う言葉で幕を開けた。

「結婚して2年ほどたった頃かしら？なかなか妊娠しないので、近くの市民病院の産婦人科を受診。医師からは『妊娠しやすくなるように』といわれ、通院することにした。検査も異常なかったし、『ああ、通院すれば大丈夫なんだ！』って気軽に考えていた。でも、半年以上が過ぎたころかな・・・ほら、病院の産婦人科って、おなかの大きい妊婦さんが沢山いるでしょ？小さな子供連れの親子もいる。もともと子どもが大好きだったから、最初のうちは声をかけて、『おいくつですか？』とか、隣に座った母親と話をしたけど、そのうち、子どもを見ると涙は出てくるし、妊婦さんを見ると自分がみじめになるし・・・最後には通院できなくなった。『友人は結婚し次々に子どもが生まれるのに、自分だけ何年たっても妊娠しない』ことを悩んで家族や友人に相談し、ついには、『妊娠するための本』を読みはじめたり・・・笑えるでしょ？！」

おかしくはなかった。笑顔で語りつづけるB子さんの話は、決して“笑える”話ではない。軽快に語りつづけるB子さんの表情と、その話の内容は不一致で、聞いている自分が“どう反応すればよいのか”戸惑った。彼女は28年前の体験をまるで昨日の出来事のように詳細に語り続けた。

「相談した友人や義理の家族などから、『あそこの病院がいいらしい』、『この先生は不妊が専門らしい』などと聞いては、次々に通院先を変えた。でも、結果は同じ。そんな時、ある不妊専門Yクリニックの院長が出版した本と出合ったの。その頃、『不妊』という言葉さえ知らなかった私は、衝撃を受けた。そうか、妊娠しないのは不妊症という病気なのか - そう思ったら、なんだか

心が軽くなった気がした。病気なら治さないと。子どもが欲しくて悩んでる女性は、私だけじゃないんだ、ってね。早速、その病院へ予約の電話を入れ、電話口で『一番早くて3カ月後の予約』をとってからは、その日が待ち遠しくてしょうがなかった。これで、やっと悩みから解放される、って本気で思った。専門の本まで出している有名なドクターに治療してもらえれば、きっと子供ができるに違いない、って、何の根拠もなく確信に近いものを感じていた。そうやって、不妊専門クリニックにたどり着くまでに、結婚から5年かかった。それまでも、できることは何でもやった。誰かが“こうしたら妊娠できるらしい”と教えてくれたら、全部言われたことを実行した。子授け寺のお守りや、お祓い、占いや食事や栄養食品など、なんでもね！勿論、自分たちでできる努力も全て！でも、私たち夫婦の願いはかなわなかったし、かなえてくれる人もいなかった。だから、Yクリニックは、私が初めて出会った、『子どもが欲しいという願いをかなえてくれる人たち』のいるところだったの」

驚いたことに、20年以上前の話に登場する子授け寺のお守りやお祓いなどはすべて、現在も不妊当事者たちが興味関心を示す対象と同じだった。それらは、不妊を治療する時代以前から、当事者たちがずがる思いで手繰り寄せた、知恵と経験の産物であつたに違いない。不妊問題の解決に向けてあらゆる努力をし尽くしたと、彼女はあつく熱弁をふるった。

「待ちに待った初診予約の日。住所を頼りにYクリニックへ1時間以上も前に到着。クリニックに入ると、まるで、エステサロンのように豪華絢爛な内装で、施設内には

ゆったりとした音楽が流れ、20~30人分の待合室に100人くらいの女性が待っていた。中に入れぬ者は、クリニックからエレベーターまで廊下に立って並ぶ - あの光景は衝撃的だった！しかも、診察を待つ誰もがひと言も話をしない。そういえば、その後も通院を繰り返したけれど、誰かがおしゃべりしている場面は見たことがなかった。・・確かに、あまり居心地良くはなかった。まあ、私は“自分が不妊なのかどうかを確かめる”ために受診したし、治療すれば即妊娠するって思っていたから、あまり気にもしなかったけど。予約時間を2時間以上過ぎて名前を呼ばれ、初めて診察室へ。本に載っていた先生が笑顔で出迎えてくれ、『大丈夫です。私にお任せください』って言うてくれたときはうれしくて涙が出たのを覚えている。どの病気でも同じだけど、はじめはいろんな検査が必要で、その説明の際に、『不妊の検査を(松・竹・梅の)どのコースでしますか?』って、いきなり聞かれた。ね、驚くでしょう?なんだかわけがわからないので説明を求めたら、『梅コースは医療保険の範囲内です検査。詳しい検査はできない』、『竹コースは保険と自費の両方をつかってする検査。梅コースより多少詳しい検査ができる』、そして最後に『松コースは、すべて自費です検査。お金はかかるけれど、最先端の技術で詳しい検査ができます』という説明があった。子どもがほしくて、悩んで、悩んで、意を決して不妊の検査を受けるつもりで病院に行った人が、『詳しい検査ができない梅コース』を選ぶはずないわよね?それでも、“病院は病気を治してくれるところ”だと信じているもんだから、『最高の検査と治療をすれば、きっと子どもが授かるんだ』

って確信に近い思いを抱いたの。だって、『ダイジョウブ。ワタシニオマカセクダサイ』ってことは、子どもが授かるってことだと、誰でも思うでしょう?」

その問いかけは、まるで“否定することを許さない”かのように聞こえた。それにしても、20年以上前に受けた診察や病院内の様子を、これほどまでに鮮明にかつ詳細に記憶している人を彼女以外に私は知らない。その後、B子さんはYクリニックで金額も内容も最先端の不妊検査を約半年かけて済ませ、その検査結果を知る日が来た。

「検査の結果は主治医から聞くことになっていて、その日は主人も一緒にクリニックへ行った。名前を呼ばれて診察室に入ると、先生が『ご主人も結果を聞いていいんですか?どうなっても知りませんよ!』って、強い口調で・・とっさに私は『ああ、きっと、私に不妊原因があるのだ』って感じた。その時はすでに泣いていて、診察室にいる間ずっと涙が止まらなかった。でも、結果をよく聞いてみると、『特に不妊の原因はどちらにもない。あえて言うならば、奥さんの卵管が普通の人より細くて、卵子が通りにくいかもしれない。排卵にも問題ないが、今後卵管を通りやすくする処置や、思い切って卵管を広げる手術をしたほうがいいかもしれない』これって、原因はないけど、さらに妊娠しやすくする方法はある・・みたいなあいまいな説明だった。その時、『手術をすれば妊娠しやすくなるんですか?』と尋ねると、『しないよりしたほうがいいでしょうね』という返事だったので、手術を即決したのよ、自分でね。その手術の後に、さらに不妊治療の長くつらい日々が続いていくとは、思いもよらなかったから・・」

確かに現在でも、卵管閉塞の不妊原因のある女性が多いといわれる。処置は個別であるが、時に簡単な腹腔鏡手術が用いられることがあり、その大半は日帰りで処置が終わるといふ。近年、医療技術は確実に進化し、20年以上前にB子さんが受けた全身麻酔による開腹手術を実施するケースは激減した。現在は、排卵障害などに対応する生殖医療技術として体外受精などが普及し、以前より女性のリスクは減少しつつある。

「不妊は治療できる」 - この吉報は、実子をのぞむ不妊カップルにとって、まるで神からの福音と同様の響きであったに違いない。これまで、時代を超え、長い沈黙の歴史を刻んできたカップルの不妊問題に、唯一、医療が解決手段を提供したのだ。治療すれば、あきらめるしかなかったわが子の誕生を期待しながら生活できる。「不妊を治療する」という“努力ができる”のだ。これからは、ひたすら妊娠を待ちのぞみながら、なすすべもなく再び沈黙の時間を繰り返す日々は来ない。少なくとも、今までの生活とは何かが変わるに違いない - そんな期待が生まれたはずだ。ひとは、時として、直面する問題に対する解決手段を持たないことを知った時、自らの無力さを実感し、生きる気力さえ失うことがある。過去に、不妊問題をかかえたカップルは、ふたりでいくら努力しても「自然には子どもが授からない」という不妊問題に直面し、結果、その現実を受け入れ「実子をあきらめた人生」を送る以外に選択肢はなかった。しかし、生殖医療から届いた福音は、実子をもつ可能性を示唆するものであり、同時に、実子をまだあきらめなくていい、というメッセージを当事者たちに送っていたのだ。

B子さんは「不妊治療は私たち夫婦にとって福音だった」と、はっきりとした口調で私に告げた。私は、「あなたにとっては、どうだったのですか？」と勇気を出して尋ねてみた。(次号につづく)

<付録：今日のトピックス>

2010年8月25日MSN産経ニュース内「政治」の最新ニュースにこんな記事があった。

「自民党の野田聖子元郵政相、体外受精で妊娠」 - 渡米し、第三者から提供された卵子を用いた体外受精で妊娠したという。日本国内では、まだ法整備されていない「提供卵子による体外受精」で妊娠したようだ。49歳という年齢を考えると、あとは妊娠の継続と元気な赤ちゃんの誕生を願わずにはいられない。彼女もやはり、産みたかったのだ。

対人援助学の里程標

2

サトウタツヤ

(立命館大学)



藤哉会(とうさいかい)の思い出 随伴性とは縁である

今回はモノローグ。

本稿を慶應義塾大学名誉教授・故佐藤方哉(さとうまさや)先生に捧げます。

多くの方がご存じの事故について改めて語ることはしませんが、方哉先生は2010年8月23日(月)帰宅途中、京王新宿駅での不慮の事故により急逝されました。星槎大学長を務めていらっしゃいました。所属大学も違うし直接の弟子でもないし行動分析系と認知されてない私が、どこかに追悼文を発表する機会はないと思われます。なので「対人援助学の里程標」の第二回を謹んで方哉先生の追悼にあてたいと思います。これもまた、一つの対人援助学の里程標になると信じて。

私は学部・修士課程と育児の悩み研究をして

いましたが、大学院博士課程に入ってから関連研究や心理学というシステムに疑問を抱き、アンチ本質主義の一つの可能性としての行動分析に興味をもちました。折から、春木豊先生が東京都立大学(現・首都大学東京)の学部の非常勤講師に来ていたので畏友・渡邊芳之と共に受講。博士課程1年の時(1987年)です。その後、春木先生に紹介されて行動分析学会などに参加。佐藤方哉、茨木俊夫先生その他のみなさんの知己を得ることができました。その下の世代として、小野浩一、藤健一、望月昭、長谷川芳典、坂上貴之、山本淳一、杉山尚子の諸先生、若いところでは、中島定彦、武藤崇ほかの諸先生。

佐藤方哉先生には、名前の漢字表記が似ていることを殊のほか喜んでいただき「藤哉会(とうさいかい)」を結成しました。「佐藤×哉」会です。渡邊芳之といっしょにご自宅に招かれるということもありました。ご自宅はピンクの洋館で書庫が立派だったことを覚えています。

渡邊芳之によれば、行動分析や動物実験について殆ど知らない私たちを方哉先生が慶應義塾大学の研究室見学に招いてくれたのがきっかけ。その後の酒席で若い私たちが「～はバカだ」「～の研究はひどい」という話をすると「え～バカなんだ!」「あの人もバカなの?」と大層喜んでくださり、君たち面白いので家で飲もうということになったのだ、ということらしいです(ちなみに、日本大学名誉教授・大村政男先生ともこんな感じで仲良くしてもらうようになりました)。この時いっしょにいたのが現在関西学院大学にいる中島定彦。

また、1992年、同志社大学で行われた日本心理学会の際に行われた「基礎心理学会 VS 動物心理学会のソフトボール対抗戦」に方哉先生の代わりに出場したということがあります(私は両学会の会員ではありませんが、名前の似ている私を代理に指定してくれたのです)。「名前が似てるから代わりに出てきて」みたいな感じでした。京都御所で行われたソフトボール大会に出場しました。ちなみに、この時、私は京都大学霊長類研究所の松沢哲郎さんを初めて間近で見たのです。レフティでフォームが実に決まっていました。このことは後にお会いした時に本人にも確認しましたが、確かに、このソフトボール対戦に松沢さんは出ていたとのこと。

さらに、行動科学会(だったか、その前身の異常行動研究会だったか)のウィンターカンファレンスの企画を一つ任されたときに、杉山尚子さんと共に(スキーもしないのに)参加してもらったのも良い思い出です。方哉先生は若手の勝手な企画に応えてくれたわけです。

その当時、行動分析学会や関連する学会において、動物実験をやらない理論系の人間は珍しかったということもあってか、多くの人に好意的に迎えてもらったと思っています。行動分析

学会で出会った藤健一、望月昭、武藤崇、のみなさんとは、何と後に同僚になりました。望月さんは当時、愛知県心身障害者コロニーにお勤めで、「マルモネット」なんてのをやっていました。当時も今も変わらないといえば変わらない。今、対人援助学会にいるのも、このエッセイを書いているのも、元をただせばこうした随伴性のなせる業なのかもしれません。随伴性?なんのこっちゃ?という人はいないと思いますが、方哉先生はスキナーを追悼して、「自覚せざる仏教徒としてのスキナー - 随伴性とは縁である」という小文を『行動分析学研究』に寄稿しています。この小文の英語タイトルは「Contingency as "en": Skinner is an unaware Buddhist」です。Contingencyの訳が随伴性というのはおかしいではないか、ということ、方哉先生と話したことがあります。その時、丁寧に色々とおっしゃっていて、詳しくは覚えていませんが、訳すときに偶という文字を入れるべきだという人も(方哉先生も含めて)多かったのだけれども、結果的に随伴性という訳語が定着した、ということでした。今、Contingencyは偶有性と訳されている分野もあります。行動分析でもこの機会に、偶有性は無理でも、偶を入れた訳語を考えてもいいのかもしれませんが。

個人的にはあと一つ、ウソについて考察した論文(人は何をウソと考えるか)が好きですね。今、雨が降っているとして、それを知らずに、雨は降っていない、と言ったらウソになるか。今、雨が降っていないとして、それを知らずに、雨は降っていない、と言ったらウソになるか。ウソについて多角的に、言語行動分析的に考察した論文で、今でも時々学生に紹介したりしています。

学恩を受けた慶應義塾大学や帝京大学の学生や院生の皆さんから見れば「ふざけんなー!」という話かもしれません。ちょっとだけ名前が

似ているからって良い気になるな！みたいな。しかし、方哉先生を始めとする多くの方々が、見ず知らずの若かった私（と渡邊芳之）に対して与えてくれたご厚情というのは決して忘れることはできないし、方哉先生を含む多くの方が、出身大学などという小さなことは無視して、色々教えてくれたことには感謝の言葉しかありません。現在の私のもとにも、突然見ず知らずの人から「複線径路・等至性モデル（TEM）について教えてください」みたいなメールが来たりしますが、決して無視する気にはなれないのは、かつて私が院生だった頃に接してくれた多くの人々のことが私を作ってくれたと思っているからです。もちろん、私の恩師・詫摩武俊先生を中心とする東京都立大学心理学研究室のおおらかな雰囲気があったのことで、このことについて語ればまた長くなりますが、いずれにせよ、所属する大学の人からしか教えを受けてはいけない、というのでは「随伴性は縁である」の精神に反します。科学社会学という学問の中では、所属する大学以外のネットワークのことを「Invisible College（見えない大学）」という概念で表します。まさにそうした環境で自分の知りたいことを次々と最良の環境で学べたことを嬉しく懐かしく思います。立命館大学の学部ゼミ（サトゼミ）のモットーである「緩やかなネットワーク、軽やかなフットワーク」というのも、方哉先生ほかのエスプリを受けているのだと思います。

私個人のことについて言えば、心理学史や質的心理学を推進することにも同じような「Invisible College（見えない大学）」があったわけですが、本稿でそれを語ると二倍三倍になりますので、いつか機会があれば、と思います。この文章を読むみなさんが、所属機関、という狭い枠に囚われずに、様々な活動ができる環境に恵まれているならば、望外の幸せです。

次回を予告しておきます。次回はメアリー・カバール・ジョーンズ。メアリー・ポピンズみたいでリズムの良い名前です。行動療法の母、と呼ばれている人です。対人援助学の里程標の第二回で扱おうと思っていたのですが、あまりに衝撃的なニュースが飛び込んできたので、追悼文とさせていただき、メアリー・カバール・ジョーンズについては次回ということにさせていただきます。

改めて佐藤方哉先生のご冥福をお祈りいたします。

はるか西方の極楽浄土でゆっくりお休みください。時に、ナーガールジュナやヴィトゲンシュタイン、そしてもちろんスキナーと、沈黙の言葉を交わして。

関連文献

佐藤方哉 1991 自覚せざる仏教徒としてのスキナー：随伴性とは縁である 行動分析学研究 5(2), 107

佐藤方哉 1996 人は何をウソと考えるか 言語, 25, 28-33.

サトウタツヤ・松原洋子・望月昭 2010 草の根『対人援助学』 パソコン通信時代の研究者と当事者の連携を振り返る 望月 昭・サトウ タツヤ・中村 正・武藤 崇 編『対人援助学の可能性 「助ける科学」の創造と展開』, 福村出版

小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

尾上 明代

2 . 船出

このマガジンの連載では、被虐待児たちへのドラマセラピー治療について、読者の皆さんに伝わるのが少しでもあればと希望しつつ、ある児童養護施設で継続的に行ったセッションのプロセスを記述している。本稿では、理論的な説明等よりも、一つのグループの具体的な事例ストーリーを読むことを通して、ドラマセラピーという「対人援助」法について知っていただければと思う。

(事例に出てくる登場人物は、すべて仮名であり、プライバシーを守るために状況などは一部変えてあるが、本質的には実際におきたことが正確に伝わるように描写する。また各子どもの家庭状況と合わせて、その子どもの即興ドラマを考察すると、その意味がより良く理解できるのだが、それらの記述も割愛する。)

ある年の晩秋、A 児童養護施設で10人の子どもたちに3回の「お試し」セッションを行った。虐待その他、さまざまな「育児困難」という理由で施設での共同生活を

強いられている、傷ついた小さな「怪獣」たちが、個性豊かなドラマの中で、多くの強い感情を表現してくれたことは、前回の創刊号で書かせて頂いた。

その後、施設側が、より必要性の高いクライアント・5人を選び、正式に連続セッションが開始されたのは、翌年の春。二週間に一度、夕食後の19時から21時、施設敷地内の別棟にあるホールで行うことになった。

主に、私が開発した「受容とミラーイングの即興ドラマ」という手法を用いてワークを行う。セッション後は、子どもが興奮して眠れない、などということが起きないように、収束プロセスを通常以上に念入りとする目的として、毎回お菓子を食べながら、紙芝居を見せてあげることに決める。全員の気持ちが落ち着いたことを確認してから、それぞれの部屋に帰すことにした。

選ばれたメンバーは、小学校中学年の5人である。

マツオ君

お試しセッションでは、他人に受け入れられることを自分に許せないようで、私と向き合ってドラマを演じることができなかつた。でも、ほんの少しずつ自分を表現できるようになって、職員にも甘えられるようになった。前回くれた手紙に、私への思いやりが感じられた。

スギオ君

お試しセッションには参加していない。マツオ君と行動パターンが似ている。二人は喧嘩もするが、基本的にはとても仲が良い。言語表現が苦手であることも手伝って、私には照れてほとんど直接話しかけてこない。が、私の持ち物を隠したりする方法で、多めにアプローチしてくる。つらい家庭生活を経ていることを、あまり感じさせない。素直で穏やかな雰囲気表れている瞳を持っていて、彼の生まれ持った幸運の一つだと思った。

イチゴちゃん

お試しセッションで、地球一怖いお父さんとのドラマを行ったが、最後は家族と一緒に眠るハッピーエンドを作ることができた。その反面、怒りや悲しい気持ちも素直に表現できる。5人の中でドラマを演じることに一番向いていると感じた。日焼けした肌、スリムで軽く活発な動きが印象的。

リンゴちゃん

お試しセッションでは、「普通のお母さんとのドラマ」や「世界一・爆発するほど怖い施設の先生とのドラマ」を行った。3回のセッションで少しずつドラマに、そして私に慣れて、気分も落ち着いてきている。イチゴちゃんと対照的に色白で丸顔。おっとりタイプ。言語表現は苦手だが、職員や私に甘えることはできる。

アンズちゃん

お試しセッションには不参加。少なくとも表面的には、はっきりものを言うし、友だちとの喧嘩にも負けない強さがあるように見える。しかし私に対して、またドラマセラピーに対しても一番警戒していて、心をひらいてくれそうもない様子である。ほとんど口をきいてくれない。大人を冷静に観察している。いたづらっぽくて、少女マンガのようにキラキラしている瞳が印象的。

* * *
* * *

演劇青年で施設の職員でもある浩二さんを助手にして、船頭である私は、5人の「怪獣」を7人乗りの小さな船に乗せた。どのようなルートでどこに行き着くのだろうか・・・という以前に、そもそも沖に出られるのだろうか。海岸付近ですでに大波がうねっていたことが、お試しセッションで「観測」されている。しかし、とにかく出帆しなければ、どこにも行けない。

この5人の子どもたちとの出会い・交流は、私のドラマセラピスト人生史上、かなり大きな意味をもつことになるという予感がする。一人一人、心底かけがえのない、大切な子どもたちだと感じた。おそらくこれから私は、彼らの中にいる「怪獣たち」とドラマを通して格闘しながら、彼らの「すべて」と全身全霊で関わっていくことになるだろう。

セッション一回目、開始！

お試しセッションでドラマセラピーの楽しさを知っているマツオ、イチゴ、リンゴは、本セッションを受けるメンバーとして

選ばれたことが、とても嬉しい様子だった。スギオは、マツオから聞いていたようで、どちらかと言えば楽しみにしている様子だが、アンズは、迷惑がっているのがわかる。もちろん、二週間に一回、夕飯後に5人だけ「特別な活動」に行くことを許され、終わってから何とお菓子を食べ、紙芝居を読んでもらえるというのは、他の多くの子どもたちに羨ましがられることではあるので、この「特権」については、悪い気はしていないようだ。しかし自分を表現する(しかもドラマで演じる)ことを要求されるのはごめんだ！と感じているようだった。

まずセッションを受ける際、守ってほしい「お約束」を、とにかく徹底して伝えた。特に始めの二つは彼らには難しいルールだろうが、これは、今後ずっと毎回セッションが始まる前に復唱して確認させ続けることで、より効果的なものにする助けとしたい。

お約束

- 1, 他の人が演じているときは静かにし、みんなで一緒にやるときは、協力し合う。
- 2, 身体で実際にアタックしない。(やるときは、「ふり」だけ)
- 3, 楽しもう！ スッキリ良い気分になろう！

私たち7人のグループを見守ってくれるマスコットとして、なぜか気に入ってシンガポールの動物園で手に入れたオウムのパペットを持って行った。真っ赤な身体に大きな黄色のくちばし。カラフルな羽。目はキョロキョロしていて、チョコボールの宣

伝に出てくる鳥に似ている。ドラマに使うこともあるだろうし、たとえ使わなくても、毎回この鳥を見ると「ドラマセラピーが始まるんだ！」と、子どもたちの心のモードが非日常の世界へ変われるように、セッションの象徴としての役を果たしてもらおうと、グランドピアノの上に座らせた。「名前を決めよう」と提案したが、みんなが、てんでばらばらの自分の言いたいことを言っているだけでなかなか決まらない。結局、マツオの提案した「チュッチュ」にする。全員のコンセンサスはとれていない。この時点では、私が何を言っても、何をやるうとしても、ただみんな勝手に騒いだりふざけたりしているのみ…。

子どもと子犬のドラマ

いよいよドラマの設定をし始める。まず子どもと犬の絵を見せた。子どもは部屋の隅で壁に顔をつけているので、後ろ向きになっていて、顔は見えない。その後ろに、子どもを心配しているような顔をした子犬がちょこんと座っている。この絵を見て、どんな状況か自由に想像し、ドラマをするのだ。一人ずつ、相手役は必ず私が演じる。どちらが子ども役か犬役かは、演じる子どもに決めさせる。

小学校などで行うと、「お母さんに叱られた子どもを犬が慰めている」というような、いわゆる子どもらしいストーリーが出てくるのが一般的だが、今回はそのようなアイデアは出ず、しょっぱなから「個性的な」ドラマが続いた。

リンゴ(犬)と私(男の子)

「家を壊して遠くのマンションに引っ越す！」と犬が主張するので、男の子は、今

住んでいる家を壊した。犬も、見ている観客（他の子どもたち）も喜ぶ。私がいうことを聞いてくれるのが嬉しいのだろうが、それ以上に壊すという行為が気持ち良いのだ。現実生活で子どもが何かを「壊す」行為は基本的に認めてもらえないし、当然怒られるので、このように受容されること自体が、非常に嬉しいようだ。もちろん、架空の設定だからこそドラマセラピストは受け入れて、やってあげることができるのだが、これはドラマの大きなメリットの一つである。

家の破壊のあと、さあ、引っ越そうと男の子が言っても、犬は、ずっと床にぐずぐずして立とうとしない。犬は「おちんちんと言わなきゃダメ」としつつ私にいう。私はすぐに言う。それでも立とうとしないので、また言う。「二回も言わなくていいよ」と楽しそうに笑った。（当然、観客にもウケた。）要するに、どのくらい受け入れて、自分の望みを叶えてくれるか「お試し」をしているのだ。

このようなことばは、普段、子どもは遊びの中でふざけて言うことはよくあると思うが、大人が（特に「先生」のような立場の人が）何のわだかまりもなく、一緒になって言うのは、意外で面白いらしい。私は、何でも受け入れるよ、という顔を彼らに見せる。またドラマの中では実際にぶつたりしなければ、何をしても言っても基本的には自由と伝えてあるので、そのこととの矛盾を子どもが感じないように、当然、どのようなことばやアクションも「基本的には」平等に扱うようにしている。

さてやっと荷物をまとめて二人で引っ越しの作業になるが、一緒にドラマをしているというより、リンゴが私に「ああしろ、

こうしろ」と命令し、それに従って私が一人で動いている感じになった。引っ越しが完了し、私（男の子）は疲れたので、犬に向かって「疲れたからもう寝よう。そうだ、お母さんも一緒に。」と言ったらニコニコしていたリンゴが豹変し、とても不機嫌になった。金切り声でヒステリックに「お母さんは、い・な・い・の・お～っ！！」と怒鳴った。

私は、「あ、そうか。お母さんいないのか。犬と二人で住んでいたのね。」と合わせた。次におなかすいた、と男の子が言い、結局牛乳を買って来て飲む。犬は、床に寝たまま動かない。足の裏を男の子に向けて、そこから飲むというので、男の子は「足の裏、ちょっと臭いけど、ここから栄養補給ね」と言って足から飲ませる場面で終了した。

ドラマの枠組み(設定)を提供した上で、自由に即興をしてもらおうと、子どもたちは、まさにそのときの状態を反映させたり、自分の気持ちを投影させて表現する。それゆえに、普通の「お話しモード」でコミュニケーションをしてもわからない（わかりづらい）ことが、瞬時に手にとるようにわかる。私自身が相手役をしているので、相手の生（ナマ）の感情をストレートに受けとり、それを全身で感じる。ドラマを子どもたち同士でさせて客観的に見ても到底わからないことも、理解できることが多い。

リンゴは、お試しセッションのときは、もっと素直で子どもらしい部分が多かったが、今回は、イライラ気分や相手を支配したい・いじめたい感情が強くなっていて、随分ドラマの質が変わった。「何があったの?」と浩二さんに聞くと、（それまでは定期的に実家に帰る機会があったのだが）最近の家の状況で、母親と会えない状態だと

ということと、施設で一緒に暮らすグループの中に、リンゴより年下の子どもが入所してきて、職員たちの注目がその子どもに行っているということだった。

いづれにしても、「明代さん(私をそう呼ぶようにと子どもたちに言っている)とリンゴ」という現実人生の関係ではなく、ドラマの「男の子と犬」として、感情をぶつけたり受け入れたりという相互交流の中で、子どもが言語化、意識化できない葛藤なども、瞬時に浮上してくるので、それらを扱うことが可能になる、というところがポイントである。

イチゴ(犬)と私(女の子)

お母さんに怒られて泣いている、という設定になった。そこで私は慰めてくれるかなと、少し期待したが、甘かった・・・。

犬は、いきなり「ボケ!!泣くんじゃねー!」と怒鳴ったのだ。それで女の子が、もっと泣くと、犬はケタケタ笑った。ちょっとヒステリックで、ざまあ見る、いい気味、という雰囲気である。その後、なぜか女の子は死んだことになって、その肉をはぎ取られ、食べられた。

マツオ(犬)と私(女の子)

初めに、犬は、おら～～!!と大声でどなり、すごく激しい不良少年のようなことばを吐いた。女の子が、ご飯食べる?一緒に寝る?といろいろ聞いても全てにイヤだ!と反抗する。前のセッションで、ドラマが少しも続かず、私とも対峙できずに逃げ回っていた彼を思うと、このように、正面切って反抗するドラマを一定時間続けられるということ自体、大きな進歩だった。女の子に「家を壊して死ね!」と言うので

(このあたりは、前の子どもたちのパターンを真似ているのだろうが、それにしても、そこにハマるといことは、みんながそのような感情を持っていて、それをドラマの中で受け入れてくれる人に吐きだしているのだろう。)一緒に家を壊そうと誘ったが、イヤだと断られた。そこで私が一人で言われた通りに壊すのを喜んで見ていたが、「一人でやって嬉しい?」などと言う。何とも複雑な犬の心情が窺える。その後「死ね!」と言ったが、リンゴやイチゴと違って気弱な響きだった。本当は、あまり言いたくないことばなのだろう。一応は受け入れて、ドラマを終わらせようと思い、「はい、死んだ」と応えた。マツオのエネルギーが、だんだんしぼんできた様子と、つまらない雰囲気がよく伝わってきた。

アメリカのドラマセラピスト、アリス・フォレスターらの報告によると、被虐待児に行った初期セッションのロールプレイで、子どもはドラマセラピストに、弱くて侮辱されたり、人格を傷つけられる、無力な役をさせると述べている。ある事例で、子どもはドラマの中でセラピストを撃ち殺したり、細かく切り刻んで食べたりしたという。私もまったく同様の体験をしてきている。

このような行為の意味を、フォレスターらは、「子どもは、虐待され、屈辱を受けたときどう感じたかを、また制御不能な感覚や恐れなどの感情をセラピストに教えていたのだ」と気づいたそう。この気づきは、ドラマで「攻撃」され続ける私を多いに助けてくれた。

浩二さん(女の子)と私(犬)

3人が、ネガティブな感情を、犬や子ど

もの役に乘せて表現したことは、非常に良かったと思う。しかしマツオのような場合、本当はもっと違った表現をさせたいと感じる。すっきりできずにいるのがよくわかるからだ。そこで、少し方向が変わるかもしれないと期待して、今度は「まともな」ドラマをこちらから投げかけてみよう、と、浩二さんと演じて見せた。探している人形(オウムのチュッチュを使った)を犬がつけてハッピーエンド、というストーリーにした。でも子どもたちはまったく興味を示さなかった。

スギオ

スギオは今回初めてで、私との即興ドラマはあまりうまく行かなかった。ドラマを展開できずに短時間で逃げてしまう。逃げ方が前のマツオのときと似ていた。

世界一怖いお母さん

ここでリンゴからのリクエストがくる。子どもが自発的に演じたいと、設定や役をリクエストしてくるのは、大きな意味を持つ。前回の「世界一怖いお母さん」とのドラマが面白かったと見え、私にやってほしいと言う。

母(私) 勉強しなさい!

リンゴ 泥棒になるからいいよ。

母 泥棒だって勉強しないと成れないよ。

リンゴ (部屋のどこかから、ノートを見つけて持ってきて)お前のノートを見てみるよ。

母 あら、これ私の昔のノートじゃない!お母さん0点なのばれちゃったわ。

(これは、リンゴが筋書きを作って、私に言わせたセリフである)

リンゴ 「私は世界一貧乏で算数が0点のババアです」って、書け! そう言え!

母 (その通りに言う)

超怖いお父さん

イチゴもリクエストを出してきた。後半で、父(私)が怖いままでドラマを終わらせたくないと思い、そっと肩に手をかけて、「お父さんがこんなに怖いのは、本当はイチゴへの愛情の裏返しなんだよ。お前を思っているんだよ。」と試みてみた。が、時期尚早だったようだ。こわーい、憎たらしい感じでピシャッと怒鳴られてしまった。

「なれなれしく触ってんじゃねーよ!ブタッ!!」

アンズ

アンズは、他の子どものドラマを見るのはOKでも、自分がやるのはイヤだ、一人でドラマに出るのはイヤだと言って拒否した。もちろん、無理強いはいらない。この場にいることはイヤではないようなので、良かった。

五つ子と超怖いお母さん

その後、みんな一緒にドラマをやろうということになった。5人の子どもたちは五つ子で、明代さんが超怖いお母さんね、とみんなが設定した。一人ずつだとうまく行かないスギオもアンズも、何と参加して、私に口答えのせりふ言っているではないか!

「宿題やったの? やりなさい!」と怒る母に「お金くれたら勉強してやってもいいんだ」などと誰かが言っていたが、そのうち、みんな競って私に「宿題」を見せるようになった。

そこで私は、「一人ずつ何がほしい?」とリクエストを聞いて、宿題したご褒美にプレゼントをすることにした。たとえば、イチゴがほしいのは猿、マツオは鳥、スギオはドラえもん、とのことで買ってあげた。今まで私にもドラマにも心をひらかない様子だったアンズが、「全部ほしい」と言う。

「みんな公平にしないといけないからね、一個だけ買ってあげる、一個言いなさい。」と伝えても、アンズはもう一度「全部」と言う。とても大事な表現をしてくれたので、全部あげたいところだった。しかし、個人セッションではなく、みんなを平等に扱うことが、特に初回では大事なので、公平を保つことにする。「一個だけ。」

するとアンズは、「浩二」と答えた。私の意図や立場をよく理解し、さらに他の子どもとは少し違う「贅沢な」プレゼントを要求したのだ。浩二さんは、子どもたちに人気の職員で、その人をもらうことができれば一個でも「全部」くらいの値打ちがあると考えたのだろう。もちろん、プレゼントした。

* * *
* * *

最後に全体の感想を聞くと、みんな「楽しかったです」と答えた。(子どもたちが帰ったあとで、浩二さんに「あれ、お世辞じゃないわよね」と聞いてみると、「そういうお世辞は、一番言わない子どもたちです。」と、笑っていた。)確かに本当に楽しかった、という感じが伝わってきていた。特に最後の五つ子のドラマが楽しかったようだ。

ドラマ後、気持ちをクールダウンさせるために、部屋を暗くして、想像で自分の好

きな世界にいくワークを行った。なかなか「想像する」ことができない彼ら。私がどんな世界に行ったか聞いてみると、本当にイメージしたことでなく、ふざけて答えを言っている。うんこの世界、おちんちんの世界など…。

前半、一人ずつのドラマでは、暴力的・攻撃的なストーリーが多かった。しかし、これはみんなが私を信頼し、その場が安全だと感じてくれた証拠でもある。内容的には、相手役として気分が良いものばかりではないが、彼らにとっては非常に良いドラマになったと評価できる。

さらに、その後みんなで一緒のドラマになったときは、「超怖いお母さん」に甘えることができ、プレゼントまでもらうというハッピーエンドができた。

かなり良い「船出」だった。

次号に続く)

家族造形法の深度

(2)

早樫 一男

はじめに...

家族造形法は家族との面接場面で生まれ、利用されている技法です。

そこで、今回は実際の家族との面接場面における具体的な進め方について紹介します。

なお、以下については、あくまでも一般的(基本的)な進め方です。

実施の要領

彫刻家を選びます。

家族の中の誰か一人に彫刻家としての役割を担ってもらいます。

セラピスト(例)

『今日は新しいことをやってみたいと思います。みなさん、立って下さい(この時、セラピストも立つように)。* *さんは彫刻家の役割をお願いします』

誰を彫刻家を選ぶかは、事前に検討しておくことが大切です(まずは、家族の葛藤の外側にいると思われるメンバーが無難かもしれません)。

彫刻家がメンバー全員を粘土の塊に見立てて、自分のイメージする家族(日頃の様子や風景等)を作ります。

セラピスト(例)

『あなたがイメージしているような家族を作ってみてください』

『家族の印象的な場面(シーン)や風景を作ってみて下さい』

『いつもの家族の状況が分かるよう、普段の生活場面を再現してください』 等

家族メンバーは“粘土の塊”ですので、「勝手に動かない、彫刻家役から指示された通りに動く、しゃべったり笑ったりしない」といったルールを伝えます。

また、彫刻家役もできるだけ言葉を使わないようにして作っていくように伝えます。

彫刻家役は家族を一人ずつ選び、位置・姿勢・表情など、あわてずに、ゆっくり、丁寧に作っていきます(セラピストは彫刻家役をサポートします)。

セラピスト(例)

『視線はどの方向ですか?』

『手はどうですか?』

『この人はどのような表情ですか?』

『あなたが思っているイメージのようになりましたか?』

『これでいいですか?』

『どこか修正するところはありませんか?』

彫刻家自身も家族(彫刻)の中に参加します。

セラピスト(例)

『あなた(彫刻家)自身も、彫刻の中に入ってポーズを作ってください』

改めて、全員が静止します(一分間)。
この間、からだや気持ちに集中します。

セラピスト(例)

『今から一分の間、みなさんは自分の体や心の動きに関心を向けてください。集中してください』
『それでは、スタートします』

静止の時間は一分よりも長めでもよい。
静止している間、セラピストはさまざまな角度から「家族造形」として、作品を鑑賞します。

家族造形を作成するここまでのプロセスは、家族の理解やアセスメント(診断的側面)につながるものとなります。

家族それぞれの気持ちや感じたことを言葉にします(セラピストが質問していきます)。

セラピスト(例)

『**さん、からだの感じはどうですか？』
『どのような気持ちですか？』
『どのような感じが湧いてきますか？』
『どのようにしたいですか？』
『気になる存在はどうですか？』
『どのようなことが気になりますか？』
『どのような位置だったらいいですか？(ありたいですか？)』
『どのような姿勢だったらいいですか？(ありたいですか？)』
『どのような表情だったらいいですか？(ありたいですか？)』
『居心地はどうですか？』
『彫刻家があなた(家族)をこのようにイメージしていたというのは知っていましたか？』

セラピストは、気持ちや感情に関連する言葉や思いを引き出すように心掛けます。

セラピスト(例)

『**さんの感想を聞いて、どのように感じましたか？』

家族メンバーの交流や理解が深まるような質問も工夫します。

セラピストとしては、メンバーが自分の思いを率直にフィードバックするとともに、それぞれの発言やコメントを家族がお互いに確かめ合ったり、理解し合えるように進めていくことを大切にします。

セラピストの感想を伝えることもできます。また、メンバーへの質問といった形で、介入的アプローチができる場合もあります。

フィードバックと交流のプロセスは家族に新たな変化をもたらすといった意味で、家族へのアプローチ(援助・介入的側面)につながっているので、大変重要です。

ここまでのプロセスが一つのセッションです。

バリエーションの紹介

続いて行う場合、次回の面接で行う場合など、臨機応変、工夫次第でいろいろなバリエーションがあります。

彫刻家を代えてみる。

家族お互いのイメージや違いが明らかになったり、違いを話題にして家族内のコミュニケーションが促進できます。

動きをつける。

動きが加わることによって、感じ方が変わる場合や動きのきっかけが明らかになる場合など、家族のパターンがより鮮明になることがあります。

理想的な関係を作る。

「このような家族であつたら…」という造形を作ることによって、家族の目標を共有することができます。

また、目標に向かって、家族それぞれがどのように協力するかといった点について、意見交換、相互交流を深めていくことも可能となります。

誰かのポジションに代わってみる。

役割交代によって、新たな気づきが生まれる機会をつくります。

家族史を順に作っていく。

家族の歴史を家族とともに振り返ることによって、その時々のお気持ちや感情に触れる(思い起こす)機会となります。

その他

・メンバーが足りなければ、セラピストや協力スタッフを加えても構いません。

・椅子や座布団などの小道具の利用もOKです。

おわりに

家族相談場面における家族造形法の具体的な一般的な進め方を紹介しました。

アセスメント・理解(診断的側面)とアプローチ(援助・介入的側面)の実際の紹介にもなったことと思います。

現在は相談の第一線からは離れていますので、事例検討の場で家族造形法を使っています。

事例検討での進め方や展開の仕方など、次回から紹介していきます。

【家族援助を目指す人のための研修会 2010】
での一コマ

『三世代家族の食卓風景』

一分間の静止

それぞれの気持ちや思いを確かめているところ



(中央奥に向き合って座っている二人)

祖父役(左)

祖母役(右)

(中央奥の右 立っているのは...)

事例提出者(彫刻家役)

(真ん中の向き合って座っている三人)

(左を向いている)のは

娘役

横に並んでいる(背中が見える)のは...

息子役(左)

母親役(右)

(手前の男性)

父親役

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

前夜 ～女であること

村本 邦子

前回、女であることにあまりに満足していたため、女性問題に関心を持ったことがなかったと書いた。それが、「女性の視点で女性のサポートを！」と、女性ライフサイクル研究所を立ち上げることになるのだから、やはり、スタートラインは、女であることへの気づきであったと思う。今回は、女であることについて書いてみよう。

個人的に私を知っている人は笑うだろうが、私はそれまで、自分を女らしいと信じていた。女の子らしいピンクのリボンやヒラヒラしたワンピースが大好きだったし、女の子がやりそうな手作りも好きだった。ひと冬で十枚もセーターを編んだり、自分でデザインしたセーターの写真を撮りためて、出版社に送ろうと目論んだりもした。私にとって、「女らしさ」とは完全なもの

であり、そこから一般に言われる女の子の属性を差し引いたものが「男らしさ」だと考えていたような気がする。だから、女が弱く馬鹿なものだとは知らなかった。研究所を始めて以後の話だが、女であることが自己否定と結びついて苦しんできたというフェミニストから、「この社会で自己肯定している女と、自己否定している女とでは、どちらが病的と言えるのか？」という問いを突き付けられて唖ってしまったことがある。たしかに、ある意味で、私はこの社会から遊離していたし、ある側面を否認して見ないようにしてきたのだろう。

そんな私が女であることの意味を理解するようになったきっかけは、アドリエンヌ・リッチの『女から生まれる』（晶文社）との出会いである。男性中心の父権社会のなかで、どんなふうに

お産が医療に組み込まれ、女たちの力が奪われていったのか、制度化された母性によって、いかに女たちの自由が奪われ、母性が理想化されると同時に闇を抱えることになったのか、緻密に歴史をたどりながらも、さすがに詩人らしく、実に生き生きとリアルに描かれていた。眼からウロコが落ちるとはまさにこのことだろう。一挙に視野がクリアになって、それまで断片的に不思議に思っていた謎が解けたように感じたものだ。

ちょうど、私は、息子を自宅で産んだところだった。もともと、お産の仕方について、強い主張があったわけではない。たまたま、母と妹が自宅出産し、「楽でいいよ」と勧めてくれたので、「それなら」ということになっただけである。私は4人きょうだいの長女だが、母は、私を含む3人の娘を病院で産んだ後、「もう4回目慣れてるし、どうせ医者は何もしてくれないから」と、末の弟を自宅で産んだ。当時、僅かではあったが、まだ自宅出産を選ぶ人もあって、お産婆さんなる人がいた。「家で産む方がずっと楽だわ」というのが母の感想だった。そして、6つ年下の妹が一足早く子どもを産んだ時、たまたま弟を取り上げてくれたお産婆さんが現役でいたものだから、妹も自宅で子どもを産んだ。さすがにその頃には、「自宅で取り上げるのは実に十年ぶり」ということだったが。

そんなわけで、自宅出産を経験し、その後、子育て仲間とお産の体験を語り合ううちに、いかに自分が恵まれたお産をしたかが、ひしひしと感じられるようになった。陣痛促進剤が盛んに使われていた時代である。「お産のことは2度と思い出したくないし、2度と産みたくな

い」という声もあった。自宅出産では、日常的なかにお産があり、お産婆さんや母や妹などお産を体験している身近な先輩女性たちの経験と知恵、まだ体験していない妹や姪など後輩女性たちの応援など、女たちの暖かいつながりのなかで、しかし、産まされるのではなく、産むのは自分で、最終的には、男も女も心を合わせ生まれてくる命の力を信じ、あとは天命を待つしかないということを受け入れ、腹を括るプロセスが必要とされた。これは、母となるためのイニシエーション(通過儀礼)であり、女としてのエンパワメントであり、それを経たからこそ子どもとの幸福な出会いがあった。

当時、私は、精神科外来での非常勤カウンセラーをやっていた。すっかり仕事をやめてしまおうかという思いもあったのだけど、夫が「家の中で家事や子育てをする大変さと、外で働く大変さはきっと種類の違うものだから、完全に役割分担するよりも、少しずつでも分かち合う方が、互いの大変さを理解できて良いのではないか」と言うので、なるほどと感心して、細々ながら仕事を続けることにした。もともと、私は、経済的自立や社会的地位のようなものにこだわりがなかった。大学生の頃から自活していたので、必要があれば食べていける程度に稼げるだろうこと、収入に合わせた生活をする自信もあった。とは言え、今はなかなか厳しい時代になったと思うし、お金についての考え方は事業を始めて変わっていくので、これについてはまたいずれ改めて取り上げるつもりである。

私はもともと子どもに興味があって、おもに子どもの臨床をやっており、勤めていたクリニックは思春期外来が中心だった。やるからに

は全力投球するタイプである。心理テストでは相当数のケースに当たり、ロールシャッハだけでも3年で数百例はやった。当時は、「登校拒否」と呼ばれていた思春期ケースのうち、あまりしゃべらないタイプの子どもたちが私のところに回ってきたので、とにかくたくさんケースをこなすなかで、時代精神と臨床という視点を持つようになった。この時期に考えていたこと、つまり、「何不自由なく育てたのになぜ？」と親たちが嘆く子どもの問題の背後にある与えられすぎた子ども時代の弊害、そこには、戦後のまだ貧しかった時代には、白ご飯とか新しい文房具とかが幸せの象徴であり、子どもの幸せを願う親心が子どもの欲求とずれてしまっているという世代間のギャップが見え隠れしていた。

あまり大きな声では言えないが、(子ども時代をのぞけば、)私の人生の中で一番暇だったのが、子育て中心のこの時期だった。プライベートで子育て仲間が増えていったので、毎週、自宅に仲間を招いて、一緒に子どもを遊ばせながら、ワイワイガヤガヤやるような会を始めた。一緒に編み物をする会とか、子どもの発達を学ぶ会など、思いつきで設定して、今の生活からはもはや想像しにくいけど、お客さんがいつでも来れるほどに家が片づいていて、お昼、大きなお鍋でカレーやシチューを作ってふるまうなどしていた(本来、私はそういうことが好きなのだ)。

また、もともと勉強好きなので、公民館の託児付き講座に足を運んだり、たまたま引越して駐車場が当たったからと教習所に通って免許を取ったり、赤ちゃん連れでも受け入れてくれる英会話レッスンを受けに行ったりと、

暇にまかせ(じっとしていれない性格だからとも言えるかもしれない)、この時とばかり、やり損ねていたことをあれこれやった。何しろ学生時代は勉強とアルバイトばかりやっていたので(いや、考えてみると、お茶やお花や和裁などお稽古ごとくもやってたな...)、ふつうの人たちが学生時代にやることを子育て中にしていたのかもしれない。いずれにしても、大きな副産物があった。あちこち子連れで出回っていたので、英会話の先生たちが、まだ1歳にもならない息子を、「かわいい、かわいい」と引っ張りだこでかわいがってくれたり、子育て仲間とわいわいがやがや集まって話し込んでいたのは、振り返って意味づければ、間違いなく、自分自身の子育て支援になっていたはずだ。

百貨店で開かれる子育てサロンにも出入りしたりするようになった。このあたりの子育て仲間の拡がり方については、メセナなど当時の時代の動きを反映しているのだから、次回、取り上げてみたいと思っている。いずれにしても、こうしてごくふつうの女たちとつながるなかで、現代の子育て事情がよく見えるようになった。当時の日本社会は、まだ認識していなかったけれど、核家族での子育て、母性神話、子育て体験のなさや不安、個が確立してしまった女性にとって、母役割、妻役割だけでは生きていけるはずがないのに、それをしようとするものだから、ストレスがたまって、子どもの操作や支配になりかねないことなど、いろんなことが見えるようになった。そんな状況のなかで、リッチと出会ったのである。個人的なことは政治的なこと。

それから2人目を妊娠し、出産の3カ月前にクリニックのクビを言い渡された。考えてみ

れば、ひどい話である。同僚たちもとても気の毒がってくれて、「もう一度話をしてみても、自分からも頼んでみる」などと言ってくれたり、「訴えたらいいのに」と怒ってくれたりする人もいた。ただ、自分にも非があると思ったし、そこまでして是非ともそこで働きたいというほどのコミットメントが欠けていたのだと思う。本当のところ、そのクリニックで働くのは楽しかった。開設時に雇われたので、創り上げていく面白さがあったし、かなり癖のある院長ではあったけれど、私の働きぶりを評価してくれて、好きにやらせてもらっていた。箱庭が欲しいと言えば買ってくれたし、給料もどんどん上げてもらったような気がする。アットホームな雰囲気、手のあいた者がお昼を作って皆で食べ(作るのは女たちだったが、院長もよくお手製の漬物を作ってくれたものだ)、息子がどんなにかわいいかという私の自慢話を、からかいながらも皆よく聞いてくれた。

私の非とは、1人目の出産のときには、3カ月の産休ももらったので、2回目も同じように行くとばかり思い込んでいて、その時のクリニックの外的状況も影響しているが、十分なコミュニケーションをとる努力を怠ったということである。その時は、急にクビを言い渡されて腹が立ったので、売り言葉に買い言葉みたいなこともあり、とにかくやめることになった。人に経過を説明するうえで、詳しく説明するのが面倒なので、「クビになった」とは言ってきたが、経営者の立場を考えれば理解できることなので、自分の中に被害感が残っていない。それに、ここでクビにならなければ、間違いなく女性ライフサイクル研究所が誕生することはなかったはずである。

急に職を失ってどうしようかなと考えたときに、ふと思い浮かんだのが、家でやっている子育てグループをもう少し公的な形でやるのはどうだろうかということだった。その頃には、クリニックで見てきた子どもたちの抱える時代的な課題と、子育て仲間たちから見えてくる母親たちの抱える時代的な課題がはっきりとつながって見えていたので、自分で勝手に「予防臨床心理学」という命名をして、子どもが問題を抱えてから関わるよりも、もっと一般の母子への支援をすることの方が話は早いのではないかと思うようになっていた。おそらく、当時、関わっていた子育てサロンのイメージもあったし、クリニックでの経験から開業臨床のイメージも形成されつつあったのだと思う。とにかく、子育てしながら自分のペースで働くには、ワンルームでも借りて自分でやるのが一番便利なのではないかと思ったのである。子育てグループなら自分も子連れでできるし、クリニックに勤めていた週1くらいは、子どもを夫に見てもらって個人のカウンセリングをするのも良かろうと思った。

こんな経過から、研究所をスタートさせることになったのは、娘が3カ月の時である。今回、女であることを取り上げたのは、それが、「心」や「個」への関心から、外から人を規定するシステムや社会という次元へと自分の眼が開かれることになった重要なテーマだからである。そうは言っても、研究所をスタートさせた頃の私の女であることへの理解は、まだまだ浅薄なものだった。むしろ、その後、耳を傾けることになる女たちの物語に圧倒される中で、それまで自分には見えていなかったものが見えるようになっていった。

形づくる 人々

第2回

柳川正賢

(やながわ・まさより)

離陸

まだ前置き

それでは、そろそろと本編に入っていきます。本連載では、いろいろなものをテーマに取り上げる予定です。“いろいろなもの”とは、施策だったり、地域だったり、組織だったり、テーマ自体にあまり一貫性はありません。あえて、そうしたいと思っています。

というのは、例えば市町村の施策なら施策とテーマを決めて、そのなかで“いろいろなもの”

を紹介していく形をとった場合、連載はおのずと一つのカラーをもってしまおうでしょう。「ああ、全国の施策の紹介コーナーだな」という具合です。テーマが統一しているので、読み手もそこ（施策の内容）に意識を合わせやすくなります。そういう読まれ方もそれはそれで歓迎です。ただ、書き手が表現しようと思っている“いろいろなもの”の本丸は、施策のバリエーションではなかつたりします。

人のもっている発想や力強さや愛情や運。こうした諸々のものが作用して、またかかわる人々の間で関係し合って、“何か”は形づくられていく。それは、施策だろうと地域だろうと組織だろうと一緒にだと思います。ただ、そのことは意識して見ようとしないと見過ごしやすく、見る側の目によっては見えてきづらいものもあります。

一方、形づくられたもの（できあがったもの）には黙っていても目が向けられます。それをどうやって作ったのかというプロセスも含めてです。ただし、そのプロセスとは多くの場合、形にする「方法」を指しています。方法とは、誰がそれを行うかを問わないレベルにまで加工・一般化された、人そのものからすでに離れた段階のものです。

では、その「方法」に至るまでに、どれだけ「人そのもの」を見ようとしたか、学んだかといったとき、そこがスッポリ抜けてしまっていることはとても多い。行政の取材のなかでそこへ踏み入って行って、こんな声に出合うことがあります。「A市のあれはいいアイデアだ。でも、あそこだからできるということではないと思うし、そうであってはいけない。あのシステムが重要だ」。この担当者

は、A市と同様につくられた虐待対応のフローチャートと各種委員会の陣容を見せてくれましたが、この形に込められたA市関係者の考えやこれがつくられていった過程は知らず、関心もないようでした。

このような例では大抵、つくられた形が機能せずに「そんな都合のよい方法など、現場にはそうそう存在しない」と、もっともらしい結論をつけて、かつ誰も責任をもたない(発展的な方向を目指す動きが起こらない)という末路をたどります。

“形づくられたもの”には自然と目が向けられるが、“形づくった人”にはなかなか目が向けられない。私が感じているこの傾向をふまえて、『形づくる人々』にスポットを当てる、形が軸にならないように多様なテーマで臨む。それが本連載のスタンスです。

とは言ったものの、“人そのもの”を文字で描くというのは、大き過ぎるチャレンジになりそうです。そこで読者の皆さんにお願いです。私が書くものは、基本的に“情報”です。関心をもっていただくために、独創的でおもしろくて、私たちもやってみたくとか取り入れたいとか、元気や勇気をもたらしたとか、そういう自己の内面がちょっと奮えるようなものを取り上げられたらと思っています。それらを見ていただく際に、紹介されている内容とともに、そこに登場している人の考え方や思い、動きなどに思いをめぐらせて、いろいろ想像してもらいたいのです。なんでそんなことを考えたんだろうとか、それってどうやったらできるのとか、このときつらかったんじゃないかなあとか、こうしたらもっといいかもよとか、そういうことです。文字にな

っていないところにまで、思いを馳せていただければ筆者冥利に尽きます。

取材のなかでは、取り組みの中身(記事として紹介すべき内容)以上に、それをつくった人の考え方のある部分や動き方の特質に、惹かれるというか力を感じる場合があります。そういうものを想像のなかから汲み取っていただき、そして、その人と話したい、会いたいと思うくらいに興味をもたれたら、どうぞ直接やりとりなさってください。前回申し上げたように、人と人をつなぐことは本連載の目的の一つです。「対人援助学マガジンを読んだ」と言えば、先方に一から説明されなくてもわかるようにしておきます。

さあ、それではいきますよ。

要介護認定

前半で施策を例に挙げてきたので、今回はそれでいきましょう。高齢者領域の援助職に関心の高い「要介護認定」でどうでしょう。まつわるところで、おもしろい人がいます。

要介護認定は、介護保険サービスの利用を希望している人が、どのくらい介護を必要としているかを判定する仕組みです。このときの“どのくらい”とは、その人自身の能力面(主には身体能力)を考えたときにどの程度の介護が必要かを量るという意味で、その人が生活していく上で必要となる介護の量を量るという意味ではありません。

つまり、子の世帯と同居していて、家族全員が介護に参加していて、バリアフリー住宅に住んでいるAさんと、一人暮らしで身寄りもなく、近所に民家もスーパーマーケットも

なく、昔ながらの日本家屋に住んでいるBさんは、一個人の身体能力や社会的な能力が同じなら要介護度も同一です。少なくとも、一次判定の時点ではそうなります。いうまでもなく、二人が必要としている介護サービスの量は同じではありません。

その人自身の能力を判定するという点に関して、要介護度と必要な介護サービス量のアンバランスが指摘され続けているのは、認知症です。認知症の人には、一次判定の評価項目を軒並みクリアしていく人もいて、極端に軽く判定されてしまう例もあります。自立に近い生活ができるかといえば、要介護度2や3の人より困難が多いこともざらです。

認知症の人の判定結果については、介護保険が始まった平成12年当初から保険者である市町村の問題意識も高く、千葉県我孫子市では、申請者が認知症と診断されている時点で要介護3以上とする条令を盛り込もうとしたくらいです(当時の厚生省に撤回を求められ、市長が直談判に行きました)。多くの市町村が対応の基本としたのは、介護認定審査会による二次判定の精査です。

二次判定というのは、認知症に限らず、要介護度を決定する上できわめて重要な位置を占めています。身体の障害の度合いだけでなく、生活上にどんな障害が生じているかを含めて考えないと、その人に必要な介護の量は見えてこないからです。

ただし、要介護の度合を導き出すにあたって、認定審査会で何をものさしに持ってくるかは、市町村によっても同じ市内の合議体によっても隔たりがあります。先に断っておきますが、私は認定審査会そのものを取材した

ことはありません。取材という形で第三者が立ち会ってよい場と考えていないので、交渉したことがないということです。しかし、市町村による判定の出方の差異を感じることは多く、話題としてはよく持ちかけます。実状の断片にふれるのは、取材後の市町村職員との飲み会(かなり高い率で誘います。取材中はバリアの強い行政マンが多く、このままじゃ帰れないなというのが発端)や、審査会委員を務めている専門職との情報交換です。

何をものさしにもってくるかといったとき、純粋にその人自身の能力と実際の生活能力とのフィッティングを見て判断される例もあれば、先述したBさんのように、この人は誰も介護してくれる人がいないから、より多くのサービスが必要だと判断されて要介護度が動く例もあります。また、そうした審査自体の基準とは関係なく、合議体における医師の裁量権の大きさや認定調査員の情報収集力(とりわけ特記事項の記載内容)の質が結果を左右することもあります。なかには、審査会委員がその申請者の家族と知り合いで便宜が図られたなど、聞けばありそうだと思うことも実際に起こっています。

一方では現在、認定審査会の重要性はさらに増えています。高齢者領域で働いている方はよくご存知のように、要介護認定の仕組みは昨年4月に新基準が導入された後、軽度判定される人が続出するという現場の混乱を受けて、調査項目の判断基準の大幅な見直しを行いました。厚生労働省が設置した有識者会議は今年1月、軽度化の状況は是正されたとして、混乱の終息を宣言しましたが、一次判定に対する信頼が揺らいでいるのは確かです。

す。要介護認定の適正さは認定審査会で担保する。“なにがなんでも”という修飾語が付くかもしれません。おそらく、これが今の全国市町村の共通認識です。

情報の質

要介護認定の精度に影響を与える一つの要素は、認定調査による情報の質です。ここにはハードルがあります。認定調査は、各調査項目について、できるか・できないかを評価するシンプルな設計です。“どのようにできたか”や“どんな環境でそれができたか”を合わせて評価するつくりにはなっていません。そのため、“できた”と評価された二人の人の“できた中身”は異なります。そして、その人に介護が必要な度合というのは、こういう部分にこそ表れます。

しかし、どのようにできたか、どんな環境でできたかといったことは、実際に目で見なくてはわかりません。言葉を尽くせば8割くらいは表現できるかもしれませんが、全部は無理です。調査員には高い文章能力が求められますし、その前段階には、調査員がどこに着目するかという視点や観察力があります。さらに、このレベルを均一にするのが至難です。そもそも、数量が膨大になる統一モデルの調査方法として妥当か、現実的かという問題が出てくるでしょう。

それでも、です。もし、今仮定したように実際に目で見ることができれば、評価の中身はわかります。調査員が行った“できる・できない”の評価が適切であったか否かはもちろんのこと、どういうでき方だったのか、ど

のような環境でそれができたのかも第三者、すなわち、一次判定の結果を受けて二次判定を行う認定審査会の委員たちにわかるのです。では、どうやって？

というところで、お待たせしました。ようやく登場です。

西春町

愛知県の北西部、名古屋市のすぐ北に「西春町」という町があります。いや、ありました。平成18年3月にお隣の師勝町と合併し、今は北名古屋市と名称を改めています。旧西春町の人口は約3万3000人、北名古屋市は約8万1000人です。

もともとは、近隣7町（豊山町、西春町、師勝町、春日町、西枇杷島町、清須町、新川町）からなる「西春日井郡」としての結びつきが強く、郡全体でも15万人程度の人口規模ということもあって、介護保険のサービス資源でも連携が行われていました。現在、このエリアは北名古屋市、旧4町が合併した清洲市、豊山町へと行政区分が再編され、今から紹介する約10年前の状況とはずいぶん異なります。ただ、それはあくまでも状況ですから、ここでの主旨には関係しません。「西春町」で話を進めましょう。

西春町では、介護保険が始まった当時から認定調査に「ビデオカメラ」を使っていました。そうです。調査を受けている高齢者の様子をビデオカメラで撮影し、その動画像を認定審査会の資料にするのです。プライバシー保護のため、撮影は首から下で、名前による声かけは行いません。撮影の対象となる調査

項目は、麻痺や拘縮の有無、起き上がりや歩行、片足での立位保持など、身体機能に直接関係する項目です。撮影後は、その場で動画を高齢者と家族に確認していただき、承諾が得られれば、それが審査会資料になるという流れです。

注目したいのが、二次判定（＝認定審査会）での変更率です。認定調査による一次判定で出された要介護度が二次判定でどれだけ変更されたか、その率です。取材当時（平成12年7月）の愛知県の平均変更率は21.9%、対して西春町は32.0%。審査会委員が調査内容を動画で確認したことによって、要介護度の変更が必要と認められた表れです。

私は動画をを見せてもらってすぐ、受け取る情報の質も量も、書面で見るとはまったく違うことに気づきました。例えば、立ち上がり一つをとっても、立ち上がる時の力の入り具合やそこにどれくらいの懸命さがこもっているか、どの程度の時間を必要としているかなどがわかります。これらはどれも文字情報には存在しないことです。声かけに対する反応の速さや応答の仕方、一連の動作がどうつながっていくかもわかるので、生活という角度からの自立度も伝わってきます。

また、これは話で聞いたことですが、身体の状態が変わらなくても、夏と冬では、できる・できないが簡単に変わってしまう可能性があるとのこと。例えば、冬は4畳の部屋に寝具用の布団と毛布でこたつをつくり、足の踏み場もない状況のなか、本人は厚手のどてらを重ね着してモコモコの着膨れ状態。夏はこたつがテーブルに替わり、本人の格好はランニングの肌着とすててこ。これでは健

康な人でも動きやすさの違いは歴然です。各項目の評価内容に変化が表われていなくても、そういうことも想像しながら審査会に臨めるメリットは大きいとの話でした。

それでは、ご登場いただきましょう。発案者は、当時の福祉課長の新安哲次（しんやす・てつじ）さんです。取材ノートを引っ張り出して、当時のご本人のコメントをいくつか紹介します。

「もともとは、ケアマネさんがケアプランを作るときに、利用者ごとの情報が時系列に集約された画像付きのデータベースがあれば、どんなに便利だろうと思ったのが出発点です。この人のこの部分がこう変わってきた、なんていうのは、目で見れば一発ですから」

「いろんなメーカーに開発を提案しましてねえ。画像を含めたデータベース化には時間もコストもかかるとのことで断念しかかったのですが、それなら認定審査会の資料として取り入れる方法はないかなと。こっちはうまくいきました」

「調査の内容と異なる事実が画像に現れることがあるので、調査員もいいかげんなことは書けないんです。記録の技術力アップの面で、いい刺激になっていますよ」

同じものは無理

当時、この取り組みは各地の市町村に注目され、視察も多くありました。しかし、残念ながら広がりはなかったようです。主な理由は、ビデオカメラやモバイルパソコンなど端末機器類にかかる費用、認定調査員の研修、住民への周知および承諾を得ることの労力、

などです。

こういうのが掌がってくると、それはそうだろうと思います。一つの施策が成立するとき、そこには相応の条件や理由があります。市町村の財政事情や産業基盤、人的資源、地理特性、住民性、機動力（影響力が大きいのは人口規模と組織の体制）などの条件を満たし、それが必要とされている状況だとか、質を高めることへの全体的な機運があるとか、そのことを取り入れるだけの理由ももっている。それら諸々があって、一つの“形”に到達するという事です。言い換えると、その形はそれをつくった市町村（＝人々）固有のものであって、同じ形を別のところにつくろうというのは、それと同じ条件や理由やつくるプロセスを用意するという事で、そんなのは無理です。

西春町のこの取り組みに限らず、全国にはこの類の話がたくさんあります。私は市町村取材の際に、担当者に他の市町村の話をする事が結構あります。取材のテーマと関連して、有用になりそうな情報を提供できればとの思いからです。このとき、先方からよく耳にする言葉があります。「それって、どっからお金が出てるんですか？」。行政の施策は予算化できるかどうかにかかっているので、大事な問題です。しかし、仮に予算を確保できた場合にも、それだけではモデルにした市町村のようにはいきません。そして、先述した各種の条件を同じにするのは不可能です。

では、これはいいなとせっかく思った取り組みから、具体的な何かを得ることはできないのかといったら、そんなことはありません。取り組みそのものではなく、それを“形づく

った人々”のほうに目を向ける。そのなかに、別の形として作り出すための大いなるヒントが隠されている可能性があると思うのです。取り組みに興味があって、そこに注目しているのに、そこからいったん離れるというのは、発想としてはアブノーマルです。形のほうに魅力を感じていればいるほど、自分からはなかなか気づけないことだと思います。

私の場合は取材者というたまたまの立場柄、この対象と直接向き合い、この対象のことをいろいろ考えることが、自分の仕事（記事を書いたり、そこから企画を立てたり）として求められました。だから、形以上にそれがつくられた過程に目が行き、“人”の力を感じる機会も得られたのだと思います。

西春町のこの取り組みでも、話を聴きたいと働きかけた市町村関係者のなかに、事業の中身とは直接関係しない話や何らかのやりとりのなかで、重要なものを持ち帰った方がいたかもしれません。持ち帰って、他の何かに活かしたかもしれません。それが、本稿の前半部分で挙げた“それをつくった人の考え方のある部分や動き方の特質”です。

特質は姿形を変える

人の“考え方や動き方の特質”は、言葉ではうまく説明できないものです。直接会ったり、見たり、話を聴いたりするなかで人によっては感じられ、そこから何かが生み出されたときは、その内容や生み出される経過のなかに垣間見るといったものです。

私は最初に新安さんにお会いしたとき、取り組みがおもしろいと思った以上に、この方

の発想や考え方や話のもっていき方がおもしろいと思いました。他にもおもしろいことをやっていそうだし、これからもやりそうだと思います。そうしたら案の定でした。簡単に紹介しましょう。

市町村が運営主体となり運行する「巡回バス」は、皆さんの街にもあるところが多いと思います。100円くらいの低運賃で市内の公共施設を巡っていく、あの車輜です。乗客に占める高齢者の割合は高いのが一般的で、特に昼間の時間帯はその傾向が強まります。行政が運営するので停留するのも公共施設というのはもっともですが、主な利用者層である高齢者のニーズとは少しずれがあります。

西春町では、そうした実態をふまえ、高齢者が行きたいところに自由に行ける乗合型タクシーを事業化しました。タクシーが“来る来る”、街中を“クルクル”廻る、にちなんで「くるくるタクシー」と名づけられました。先のビデオカメラの一件を取材した約1年後、平成13年の出来事です。お金があるからできたのだとみるのは誤りです。町の経費は年間約380万円で、巡回バスの約10分の1。事業費をできるだけ低く抑えるために、地域の老人会で行きたい場所を聴き取る、実際にタクシーを走らせて時間を計測するなど、何カ月も下調べをした上で事業案を議会に提出しています。当時の取材ノートに、新安さんのこんなコメントを見つけました。なかなか的を射ていると思いませんか。

「巡回バスが喜ばれて利用されているのは、温泉を掘り当ててそこをセンターにしているところくらいですよ。体はそこそこ元気なお年寄りに積極的に外出してもらおうと思った

ら、要望にきちんと沿っていないとダメ。行きたいのはスーパーだし、行きたいのは定期受診する病院。役場じゃありません」

まだあります。「介護保険ICカードモデル事業」という厚生労働省のモデル事業が平成13～15年度に設けられ、ここに西春町が手を挙げました。この事業は、介護保険の被保険者証をICカードに替え、そのカードを基礎媒体として、介護保険サービスの支給限度額の管理機能やケアマネジャーが作成するケアプランの進行管理機能を付加し、実用性を検証するというものでした。

私がここでおもしろいと思ったのは、この事業そのものへの取り組みではなく、西春町がこれを足がかりにした別のものを見ていることでした。ICカードには、今挙げた機能をすべて盛り込んでも空き容量があります。そこに、住民がこのカードを持っていると助かると思う機能を組み込むことを思い描いていたのです。当時、総務省は住民基本台帳カードの空き容量活用のためにいくつかのアプリケーションを検討していました。各種証明書の自動交付機能や公共施設の予約機能、事故や急病に遭ったときにカードに収録されている本人情報から適切な医療が受けられる機能などです。どれも高齢者にとって心強い機能に違いありません。そして、以下が新安さんのコメントです。

「IT（情報技術）が何であるかをお年寄りに説明してわかってもらおうというのは、虫がよすぎる。効果や便利さをじかに確かめてもらえれば、それが本当の理解になる。介護保険制度そのものへの理解も進むでしょうから、そうなりゃ一挙両得です」

この事業はモデル事業の後、次の展開を見ることなく終了しました。国のレベルでも IT 導入による行政効率を探っている段階で、本格実施するには時期尚早だったのだらうと思います。それはそれとして、人の“考え方のある部分や動き方の特質”は、姿形を変えながら同じようなおもしろいものをつくりだす可能性をもっているということ、そこは受け取っていただけたと思います。

“人々”

いかがでしょう。新安哲次さんという“人”に魅力を感じた方がきっといらっしゃると思います。と、大事なことを忘れていました。

こういうときに、たった一人のお名前を出すと、一人ですべてを考え出し、形にしたように見えてしまいがちですが、もちろんそんなことはありません。カギとなるきっかけやひらめきをもたらしてくれた人、提案に賛同して力強く動いてくれた人、いずれもさまざまに協同者がいて、はじめて“形”はできあがっていくものです。

場合によっては、事を中心者として取り上げられる人より、そのことの実現に深くかかわった人がいることもあります。取材のなかでは、そういう方に出会うときも出会わないときもあります。取材という限られた時間、限られた場の設定でそれらを把握することの難しさもあります。でも、そういう人々に出会わないときも、私はその人たちがいるだろうことを、そして姿を、動きを想像することにしています。

本連載では今のところ、その方々にご登場

いただくことはしない予定です。したほうが情報は具体的になりますが、人と人の“関係”の要素が加わって、わかりやすさが低まってしまうからです。ここには一人の名前しか登場していない、だが周囲にはいろんな人たちがいる。そのことを感じながら読み進めていただければ幸いです。

福祉座

それでは最後にもう一つ、ご本人の顔を紹介しましょう。新安さんは今から約 20 年前、西春町の福祉部に配属されて間もなく、町民劇団の「福祉座」を立ち上げました。当時、町主催の敬老会で式典の後に催されるアトラクションに活気がないのを見て発案したものです。福祉座の劇団員は、町職員をはじめ、郵便局員や介護施設の職員、主婦、学生とさまざま、町長はもっぱら悪役で登場します。シナリオ作成と演出を兼ねる現場の総責任者が新安さんです。

劇はお年寄りに好まれる時代劇。といっても、ただの時代劇ではありません。一つは、西春町に由来する話を題材にする。新安さんには、企画課で町史を 8 年間編纂したキャリアがあり、物語の舞台設定に土地にまつわる伝承を盛り込むというわけです。もう一つは、シナリオに現代の高齢者事情や町の施策を取り入れる。例えば、こんな具合です。

「親分、デイに行きましょうや」「なんだおめえら、やけに到着がはええじゃねえか」「親分知らねえんですかい、西春には“くるくるタクシー”っていう便利な乗り物があるんですから」

私は福祉座の話をも初めて聞いたとき（認定調査にビデオカメラを活用するという先の一取材をしたとき）、どうしても自分の目で確かめたくまりました。劇の内容はもちろんですが、多様な立場の人で構成される劇団員と地元住民、そこに集い形づくっている人々の雰囲気を感じてみたかったのです。

訊くと、福祉座は毎年1回、定期公演を開催しているとのことで、翌年に観に行きました。公演のひと月前にリハーサルの現場にもお邪魔しました。ここで得たさまざまな印象のなかで、忘れないでおこうと思ったことがあります。今自分が目にしている“この形”は、ここにいる一人ひとりが欠けることなく存在してつくられている。当たり前のことながら、その当たり前のことを日常のなかで見過ごしていないだろうか。こちらが意識しさえすれば、そこに立ち返らせてくれるのが現場のおもしろさであり、力です。

*

新安さんは現在、北名古屋市の農業委員会という部署にいらっしゃいます。今年3月に定年された後、継続雇用制度により引き続き市職員としてお勤めです。今回ご紹介した、認定調査時のビデオカメラ活用や高齢者の乗合型タクシーの施策は、北名古屋市への合併に伴い、平成17年度をもって廃止しています。残念な気はしますが、第一に器（施策が成立するときの条件、理由）が変わっていますし、望まれる形、望ましい形もたえず変化していくものしょうから、否定的に見てしまうのはよくありません。

大事なものは“人”です。新安さんは健在です。7年ぶりに電話をしたというのに、あまり

にふつうの対応に、昨日話したっけ？と錯覚しそうになりました。ちょっとは懐かしんでくれよと思いましたが、そういえばこんな感じだったと甦るものがあり、うれしくなりました。「福祉座」は続いていて、今年は10月に愛媛県松前町で開催する「全国むら芝居サミット」に出場されるとか。

そうだ……！ 行ってしまおうか。



新安哲次さん

7年前の写真はさすがによくはないかなと思い、ご本人に送っていただきました。8/25撮影です。

お詫び: 本連載は筆者の種々の事情により今号で終了させていただきます。本編に入った途端の報告となりますことを謹んでお詫び申し上げます。連載の継続が難しくなることがわかったのは本稿を書き上げた後です。

記事の内容をこの第2回目で完結するように再構成しなかったのは、この流れで何らかの場へとつないでいく余地を、可能性を残しておきたかったからです。『対人援助学マガジン』は、読者ニーズや商品価値といった本来出版物が最も重視する要素にとらわれないぶん、自由な展開が可能です。これからは一読者として、本誌の行く道を見守らせていただきます。ありがとうございます。

きもち 言葉を さがしている

「紅茶の時間」とその周辺

水野スウ

新連載 第1回

はじめまして

金沢から能登に向かって、車なら30分ほどのところにある津幡町のわが家で、週に一度、誰でもどうぞ、という場をひらいています。名前は、「紅茶の時間」。近ごろはやりのおうちカフェとよく間違われるので、まずは、はじめに場の自己紹介。

「紅茶の時間」(略して、紅茶)は、毎週水曜日の午後1時から6時までひらいている、あんまりはやっていない、お金のいらない、ただの、喫茶店、みたいなところ。そしてこの、あんまりはやっていない、と言うところが、実は紅茶のミソ っているこの説明は、おおむねここ10数年の紅茶にあてはまることで、もちろん最初からこうだったわけじゃない。はじめは、子育ての井戸端みたいな場からスタートした。

ひとよりだいぶ遅めに母になった私(と、当時は思っていた。今はどうやらそうでもないらしい)は、そのころ住んでいた金沢のマンションで昼間、一人ぼっちで子どもと過ごす毎日がやたら心もとなく、それまでフリーで仕事してきて、知り合いの名刺は束で持っていたけど、仲間とよべるつきあいのひとが一人もいないことに気づいた瞬間ぞっとして、生まれた娘に、いや、それ以上に私にこそ、仲間が必要!ってキョーレツに感じて、娘が11ヶ月の時に、我が家を週1のオープンハウスとして、紅茶をはじめたのだった。どなたでもいらしてください、とりわけ赤ちゃん連れのお母さん、大歓迎です、と葉書サイズの呼びかけ文に書いて。

今ふりかえって、あの時の、ぞっ、って何だったのだろうかと思う。一つには私が、子どもが得意、のタイプじゃなくてむしろ苦手と思っていたこと、ちゃんとした子育て(っ

ていう言葉自体、今思えばヘンなんだけど)できる自信がまったくもってなかったこと。もう一つは、私が超わがままで、やな女の子だった子ども時代を思い返し、それはたくさん大人の囲まれたただひとりの子どもとして育ったせいと思いこんでいたので、あれを繰り返しちゃいけない、子どもは子どもたちの中で育つべきだ、ってたぶん強迫観念じみた怖れを持ってたからかもしれない、と今は笑い話のように思い出せる。

まあ、あとづけの意味はどうあれ、当時は、子育て仲間がほしい、というただそれだけの単純な理由、いわば私の都合ではじめた紅茶だった。

以来、誰も予想しなかったことだけど、紅茶は休みなく毎週続いている。はじめの数年間こそ、母とおさなごたちであふれる、満員御礼、週1未満児保育園のようだった紅茶も、やがて、それぞれの子が保育園や幼稚園に行き、学校にあがり、私たち一家は娘が小学4年生になると同時に、今の津幡に移り住み、紅茶の空間はマンション時代からみるとだいぶゆったり広くなり、前みたいにこみあう感じは少なくなった。

2010年、つまり今年の11月で、紅茶は満27年になる。さすがに元旦、とか大晦日、とかをのぞいて、毎週あいている紅茶に、誰も来なかった、という週がまだ一度もない。暑い日、寒い日、晴れても降っても、大雪の日にも、ふしぎと、誰かしらやって来る。時にはずいぶん遠い県外からも訪ねてくれる。

あいている時間内に、二人、ということもあれば、なぜか次つぎ、ひとがあらわれて20数人にもなっていてにぎわう、そんな日もある。でも平均したら、6,7人から10人程度だろうか、それもいちどきにでなくてんでんの時間に来て、好きな時間に帰るのだから、正真正銘、はやっていない。だけど、先週と今週と来週と、同じ顔ぶれ、同じ組み合わせ、ということもこれまた一度もない。いくつもの、何種類もの、はじめての出会いの生まれる瞬間に、これまでどれだけ立ちあってきたことだろう。

はやらないがミソ

今の紅茶には、金沢ではじめたころのような、子育て中の、とか、お母さんたちの、とかいう枠組みが何もない。いい年のおじさんもいれば、若者もいる。子ども連れの30代もいる、パートで働く40代も、50代の主婦もいる。おばあちゃんになりたてのひともいる。仕事の途中や帰りに立ち寄るひともいる。

年令も性別も立場も職業もこころ模様もさまざま、学校に行っていようがいまいが、職についていようといまいと、それを問いただされることもなく、ただ来たいときに来て、話したければ話して、話したくなければ黙ってそこにいて、なにげに聞いてて、あるいは心とぎ澄まして聴いて、本を読みたければ読んで、時には久しぶりの誰かと再会して、紅茶を何杯もお代わりしながら(私はそのお茶をいれる係)紅茶にたまたま来あわせた同士、その時間をともに過ごす、分けあう、ただそれだけの場所。

これ、とって高くかかげる目的も目標もないけど、でも紅茶という場にはなにかおもしろいところがあるなあ、とこの10数年で確かに感じるようになった。その年月は、紅茶があまりはやらない場になってきた、と思うころとちょうど重なっている。

もしか毎週、たくさんのひとが訪れる紅茶だったら、あの話をはたして私は聴かせてもらえたらどうか、あのひとはあそこまで深い胸のうちを紅茶の場で語ってくれたらどうか、と思うことが多すぎて、それが、最初の紅茶紹介のところで書いた、はやらないとこがミソ、とつながっていく。

誰だってはじめて行った場所にすでにたくさんの人が集っていて、自分には関係なさそうな話で盛り上がっていたら、圧倒されるし、緊張もする。ひとが、いわゆる世間一般の他人には、知られたくない、見せたくない、弱さもふくめたところの内側を見せられるのって、ごくこじんまりした範囲に限られていそう。それも、この顔ぶれならだいたいじょうぶ、という関係性を保てる円内。そういった安心の空気があったら、ひとは自分のきもちをふと、話す気にもなれるのだろうと思っている。

その人数は、3,4人から、せいぜい6,7人、かな。同じ人数でも、そのなかでふたりずつ島になって話し込む、同時多発の聴く場面、というのもしょっちゅうあって、そんなときは私もまたその中の聴くひとりになって、目の前のただひとりのひとの話に、耳を傾けている。

ここでは何を言っても、頭ごなしに否定されたり、お説教されたり、ましてや指導されたりしない。話は、きちんと聴かれる。ここでの話は、固有名詞つきで噂話としてひろがっていかない。疲れたときは疲れた、と、しんどいならしんどい、苦しい、と、言ってもいい場所なんだ。そのことを、来たひとの誰かが自分で感じる時期がくると、その日その時にいあわせた顔ぶれに応じて、本当にたくさんの一人ひとりが、ぽつりぽつり、ときにはとうとうと堰をきったように、自分のきもちの内側を語りだす。

話すは、放す

紅茶がはじまったころの子育て井戸端時代にも、子連れ、赤ちゃん連れで来るお母さんたちは、実によく話した。夢中で話した。毎日子育てに追われて、同じことのくりかえしみたいに思える日々の、一週間分たまった想いを、紅茶で会えた仲間にあたがいにぶつけあうように話した。

その話もたいていは途中でちいさなひとたちの泣き声やちょっかいに妨害されて、最後まで行きつかないことが多かったけれど、紅茶に来たときと帰るときとは、それぞれのお母さんたちの表情があきらかに違った。

きっとあのところ、私の顔だって、週ごとの紅茶の before と after じゃ違ってたことだろう。紅茶のあとは、私もいつもなんだかすっきりした。不安やら悩みやら問題やらが、なくなったりきれいに解決したわけでもないのに、きもちが軽くなっていた。

そうか、「話す」って、「放す」なんだ。話は、きかれてはじめて話になるんだ。誰かにきいてもらって受けとめられたきもちも、話す前よりも解き放されている、だから軽くなって、楽になったと感じるんだ、っていうことを、誰よりも私自身が毎週の紅茶で実感していった。

金沢でひらいていたころの紅茶は、だけどまだまだ、話す(=放す)ってことのほうに重きがおかれていて、「きく」ことを、当時の私はとくに重要視してなかったように思う。

ところが、津幡に移って2,3年たったころから、ひとが少ない時間帯の紅茶や、とりわけ他のひとが帰って私と二人きりの時間になったりするときまって、やおら話しだすひとが、気づけば徐々に増えてきていた。

「私、実は、、、」からはじまって突然、夫婦の離婚に至るものがたりを2時間近く語りだすひとがいたり、親からされた仕打ちを話すうちいきなり泣き出すひとがいて、つられてこっちもわけがわからず一緒に大泣きしてしまったり。

ちょ、ちょっと待ってよ、いったいどうしてそんな重たい話、私にするわけ？ そんな深刻で重大な話、私なんかがきいてしまっていていいの、などなど、こころがざわつきながらもあのころは全身、ダンボの耳と化してひとの話をきいていた。

しんどい話をたてつづけにきいちゃった日は、私はいつもへろへろになった。エネルギーの放出、みたいな話をきくには、うけとるこちら側にもそれ相応の覚悟やこころの準備が、当然、必要だったんだ。

今日ちょっと相談したいことあるんだけど、的な前置きはおおいに曲者だった。どうしたらいいと思う？ というのも、さらなる引っ掛け問題だった。求められてるんだから、なにか役立ちそうなこと言ってあげなくちゃ、このひとのためになにかいいこととしてあげなくっちゃ。

必死に答えや解決策を探そうと、内心焦りまくる。と同時に、こんなきき方ではたしていいんだろうか、あるいは、私の対応がまずくて目の前のひとをさらに傷つけてしまったらどうしよう。そんな不安も常に背中感じてた。

紅茶の時間を私が好きでい続けるためには、こんなきもちでひとの話をきいてる状態はぜったいなんとかしなくちゃ。その必要に迫られて、私なりの、「きく」ことの勉強がはじまった。何より、私が少しでも安心してひとをきくことができるようになるために、私のために、学ぶ必然があった。いまから15年ほど前のこと。

聴く、ということ

今ふりかえれば、そのころの私には、「聞く」と「聴く」の違いすら、まるでわかっちゃいなかったし、聴くことにどれだけ大きな意味やちからがあるかも知らなかったのだと思う。

それまで受身とばかり思っていた、聴くという行為が、どっこい、そのひとがそのひとを映しだす鏡を育てることであり、同時に、聴く側の鏡も、知らず知らず育てていってくれることも、少しずつ気づいていった。

ねえ、どうしたらいいと思う？ときかれたとしたって、気やすめの励ましも安易な助言も、ほんとは言う必要なかったんだ。あのころは沈黙がこわくて、とにかくなにか早く言ってあげなくちゃ、なくちゃ。そうすればするほど焦って、頭がそっちに行く分、聴く耳がうわの空になることも、おいおいにわかってきた。

そしてほんとにちょっとずつだったけれども、長いこと胸の中にためていた想いがしつかりと誰かに聴かれ、受けとめられると、そのひとの便秘してたところがほんの少しだけ解消されて、そのおかげで以前よりちょっとクリアに、いったい何が問題だったのか、何にこれほど縛られていたのか、そのひと自身にきくと見えてくるんだ、と実感できるようになってきた。

そう、胸のなかに溜まっていた悲しさや痛みやしんどい想いは、ずっと出せないままでいたり、出してもきちんと受けとめられないままほっておかれると、文字通り、便秘する。いかにも、重たい、そして苦しい。体重計に、こころの重さを量るボタンが別にあったら、きもちよくじゅうぶん話せた（放せた）かどうか、どれだけ軽くなったか、一目瞭然だろうに、といつも思った。

それでも、ほんの数ヶ月前まで、ただただ聴いてもらっていたひとや、くりかえし同じものがたりを語っていたひとが、自分はもうじゅうぶんに語った、気づけば私、いっつもおんなじ話しとったねえ、などと自分でいうあたりから徐々に変わってゆく。「話す」ひとから、あたらしく来たひとの話を「聴く」側にシフトしてゆく。その変化の過程をじっくり見られたのもまた、紅茶がはやっていないおかげだった。

聴く耳 相手のきもちをわかって聴こうとする耳、は練習すれば育つものなんだと思った。実際、もし聴く耳を持つひとが紅茶のなかでふえていかなかったら、いっつも1対1で私だけが聴き役だったなら、私はとうの昔に疲れはて、つぶれて、こんなしんどいこと、もうヤダー、って紅茶をやめてしまったたかもしれない、と今でも思う。

きもちは、言葉をさがしている

私にとって、紅茶にくるひとの話に耳を傾けることは、そのひとの人生をほんのちょっとだけでもおすそわけしてもらうこと。重た苦しい話であっても、今日、そのひとがそれを話したのには、たとえそうと意識してなくても、そのひとにきくと話す必然があったんだ、と思って聴いている。

そのひとが、「あ、今、話してて急に思い出したんだけど」とか、「いま言ってみて、ふっと感じたことなんだけどね」と前置きを言ってから、次に出そうとする言葉を、私は小鹿のバンビの耳になって、待つ。

もう何年も、何十年も前の出来事、忘れたことにしてはたはずの、こころの深いとこの傷や痛みはそのひと自身が名前をつける瞬間、私はいつも厳粛なきもちになる。言葉にしてはじめてからだの外に出したことで、そのひとは自分のきもちとそこで向き合う、もしかしたら初対面かもしれない、そのときの自分のきもちと。

誰だってほんとはいつだって、自分のきもちにぴったりとあう言葉をさがしているんだと思う。いま感じてること、思ってることに、まさにフィットする言葉を、そう苦労せずにさがしだせて、それを相手にそのまま手渡せたなら、どんなにコミュニケーションのキャッチボールは楽だろう。

だけど現実はその逆で。きもちに言葉をさがせない状況があまりにも多すぎて。言おうとするそばから相手がいつもこちらの話を先取りしたり、邪魔したり、見下されたり、急かされたり。またはすごく威圧的で、命令的で、言ったらバカにされそうで、拒絶されそうで。そんな経験ばかりしてきたら、いっそ言うまい、話したってどうせきいてくれない、言ったところでわかりっこない、言うだけ無駄だ、って回路ができあがっても不思議じゃない。

いや、さがすほどでなくても、何気ない毎日のコミュニケーションの中でさえ、ほんとはnoとことわるつもりが、yesとつい口から出てしまったり、いいひとに思われたくて、こころにもないことを言うくせがついていたり、と、自分より世間を優先しようとするれば、きもちに言葉なんてどうていさがせないような場合がほとんどかもしれない。

だけでもある日の紅茶で、どういうところぐあいにか、意図せず言葉にしてみても、たとえば　　そうか、あんな昔のこと、赦したつもりで、ほんとはまだちっとも赦せてなかった、傷口はふさがってなかったんだ、とそのひとがはっと気づく瞬間の、微妙な表情の変化。または、言葉をさがしさがし、汗だくになって、これまでずっと蓋してきたことを話し終えたとたん、緊張がぱちんとほどけて、顔の筋肉が弛緩してよれよれになっちゃった若い男の子の変貌ぶり。

言葉にしていって外に出してみなければ見えなかった、気づかなかった自分のきもち、ってものが、たしかにあるんだと、紅茶をしてきて確信するようになった。きもちが自分に等身大、もしくはそれに近い言葉を見つけると、そこは変化のはじまり。自分の過去やいま現在のつらさ、またはあまりに習慣化しすぎて自分でも気づかなかった思いぐせ、などに句読点や、ちいさなピリオドが、ときには打てることもある。

そんな時間を共有できたとき、私はなんだかとてもうれしい。悩みの状況はたとえそう大きく変わってなくても、それでも小さな変化のおきたところから、そのひととまた一緒に考えてゆけそうに思えて。そして、その共有空間にかかせないのがやっぱり、安心と安全の空気なんだ、といまさらながら思う。

元気がないときに

紅茶が20年目を迎えようとしたころだったか、あるひとからこんなふうに言われたことを、印象深く、今もはっきりと思い出す。

自分が元気で前向きなとき、行けるところはいっぱいある、たとえばボランティアとか、外に出るちょっとした仕事とか。だけどもそうじゃないきもちのとき、行けるところは、あるようでそうそうない。「だから、紅茶があって、よかった、、、」

へえ～、と意外だった、そして、うれしかった。自分のしていることって自分からはなかなか見えない、とよく思うけれど、この場合もまさにそう。元気がないときにいける場所、かぁ。それって、時をかさねてきた紅茶につけたされた、新しい形容詞、あらたな価値観かも、と思えた。数でなく量でなく、質的な成長と呼べるものを、いつのまに紅茶は、仲間とともに育ててきてたのかもしれない。

つねに忙しすぎて、競争させられ、他者とくらべられて、やる気やできる能力だけでそのひとのすべてが測られるような、そんないまどきの流れと、違う価値観の場所が一つや二つ、あってもいいと思う。そしてもし紅茶がそういう場であるのなら、なおさらよろこんで、特別にこれといったことは何もしてない、ということをしてる紅茶を、続けていこうと、そのとき思った。

そこでほっと安心して、自分は自分でいいのだと思えて、本来の自分を取りもどしてゆける場所。誰も、元気づけたり無理に励ましたりはしないけれど、しないからこそ、弱さやみっともなさもだせて、身の丈の自分に還って行くことができる場所。きもちをリセットして、明日からまた一步をふみだせる空間 ここにあげた言葉はみな、紅茶にきて、自分をいっぱい語り、受けとめられた経験をした、紅茶仲間のだれかれのせりふだ。

ううん、どこかの誰かの話ではなく、ほかならぬ私自身が、紅茶を続けるなかで誰よりもはるかに多くのひとに出逢い、それぞれの弱さやなまなましい傷にもふれ、たくさんのひとたちの多様な生き方を知って、そこに自分との接点を探り、ときには生き方を重ね、もっとも大きな幅でゆるやかに変わってきたのだと思う。

若いとき、自分の都合時計だけで生き、共同・協働作業的なことをわずらわしいと思っていた私が、今ではむしろ、一人で何でもしてしまわないよこび、ってものが確かにあるんだよね、なんてまわりのひとによく言ってることにわれながら驚く。今の私は、自分の弱さやもろさも仲間たちの前でごくしぜんに出せて、等身大でいられて、それが安心の空気になってまた紅茶内を循環していつてるのが、わかる。紅茶を続けてきて、一番楽になったのはまちがいなくこの私だったんだ。

紅茶の時間とその周辺

紅茶に来てくれてたひとや、紅茶のことを綴った本を読んだひとの間で、自分の家をひらく、場を育てる、ということがこの10年余りで、あちこちに少しずつふえてきた。場の持つちからを感じはじめたひとが、京都で、川越で、大津で、川口で、富山で、石川県内

で。

紅茶の時間は、組織でも家元制度（笑）でもないから、はじめたいひとが勝手にはじめればいい。名前も、開け方も、そこに集まるひとたちにあった、たとえば月に一度とか、開く場所をもちまわりでとか、無理のないやり方で。共通しているのは、自らのきもちや胸のうちの語りあうことのできる、安心の空気が不可欠の場であること、だけどその空気はひとりではつくれぬ、そこに集うひとたちとともに創っていくことがみんなの共通認識としてある、ということぐらいだろうか。

教室で学ぶ専門的な知識というものがまるでないまま、いきなり実践からはいつてしまった、聴くことや、ひとをすこしでも理解するための学びを、私は紅茶ではじめさせてもらって、今も紅茶の内と外で勉強中だ。

その中で、東京調布の不思議なレストランこと、心の病気を体験した人たちの居場所であり、職場でもあるクッキングハウスと出逢い、クッキングハウスで日常茶飯事的にくりかえされるSST、ひととのよりよいコミュニケーションをめざして仲間とともに練習していく学びがあることも知った。

また、石川で、団さんと家族面接を学ぶ勉強会がはじまる、というときにも、ひょんなところからその会を知って、以来、対人援助の仕事をするひとたちのなかに、専門外の一員としてまぜてもらっている。

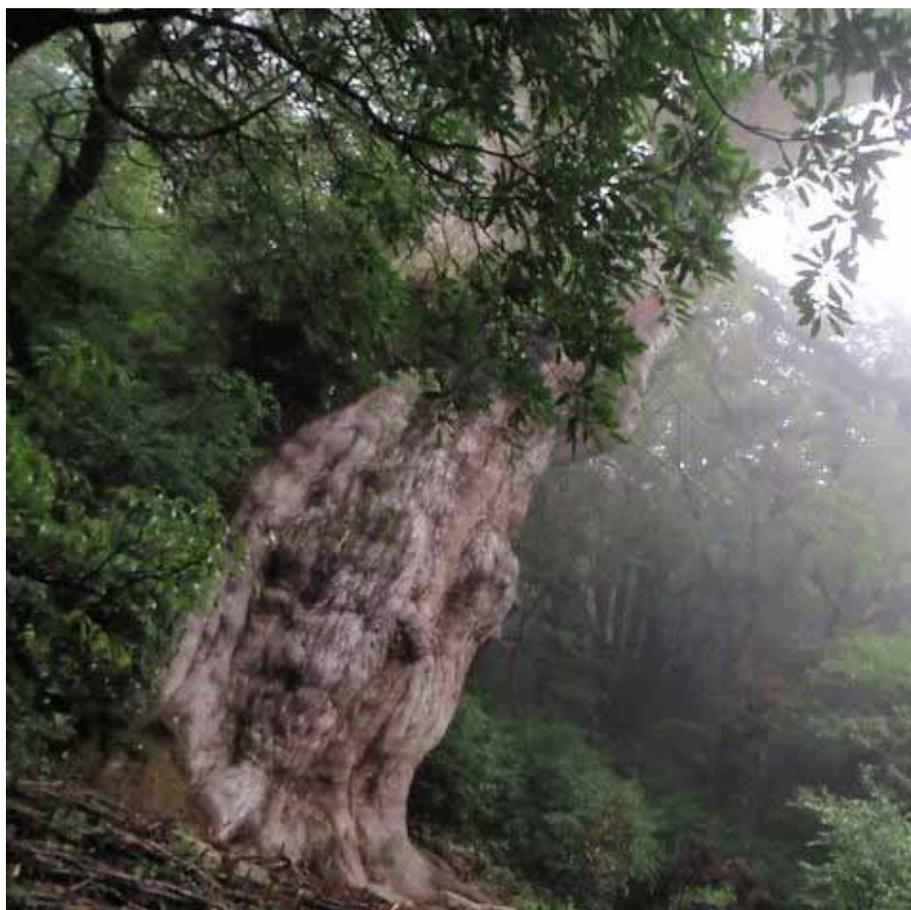
クッキングハウスでのソーシャルスキルを身につけるためのコミュニケーションの練習も、団さんから学ぶ家族システムの話も、援助職のひとにかぎらず、誰にとっても必要な練習で、学びだと、そのときからずっと思ってきた。関心を持つひと、一緒に学ぶひとがふえたらいいなと、折おりに紅茶仲間に声をかけているうち、団さんの勉強会に参加するひとまでできた。そして紅茶とは別枠で、コミュニケーションを練習する場としての「ともの時間」もはじまった。

これからこのマガジン誌上で、紅茶の時間やその周辺で起きたこと、起きていること、ともの時間や、ワークショップの自主勉強会で気づいたことなど、ゆるゆると綴らせていただこう、と思っています。どうぞよろしゅうお願いいたします。

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド 大野 睦

第一章 なぜ屋久島なのか



世界自然遺産登録のなぜ

縄文杉に象徴される屋久島の自然。縄文杉を守るために世界自然遺産に登録された訳ではない。1993年屋久島は白神山地とともに日本で初めて世界自然遺産に登録される。1992年、日本が世界遺産条約し

てすぐのことであるがユネスコが世界遺産条約を採択したのは1972年。日本の時代背景として高度経済成長の真只中。日本社会では自然保護に対して関心は薄く意識に大きな遅れがあったと考えられる。その2年前、屋久島では国有林の屋久杉伐採事

業の終焉を迎えている。林業などの第一次産業が廃れていく時代でもある。伐採事業が終わることでひとつの節目を迎え、屋久島の価値というものを見直すべき時代がやってきたのかもしれないが、当時の屋久島では観光産業の占める割合はわずか6%だったと言われている。屋久島が世界自然遺産に登録されて10数年が経ち現在では観光産業は60%を超えているが間接的な事業者も含めるとかなりの割合になるとの見解もある。現在の屋久島を支える観光の目玉である世界遺産。



屋久島の世界遺産としての価値たるものは『世界的に特異な樹齢数千年のヤクスギをはじめ、多くの固有種や絶滅のおそれのある動植物などを含む生物相を有するとともに、海岸部から亜高山帯に及ぶ植生の典型的な垂直分布が見られるなど、特異な生態系とすぐれた自然景観を有している地域である。以上のことから「陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や生物群集の進化発展において重要な進行中の生態学的生物学的過

程を代表する顕著な見本である。」とともに、「類例を見ない自然の美しさ、あるいは美的重要性を持ったすぐれた自然現象または地域を包含する」と判断され世界遺産一覧表に登録された』と記されている。離島であったことと国有林の割合が非常に高いことは伐採事業の撤退後に屋久島の開発を押し進められなかった大きな要因となり、結果今の屋久島の自然があると言えるが江戸時代に年貢を納めるための伐採から始まり昭和40年代まで続いた屋久杉伐採の歴史。その時代背景を経た今の屋久島の森は決して手つかずの森ではない。人々が山の神を敬いながら自然とともに暮らしてきた歴史の刻まれた森である。人と自然がともに生きてきた証が森に残り、また原生の森と伐採の歴史からの再生の森が見られる。現在、屋久杉の生木の伐採は禁止されており、縄文杉などの著名木については樹勢回復措置が行われている。また観光産業の発展による入山者の増加、環境負荷など新たな問題も出てきているが、世界遺産登録による課題と現状については、また後にふれたい。

屋久島移住のなぜ

大阪で生まれ育った私が屋久島に出会ったのは二十歳の時である。奇しくも世界自然遺産に登録される半年前の1993年6月のこと。それまでの私にとって屋久島は教科書に掲載されていた縄文杉と、日本一のウミガメ産卵地であること、ということしか知らない。当時動物園の飼育員として勤



めていた父がニホンザルの生息の南限地である屋久島にその生態などを観察に行くという。時期は屋久島でのウミガメ産卵最盛期。旅費は後からバイトして半分は返済するから何はともあれ連れて行けと懇願。それが私の屋久島初上陸となる。

屋久島初上陸から10年前の小学5年生の夏に和歌山のみなべ町で初めてウミガメの産卵を観察した私は、その生き物に心を奪われてしまっている。その後も毎年夏になればウミガメに会いに出かけていた私にとって屋久島は憧れの地。父と一緒にサルを追ひ、カメを追ひ、山を歩いて過ごした。一週間の屋久島滞在で私は「大学を卒業したら屋久島に住みたい。」と自分の生きてゆ

く場所を決めている。なぜ屋久島だったのかと聞かれれば「海があって山があって川がある。そして自然とともに生きる人々の暮らしがある。ニッポンの景色がここにあると感じたから」生まれ育った大阪など都会ではなく、日本のどこか自然の豊かな場所で仕事をしたいと考えてはいたが、どこで生きてゆくか悩んでいた時期だった。初めての屋久島から2年後、自分の決意がどれだけ本気なのか自ら問いかけるように今度はひとりで屋久島へと向かう。一ヶ月間ウミガメ生態調査ボランティアに参加しながら屋久島での仕事や住まいなどを探した大学生生活最後の夏。そして当時の屋久島ではまだまだ認知度の低かったネイチャーガ

イドとして採用が決まる。その仕事は日本の自然の素晴らしさと、そこに生きる生物の現実をたくさんの人と一緒に考えてゆきたい、と思い就きたいと望んでいた仕事である。

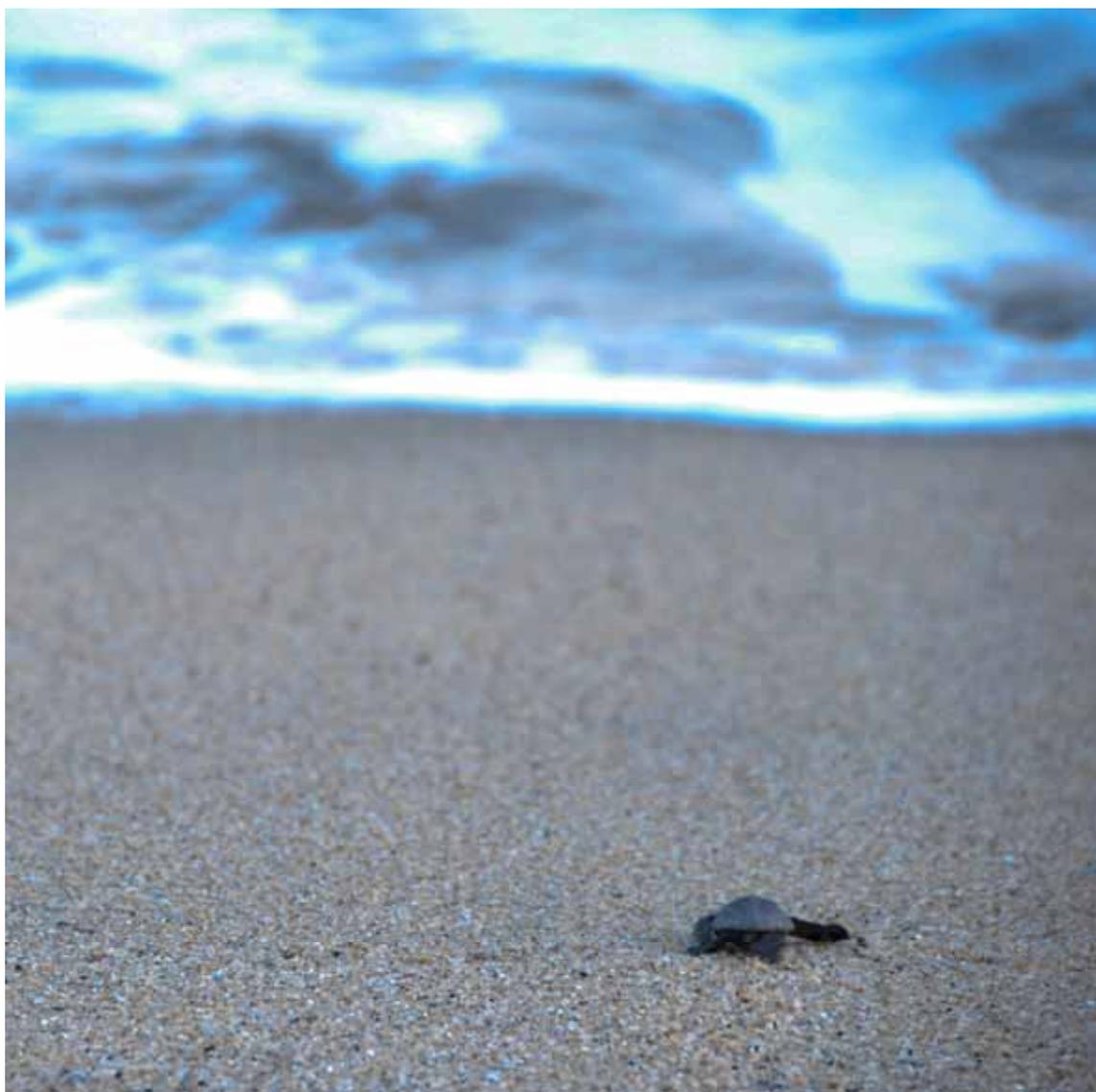
縄文杉が今生きる意味や、ウミガメが生まれてすぐに海へまっすぐ向かう意味。

私たち人間が知っていることは極わずか。

でも私たち人間が出来ることはまだまだたくさんある。一緒に考えることから始めてみませんか、そう問いかけることで相手の心に伝わるものが何かひとつあれば嬉しい。



人は知ることによって優しくなれるから。その優しさから溢れる笑顔がまた次の人へ伝えられ広がってゆくことで変わるものがあるのではないかと信じている。



人間の、自然の、何が本来の姿なのか、それを屋久島で考えながら生きていきたいと思ひ辿り着いた屋久島であるが、移住したばかりの頃は屋久島で3年やってみて、もし他に行きたいところが出てきたらそれはまたその時に考えれば良いと思っていた。しかし現実には認めてもらえるのに3年はか

かる。3年経って独立し、もうちょっと頑張ってみようと思う。5年経てば屋久島に骨を埋めたいと思うようになる。10年経って念願の自分の家を持つ。

気が付けばやくしまに暮らして15年。

大野 睦 BLOG やくしまに暮らして
<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>



執筆者一覧

キタムラ シンヤ

グローバル教育研究所代表取締役。日本社会臨床学会、日本教育カウンセリング学会、対人援助学会会員。現在、立命館大学大学院応用人間科学研究科に所属。2000年、京都府亀岡市に自らの研究フィールドとして「グローバル教育研究所」を設立、同年、学びの共同体「アウラ学びの森」、2005年には、フリースクール・通信制高校サポート校「知誠館」を開校し、自らの理論研究と教育実践を通して21世紀の教育モデルの実現をめざす。また、2005年より京都府教育委員会、2009年より京都府庁青少年課の研究委託事業を受託し、教育に関わるプロジェクトを行政と共に企画実行している。

サトウ タツヤ

東京都立大学人文学部卒。博士(文学)。立命館大学文学部教授。日本質的心理学会事務局長、『パーソナリティ研究』、『Culture and Psychology』などの編集委員を務める。立命館大学の「生存学創成拠点」、「法と心理学研究拠点の創成」で研究活動に従事。専門は文化心理学・質的心理学・心理学史。医療・経済・教育など現実の社会問題と心理学の接点を扱う社会心理学研究を目指す。

著書・論文多数。主著として単著の『日本における心理学の受容と展開』北大路書房(2002)、単編著『TEM ではじめる質的研究』誠信書房(2009)など。

ダン アソブ

採用支援の分野では一年で一番多忙な時期に突入しています。学生たちは夏休み中にインターンシップに出かけますので、受け入れ企業担当者さんと当人の激励に通う日々。授業のヒントが一番得られる場面です。

一方、支援させてもらっている企業とは10月1日を目指し採用戦略立案に頭を悩ます日々。一年で一番「書くネタ」が集まる時期ですが、一番書く時間がない時期でもあります。

アラキ アキコ

大阪在住、福岡県生まれ。大阪の精神科と島根県の生殖医療施設の心理カウンセラーを兼務。立命館グローバル・イノベーション研究機構客員研究員(研究テーマ:不妊臨床と家族援助) 生殖医療対人援助研究会&島根家族研究会主宰

現在、島根県内で家族援助者のネットワークづくりに奔走中。他府県からの要請も受け付け中。「生まれたときから人見知りをしたことがない」だけが取り柄。要介護&身体障がいをもつ母の介護家族やっています。

オカダ リュウスケ

広島で、子どもの精神科を34年近くやってきました。いろいろ兼務していますが、気持ちはずっと児童相談所にあります。そこは、精神医学の片隅に位置する児童精神医学のさらに辺境の地です。何度も途中下車をしかけましたが、結局、終着駅がぼんやり見えるところまで来ました。駅を降りて雨が降っていないければ、今度はあてもなく歩いてみようと思います。

フジ ノブコ

立命館大学大学院応用人間科学研究科教授、専門は臨床心理学、コミュニティ心理学、集団精神療法。大学の心理・教育相談センターの他、精神科クリニック、保健所でも臨床に携わっている。来年の3月立命館大学で開催する、日本集団精神療法学会第28回大会の準備で忙しい日々を過ごしている。そんな中、故郷での中学の同期会に参加し、45年ぶりに合う人もいて、「抑圧と忘却」をまざまざと体験した気分になったこの夏だった。

カワギシ ユリコ

臨床心理士 北海道での生活ももう20年を過ぎ、すっかり道民になりました。家族は夫と犬1匹。娘三人は皆それぞれ自立していますが、孫を抱けるのはいつになることやら。(かうんせりんぐるうむかかし) 主宰 千歳市教育委員会スクールカウンセラー、石狩市こども相談センター臨床心理士・家庭相談員アドバイザー、千歳市はじめ五市の子育て検討会スーパーバイザー、札幌学院大学臨床心理学科非常勤講師他

ナカジマ ヒロミ

CON カウンセリングオフィス中島代表。佛教大学、龍谷大学、武庫川女子大学、関西福祉科学大学の非常勤講師。大学では「家族ソーシャルワーク」「カウンセリング」等の講義を担当しています。家族療法の相談機関勤務を経て、1995年に個人オフィスを開業。今年の秋には15年周年を迎えます。現在、家族支援の新しい講座やオープンオフィス等を企画し、いろいろな方に来ていただきたいと思っています。

カワサキ フミヒコ

大阪市の2児放置死事件以来、マスコミ等からの取材や問い合わせ、出演依頼が急に増えてしまいました。読売新聞、西日本新聞、朝日新聞、世界、NHK、日本テレビ、BSフジなど。しんぶん赤旗からも来ました。現役の児童相談所職員は、立場上言えないこともあると思って、私個人はこれらに応じることとして、なるべく現場サイドに立って発言するよう心がけていますが、なかなか難しいです。そもそもあの事件は想定外でしたから。

ハヤカシ カズオ

現在、児童相談所に勤めています。児童相談現場での勤務経験が合計20年を超えてしまいました。心理判定員として出会っていた小中学生の子どもがすでに親になり、子育てをしている年齢になっています。

相談ケースの保護者として、再会することが何度かあり、複雑な心境の今日この頃です。

ウラタ マサオ

京都造形芸術大学で保育士養成科目の指導を行う傍ら、中学校のスクールソーシャルワーカーとして、教育現場へも出ています。アメリカなどでは長い歴史があるスクールソーシャルワークですが、日本での歴史は今始まったばかりです。本誌拙稿では、学校教育現場で外部の専門職が果たす役割や課題、可能性について綴っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

ミズノ スウ

石川県在住。1983年より自宅で週一回「紅茶の時間」をはじめ、「ともの時間」など、コミュニケーションワークショップ水先案内人。

著書に、「雪の手みやげ」「ありがとうのパッチワーク」紅茶3部作として「まわれ、かざぐるま」「出逢いのタペストリー」「きもちは、言葉をさがしている」、共著に「ほめ言葉のシャワー」ほか。

「紅茶なきもち」

<http://kimochi-tea.cocolog-nifty.com/blog/>

ニシカワ ユリ

実習指導のため、8~9月は毎日近畿圏を駆けまわっています。その間を縫って、1月の社会福祉士国家試験に向けた、「受験対策講座」を着々と準備中。前回から傾向がガラッと変わったこの国家試験は、実践力を重視した内容です。つまり、現場感覚がとっても重視されている(ように思いますが、私は)。「受験資格はあるけど、仕事が忙しくて、受験する気が起きないんだよなー」という現場職員の方、ぜひぜひチャレンジして下さい！

キムラアキコ

今年41歳！人生の折り返し地点です。あと40年くらいはある(たぶん)我が人生。三人の子ども、少しずつ手が離れ自分の時間も持てるようになりました。自分のために楽しもう。痩せ型、大股速歩き、パンツスタイル、で女性らしくない私が珍しくスカートに挑戦した夏でした。(しかも、ミニ!)似合うと思えば似合うのです。(笑)

マガジン第2弾の原稿は、苦しみました。気分転換に好きな曲を聴いたり、お気に入りの本のページを開いたり、こちらはさながら女流作家です。

おめでたい自分がおもしろい！めでたし、めでたし。

オオノ ムツミ

何を書いてもよい、というお言葉に甘えて初めての原稿を書きあげました。全く異種な世界から皆様のリフレッシュになれば幸いです。

有限会社ネイティブビジョン 代表取締役

mutsumi@native-vision.com

鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦799

屋久島観光センター 2F

TEL.0997-42-2013

FAX.0997-42-2916

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

<http://www.native-vision.com/>

ムラモト クニコ

この夏、シナイ山に登り、紅海を潜り、ラクダに乗ってピラミッドを巡った。ナイル川の東岸から西岸にある王家の谷に沈む夕陽は圧巻だった。壮大な自然と時に身を曝し、人の生は女神ヌートの体内を航行する太陽の1日分にすぎないのだと思った。この夏、友人を見送った。人生の折り返し地点に立って、これからの生き方を思索している私である。



オノエ アケヨ

国内で最初の米国ドラマセラピー学会公認ドラマセラピストとして、ドラマセラピーのセッションやトレーニングを種々の場で行い、その普及や教育にいらそむ。

ドラマセラピー教育・研究センター代表。2007年度より立命館大学大学院応用人間科学研究科教授も務める。治療セッションとしては、現在、アルコール・薬物・ギャンブルなどの依存症者の回復にむけて力を注いでいる。

ヤナガワ マサヨリ

平成3年、学習院大学経済学部卒。同年、競馬専門紙「競馬研究・競馬ブック」に入社し、編集記者として新聞・雑誌製作、コラム執筆、血統評価などに携わる。平成11年、中央法規出版に入社。月刊誌「ケアマネジャー」の編集スタッフとして、市町村行政や介護現場の取材をメインに活動。20年4月、受験関連書籍の担当課へ異動し現在に至る。専門知識はサラブレッド血統学。特技はピアノ。スポーツは競技としてはテニス、もう少しゆるいスタンスでマラソン。趣味はドライブ、愛車はMR2。

ナカムラ タダシ

私は立命館大学の教員です。学部は産業社会学部、大学院は応用人間科学研究科です。社会病理学、臨床社会学、社会臨床学を専攻しています。犯罪、非行、虐待、ドメスティック・バイオレンス等の加害者の脱暴力支援についていくつか現場で実践を重ねています。

さらに、暴力とも重なりますが、薬物、ギャンブルというアディクションにも関心があります。こうした逸脱行動を半ば不可避免的にうみだしてしまう社会の様態(だから社会臨床)への尽きない興味があります。その深淵をみつめるために奇想天外な想像力を喚起させてくれる映画、演劇、小説等に大いなる関心があります。

ツルヤ シュイチ

実家(宮崎県都農町)の「聖愛幼稚園」にて助手として3年間手伝っていたが、「田舎はいやだ」と飛び出し、東京の専門学校で資格をとり、東京の「葛飾みどり幼稚園」で教員として5年勤務。その後師と慕う日名子太郎氏のもとで「オイスカ香港日本語幼稚園」に2年間勤務。その後、妻の実家である静岡の「原町幼稚園」に勤務して今年で20年目に入った。園長歴は8年。幼稚園でも夏休みに完全休業の園は少なくなってきました。夏の預かり保育を行っているからです。お盆をはさんで4日間は休園しますが、休園日は私の出番で、暑い夏の植栽の水やりとカメのエサやりは欠かせません。今年はとてまたたくさん蝉が木に止まっていたので片っ端から捕ってカメに食べさせてあげましたら、バリバリと喜んで食べていました。すでに8月25日には2学期が始まり、園児募集のための入園案内などの資料作りに追われる毎日に突入です。

ダン シロウ

編集後記にたっぷり。

チバ アキオ

編集後記にたっぷり

またまた長い 編集後記

編集長（ダン シロウ）

新しいことを始めるとき、およそのイメージが掴めていないプランのある場合と、出会い頭の暗中模索のような時があると思います。「対人援助学マガジン」の場合は後者に近かったと言えます。ただし暗中ではなく、輝きのありそうな中の模索でしたので不安はありませんでした。

そんな時、「天地明察」沖方 丁（ウブカトウ）著を読みました。江戸時代、中国の暦を日本でそのまま使っていることからくる誤謬を計算し、大和暦を提案した男の物語です。高校の日本史授業で名前くらい聞いた覚えのある「和算」の関孝和も天才数学者として登場します。およそ私とは縁遠い存在の主人公の、皆目分からない題材の物語でありながら、ハラハラ、ワクワクしながら、450頁を三日で読み終えました。

未来の結果を支配できる者はいません。願わくば努力は報われたいですが、その見通しだけで「する・しない」を決めたくないと思います。記憶の中にプロセスの重要性が裏切られたことはありません。始めたことの多くが継続中になるので、2号発行にあたって又ひとつ、いつまで飛び続けるかしのれないものを本格離陸させた感覚でいます。

いかがでしたか、創刊号 82 頁の WEB 雑誌。なかなかの出来映えだったのではないかと編集長は満足しています。

そして第二号。更に充実するだろうと楽観的予測ではいたのですが、予想以上の進化ではないかと思っています、いかがでしょう。まだそれほど多くはない読

者の方達にも、このサイクルで第二号が届くのは嬉しいのではないのでしょうか？

作業しながら考えたことですが、このマガジンの発刊スタイル。売れ行きの話が不要で、在庫管理の負担なくHP上にはバックナンバーを残しておくことが出来ます。今後も永く読んでいただける機会を確保したまま、号を重ねてゆける、なかなかの方法だと思っています。

関心分野の連載だけをダウンロードして、自分用に編集した「カスタマイズ対人援助学マガジン」を作ること可能なわけです。どんな読み方をしていただけるだろうと楽しみにしています。

今号から新たに二つの連載が開始しました。編集長としては予定通りですが、思いが形になって広がってゆくのは快感です。次号以降も、まだまだ新たな分野の新連載を模索するつもりです。

その一方で、雑誌が生き物である以上仕方ないことかもしれませんが、事情が動き出して「形づくる人々」が今号で中断になります。残念ですが、何が起こるか誰にも分かりませんので、楽観的に今を受け止めたいと思います。

第二号の執筆者は 22 人、この方々の原稿が全部揃ったのが、8月29日未明でした。一応告知として8月25日締め切りとお伝えしてありました。8月末だと思っておられた方もあったのですが、一度の直前告知で見事全員分揃いました。創刊号より長文になった方が多くなりました。各筆者の責任校正という立場をとっていますので、気楽な編集です。有り難いことだと思って、全体のレイアウトに取りかかりました。

創刊後してしばらくして、学会事務局長でHPの管理もしてくれている川原さんから、こんなものを作ってみましたと印刷された「対人援助学マガジン」が届きました。

古い人間だからでしょうか、WEB 上で見た時の感激とはちがった喜びがありました。雑誌を手にするの

も悪くない！そう感じてしまったので、執筆をお願いしている方達にも、これを届けたいと思いました。誰もこういうモノが送られてくるとは思っていないはずです。

そこで、事務局長に印刷屋さんを紹介して貰って、100部限定で印刷版の創刊号を作りました。私が勝手にやっていることだから、経費は自分持ち。

そして第二号の執筆依頼文を同封して、連載筆者に発送しました。ダウンロードしたモノとはひと味違う出来上がりになっています。(全文面カラー印刷など出来ないの、表紙以外はモノクロです)。驚きの声が予想通り、複数届きました。

この残部が少しありますので、実費(1000円+送料)でお分けしてもいいなと思っています。希望の方は編集部にお知らせ下さい。残部があれば第二回大会会場にも出しておきたいと思しますのでお探下さい。

(マガジン編集部)

604-0933 京都市中京区山本町438

ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

世間は、家族にまつわる嫌な事件ばかりを報道して、みんなでそれをしゃぶり尽くすハイエナ気分の蔓延です。でもそんなところに今日の本質があるとは思っていません。このマガジンで述べられているような日常が、様々な分野で、日々繰り広げられているのを現実と呼ぶ選択をしたいと思います。

ゴシップの面白さに慣れた感性も確かに今日の日本人に刷り込まれています。しかしこのマガジンのコンテンツの面白さを感じる力も備わっているはず。何に興味を持つかがその人だという面があるでしょう。既存のモノばかりに自分を席卷されてしまわなくてもいいのです。自分が良いと思うことは、自分の手で実現してしまう。これが一番だと思います。出来ないことを語るより、やってしまえばいい。歳をとってきたからかもしれませんが、そのために必要なエネルギーやコ

ストを厭う理由は少なくなりました。

夏にちょっとバタバタしていたら、もう第二号の原稿を督促する時期になってしまいました。執筆者の皆さま、本当にご苦労さまでした。申し訳ない気分がないわけではありませんが、早速第三号の原稿締め切りは11月25日です。とにかくどんどん書いておいてください。季刊誌って、結構サイクルが早いです。慌たしい事に巻き込んでしまいました。お許し下さい。でも、何か面白いことが始まった感、ありますでしょうか？

編集員(チバ アキオ)

第2号、編集者の特権でみなさまより、一足お先に読ませていただきました。1号も、かなり読みごたえがあるものでした。ですが、それは、あくまで地ならしだったのです。これから、わたしが語りたいものはここの辺のここのことですよという。

そして、2号。いよいよ本編が始まっていきます。

2号が楽しみだった私は、2日で全て読みました。私も学会というものには複数入っています。しかしこれまで、学会関連の発行物を読み切ることはありませんでした。そして、次回がたのしみ！ということもありませんでした。(私がこんな人だからというのはもちろんありますが)

写真あり、カラーでもあり、冊子版でも入手可能。ネット上なら無料で会員以外でも入手可能。「FREE」(クリス・アンダーソン著)などでも話題のように、電子媒体のものの多くが無料化に進んでいるといわれています。

そのなかで学会というものがこれまで以上のものを学会員には届けていく。これは、旧来の学会モデルへのチャレンジというおもしろさもあり編集係としても楽しんでいるところです。

カンヌで賞を獲った映画「ペルセポリス」に代表されるようにマンガを使ったジャーナリズムが注目されています。マンガの強みは絵があるので、お年寄りから、

子どもまで、そして、日本漫画の輸出にみられるように国が変わっても読むことができるということです。

これは、難しい(とされる)政治記事などを読む人は限られるけれどもマンガなら多くの人が読める。それならば多くの人に伝わり、これまでより伝播する可能性が高まるということです。

この役割に似たようなものがマガジンにはあるように思います。もちろん、これまでの学会の目的であるその領域の学問的な追求もありながら、その一方で多くの人が読み、知ることができるものを社会に届けていく。

執筆者の皆さんが体験されている多くの現場があり、それを知ること、また、読者の人が自分の現場に反映させていく。マガジンが結果、ひとつの対人援助の取り組みとなるよう関わっていきたいと思います。

対人援助学マガジン

No. 2

2010年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

マガジンに対するご意見ご感想

danufufu@osk.3web.ne.jp

にお寄せ下さい。次号に掲載させていただく場合もあります。

表紙の言葉

「表紙は毎号、変えようと思っています」と創刊号に書きました。でも、毎号あまりにも変化しすぎるのはよろしくないと思うと助言をいただきました。本文レイアウトも、変更する必要があるものは変わるので、それ以外は変えすぎないようにしました。

創刊号の表紙は気に入っていましたので、ベースをそのままにして、登場するサービス業の人だけ変えてみました。しばらくこのスタイルでカラーバリエーションを楽しんでいただきます。

今回登場した女性は、タイ・バンコクの水上市場付近でのスケッチからです。元気な街は、物売りの勢いが違います。屋台店や生鮮食料品、怪しげな商売も丸ごと、活気元です。

下の乗り物はトゥクトゥク。三輪タクシーで、これも街の名物です。排気ガス吸わされ放題で、乗り心地も悪く、メータータクシーと比べて、安くもないし、ボラれたりもします。

初めて訪れた時、ホテル前にたむろする運転手に、到着早々とんでもない料金をふっかけられました。二日目以降にそれは判明するのですが、平気で翌日も声をかけてきます。覚えていないわけではないのです。交渉すれば大幅に安くなるのです。

それが面白いなんて変ですが、まだ生き延びているでしょうか？バンコクは刻々様変わりしていると聞きます。近代化の合理的変化について行けないまま、滅びてゆく物も人も、街の構成要素です。

団士郎